

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集

平成25年度発掘調査報告書

不動ノ滝遺跡 上長部館跡 金浜V遺跡 乙部遺跡
北野XⅢ遺跡 小滝沢遺跡

ほか調査概報（32遺跡）

2014

(公財) 岩手県文化振興事業団

平成25年度発掘調査報告書

平成25年度の発掘調査の概要について

平成25年度は32遺跡、163,556m²で開始したが、最終的には38遺跡195,224m²について発掘調査を実施した。これらの遺跡は、沿岸部を中心に県内の8市4町2村にまたがっている。最終結果を前年度と比較すると、遺跡数で16遺跡、面積で約100,000m²増となっている。遺跡数・調査面積の急増は、東日本大震災に係る復興関連調査に起因するものである。復興調査は、沿岸部の高台移転及び三陸沿岸道路建設に関連するものであり調査の迅速化が急務とされている事業である。通常調査は、主に内陸部の遺跡であり、今年度は、農地整備事業や北上川河川改修事業に関連したものである。

縄文時代では、早期中頃の竪穴住居跡が、久慈市外屋敷XIX遺跡と山田町石崎II遺跡で複数見つかっている。楕円形状で、住居の内部に炉の施設をもたないものである。前期では、大船渡市峯岸遺跡・田野畠村野場I遺跡・宮古市赤前III遺跡で竪穴住居跡が見つかっている。特に赤前III遺跡では前期末葉の長軸約13mの大型の竪穴住居跡が検出された。中期では、大船渡市中野遺跡、山田町石崎II遺跡・沢田III遺跡・間木戸II遺跡、田野畠村浜岩泉III遺跡・島越XIV遺跡、岩泉町小成II遺跡で複数の竪穴住居跡が見つかった。中野遺跡では、原産地が特定されるアスファルトなどが出土している。沢田III遺跡、島越XIV遺跡・浜岩泉III遺跡では、竪穴住居跡と合せて貯蔵用の大型の土坑が多数見つかっている。縄文時代後期から晩期では、田野畠村皆産遺跡で竪穴住居跡が見つかっている。山田町豊間根新田I遺跡では、県内最多となる縄文時代の陥し穴状遺構が366基見つかった。当遺跡は豊間根川沿いに設置された大規模な狩場であると推定される。形態にも円形、小判型、溝状と各種確認された。特色として、陥し穴状遺構の底面に副穴（底面に穿たれた小穴）を持つ事例が多く、石崎II遺跡でも複数例認められた。

弥生時代では、北上市千刈遺跡で古代面の下位から弥生時代初め頃の遺物包含層（土器捨て場）が確認され、多数の土器が出土した。さらに、この包含層中から小判型の墓壙が複数見つかっている。墓壙の内部に埋葬人骨の一部や埋葬時に遺体に撒かれた赤色顔料が検出された事例もある。弥生時代後半では、内陸部でも検出事例の少ない竪穴住居跡が田野畠村浜岩泉III遺跡でまとまって見つかった。

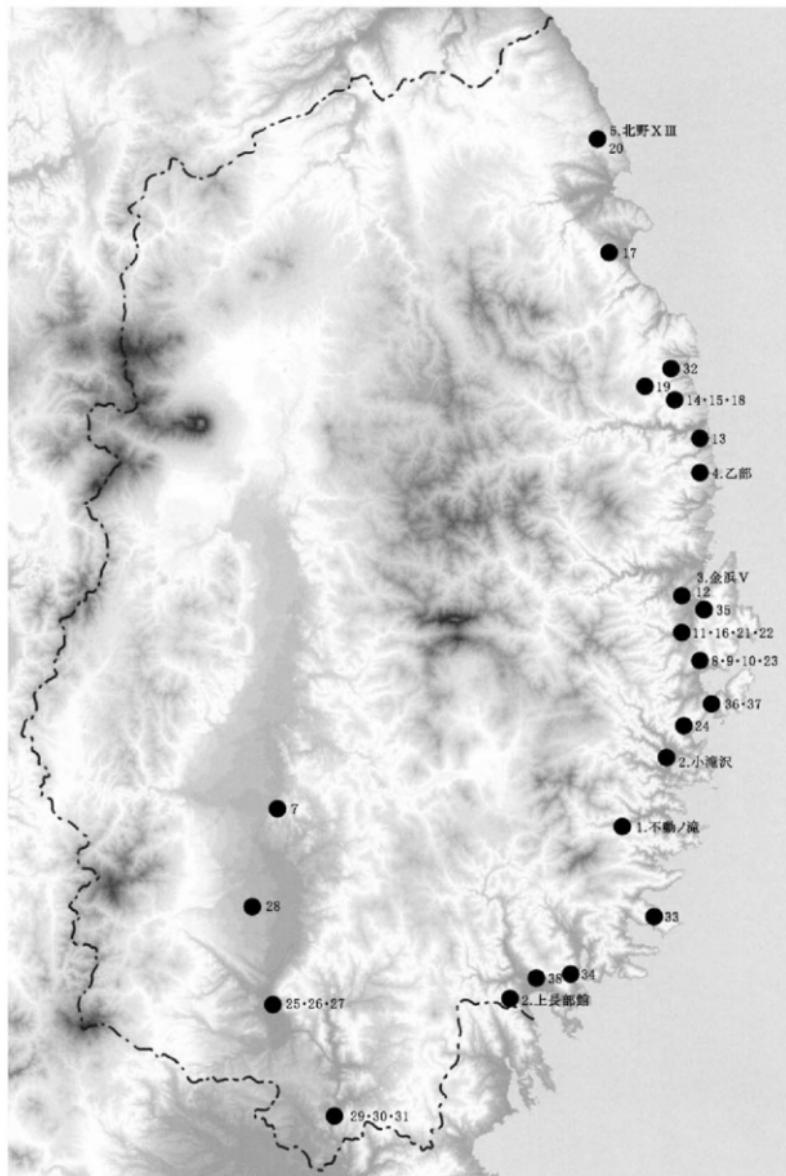
奈良時代では、宮古市津軽石大森遺跡で30棟以上の竪穴住居跡が見つかっており、沿岸地域ではこの時期の大規模集落として特筆される。また、内陸の奥州市漆町遺跡でも20棟以上の竪穴住居跡が見つかっている。

平安時代については、昨年度に続き発掘調査が行われた北上市千刈遺跡で50棟以上の竪穴住居跡が検出され、北上川沿いの西岸に大規模な集落が形成されていたことが明らかになった。田野畠村浜岩泉III遺跡・山田町田の浜館跡・石崎II遺跡・沢田III遺跡・間木戸V遺跡・焼山遺跡・宮古市金派V遺跡・払川III遺跡・赤前III遺跡では、沿岸部に特徴的に見つかる製鉄関連遺構が検出された。それぞれの遺跡により遺構の内容は異なっている。焼山遺跡では、炭窯跡・製鉄炉跡・鍛冶炉跡・鍛冶工房跡・排滓場跡・沢跡など製鉄に関連する一連の遺構が見つかっている。

中世では、陸前高田市の上長部館跡・花館跡（旧飯森場遺跡）、山田町田の浜館跡・野田村伏津館跡を調査した。前年度に引き続き調査された花館跡では、掘立柱建物跡・柵列・土塁・堀跡・切岸・虎口が見つかっている。伏津館跡では、土塁・竪穴建物跡・曲輪・堀跡・掘立柱建物跡などが見つかった。15世紀代の青磁・白磁・常滑の破片や銭貨（永楽通寶・洪武通寶・北宋錢）等も見つかっており、次年度の調査が期待される。

今年度は、復興関連調査が主体ということもあり、沿岸北部（久慈市）から南部（陸前高田市）までの、海岸線に沿った調査が行われた。各時代、各地域によりそれぞれ特色ある様相を呈しており、内陸部に比較して大きな調査事例の少なかった沿岸地域において、新たに貴重な事例が多数蓄積された意義は大きかった。

（調査課長 斎藤邦雄）



I 発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(1) 不動ノ滝遺跡

所 在 地	釜石市甲子町第8地割178-76ほか	遺跡コード・略号	MG 70-2207・FNT-13
委 託 者	国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所	調査対象面積	2,000m ²
事 業 名	東北横断自動車道釜石秋田線	調査終了面積	874m ²
発掘調査期間	平成25年4月10日～5月14日	調査担当者	藤本玲子・村上絵美

1 調査に至る経過

不動ノ滝遺跡は、東北横断自動車道釜石秋田線「釜石道路（釜石～釜石西）」の道路改築事業に伴い、事業区域内に遺跡が存在することから発掘調査を実施することとなった。

東北横断自動車道釜石秋田線「釜石道路（釜石～釜石西）」は、釜石市甲子町第13地割（釜石JCT（仮））から釜石市甲子町第7地割（釜石西IC（仮））を結ぶ延長約6kmの自動車専用道路であり、釜石JCT（仮）において三陸沿岸道路と接続する。

当該区間は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災からの復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年12月の第三次補正予算により「復興支援道路」として新たに事業化が決定され、平成24年11月4日に新規事業化から1年以内の着工となる起工式を釜石市甲子町地内において開催し、工事に着手している。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年2月21日付け国東整陸調第169号「東北横断自動車道（釜石～釜石西）埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」及び平成24年9月14日付け国東整南陸調品確第22-3号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課あて試掘調査の依頼を行った。

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課では、平成24年3月26日、平成24年9月14日及び平成25年1月17日に試掘調査を実施し、平成25年2月15日付け教生第1560号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、埋蔵文化財が確認されたことから発掘調査が必要となるので工事に先立ちその取扱について岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と協議が必要な旨回答があった。

その結果、岩手県教育委員会教育長から平成25年3月14日付け教生第1707号「平成25年度埋蔵文化財発掘調査事業について」により（公財）岩手県文化振興事業団から提出された計画書に基づき協議及び契約事務を取り進めるよう通知があったことから、（公財）岩手県文化振興事業団との協議を経て平成25年4月1日付けで発掘調査に係る委託契約を締結、調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所)



第1図 遺跡位置図と周辺の遺跡

2 遺跡の位置と立地

不動ノ滝遺跡が所在する釜石市甲子地区は釜石市の中央西部に位置し、北は栗橋地区、東は釜石地区、南は唐丹地区、西は遠野市に隣接する。地区中央に2級河川の甲子川(全長24.2km)と支流の小河川によって谷底平野が形成され、甲子川低地に区分される。北東～北西に片葉山、松倉山、篠倉山、仙盤山が連なり雄岳山地を形成し、南西～南東にかけて愛染山、五葉山からなる五葉山地、鳩ノ峰、鍋倉山からなる荒金山地、松倉山、篠倉山からなる松倉山地が周囲を囲む。甲子川低地付近に形成される段丘、平野、山間を流れる小河川によって形成された扇状地、山麓からなる緩斜面は狭小範囲に限られる。

遺跡は、JR釜石線松倉駅から南西へ約1.3km、大畑不動ノ滝西側、甲子川にかかる不動橋南西に位置し、甲子川右岸に合流する不動沢砂岩の河岸段丘上に立地する。調査区の標高は約84.4mである。石垣で4段に区分けられた最下段にあたる水田で、調査区東側は水田造成の際、斜面に約2mの盛土を行っている。盛土中から出土する岩石はこの一帯を形成する珪岩質岩石、輝緑凝灰岩、砂礫である。

周辺には(以下、第1図参照)、不動沢を挟んで東に約30mで大畑团地遺跡(2)、さらに東、公園を挟んで約40mのところに坪内遺跡(3)がある。また、不動ノ滝遺跡から南東、緩やかな緩斜面上には大洞1遺跡(4)、大洞2遺跡が(5)、甲子川を挟み北側の河岸段丘上に種ヶ沢遺跡(6)、古館遺跡(7)、洞閑遺跡(8)が所在する。平成17年度の釜石市遺跡詳細分布調査によって不動滝遺跡から不動ノ滝遺跡に遺跡名が変更された。

第1表 周辺遺跡分布表

No.	遺跡名	時期	種別	No.	遺跡名	時期	種別	No.	遺跡名	時期	種別
1	不動ノ滝	縄文後・晩・弥生前期	散布地	4	大洞1	縄文中・後	散布地	7	古館	縄文後・後・中・近世・近代	城館・墓塚
2	大畑团地	縄文	散布地	5	大洞2	縄文中・後	散布地	8	洞閑	平安	散布地
3	坪内	縄文早・前・中・晚・弥生	散布地	6	種ヶ沢	縄文中・後	散布地				



第2図 調査区位置図

3 基本層序

I 層 : 10YR 2 / 1 黒色 砂質シルト 層厚 5 ~ 10cm 現表土・耕作土

II 層 : 10YR 1.7 / 1 黒色 砂質シルト 層厚 10 ~ 200cm 旧表土・盛土

III 層 : 10YR 5 / 6 黄褐色 砂質シルト 層厚 40 ~ 80cm 地山 ※遺構確認面

IV 層 : 10RY 7 / 4 にぶい黄橙色 砂礫 層厚 不明

調査区東側は、水田造成のために約 2m の盛土がされており（II 層）、黒色土の下からは多量の大穢が検出される。昭和35年頃は、表土面に大量の土器が見えていた。旧地形から見ると遺構は谷底上面肩際につくられたことが分かる。

4 調査の概要

今回の調査で検出した遺構は土坑 7 基である。これらはすべて III 層上面で確認した。調査区は安全対策の為、法面をつくり掘削を行い、実際の調査を行ったのは第3図の範囲である。なお、各遺構の土層注記は「土色・土質・粘性・しまり・混入物」の順に記載している。



第3図 遺構配置図

(1) 遺構

SK01 土坑（第4図・写真図版2）

調査区中央で検出し、SK02・07 と隣接する。平面形は円形である。開口部長軸 2.10m、短軸 2.00m、深さ 65cm である。底面からの遺物の出土はなく、いずれも流れ込みによる混入と考えられる。底面は IV 層砂礫層に達する。今回見つかった遺構の中では土器の出土量が最も多く、約 3478.2g である。下層から出土した炭化物は ^{14}C 年代測定試料 No.1 で、縄文時代晩期末から弥生時代前期への移行期頃に相当する。

SK02 土坑（第4図・写真図版2）

調査区中央で検出し、SK01・07と隣接する。平面形は円形である。開口部長軸1.54m、短軸1.50m、深さ78cmである。底面はIV層砂礫層まで達する。SK01に並ぶ形で見つかり、大洞C2式の注口土器（6）口縁部が出土した。貯蔵穴の可能性がある。

SK03 土坑（第5図・写真図版3）

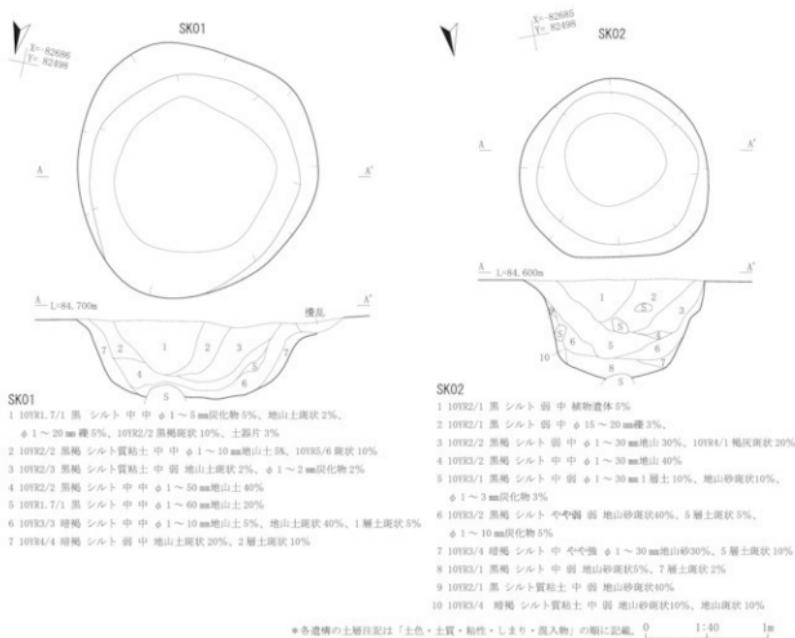
調査区北西で検出した。SK04に切られる。平面形は円形である。開口部長軸約1.49m、短軸約1.26m、深さ69cmである。SK01・02と底面形・壁の立ち上がりが類似している。石錐（45）が出土している。

SK04 土坑（第5図・写真図版3）

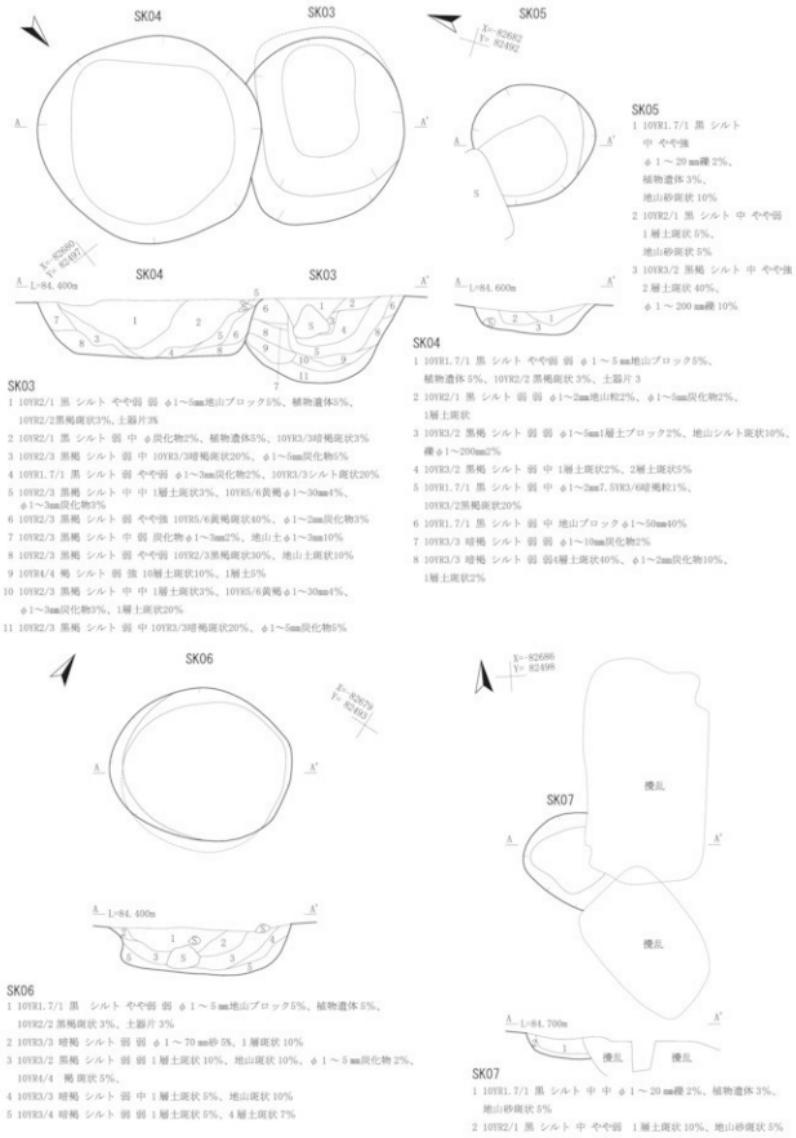
調査区北西で検出した。SK03土坑を切る。平面形は円形である。開口部長軸約1.82m、短軸約1.68m、深さ50cmである。SK05と底面形・壁の立ち上がりが類似している。波状口縁、突起、多重沈線、突帯がみられる浅鉢が出土している。

SK05 土坑（第5図・写真図版3）

調査区北西で検出した。平面形は円形である。近くにはSK06土坑がある。開口部長軸0.96m、短軸0.95m、深さ30cmである。底面、開口部に大型の礫がみえ、本遺跡内では遺構検出面下のIV層までの厚さが一番浅い場所である。出土遺物は縄文土器小片しかなく、時期は不明である。



第4図 SK01・02土坑



第5図 SK03～07土坑

SK06土坑（第5図・写真図版3）

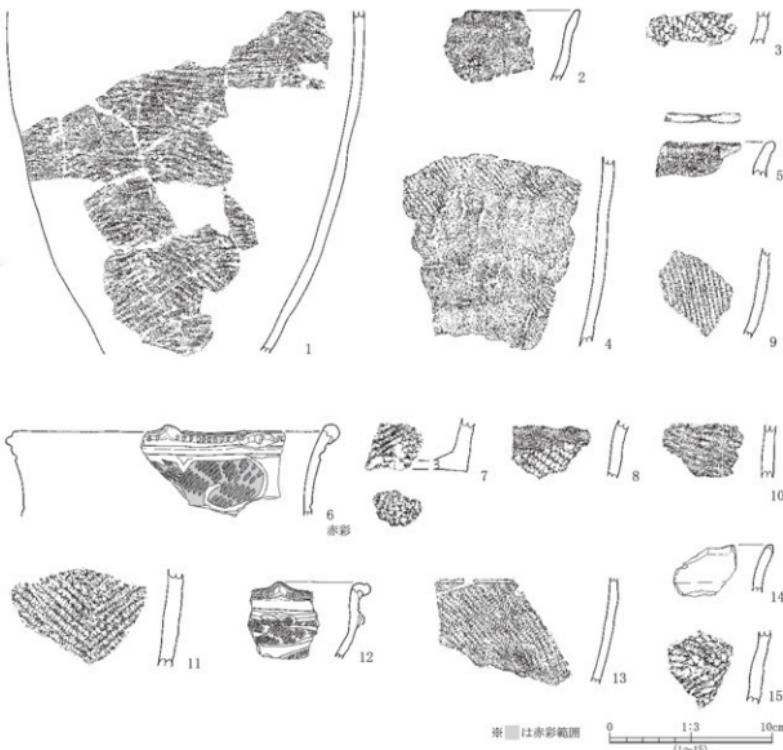
調査区北西に位置する。近くにはSK03・05がある。開口部長軸1.50m、短軸1.27m、深さ38cmである。ボタン状突起がつく土器(17)が出土した。流れ込みによる可能性が高い。また、下層から出土した炭化物は¹⁴C年代測定試料No.2で、SK01同様縄文時代晩期末から弥生時代前期への移行期に相当する。

SK07土坑（第5図・写真図版3）

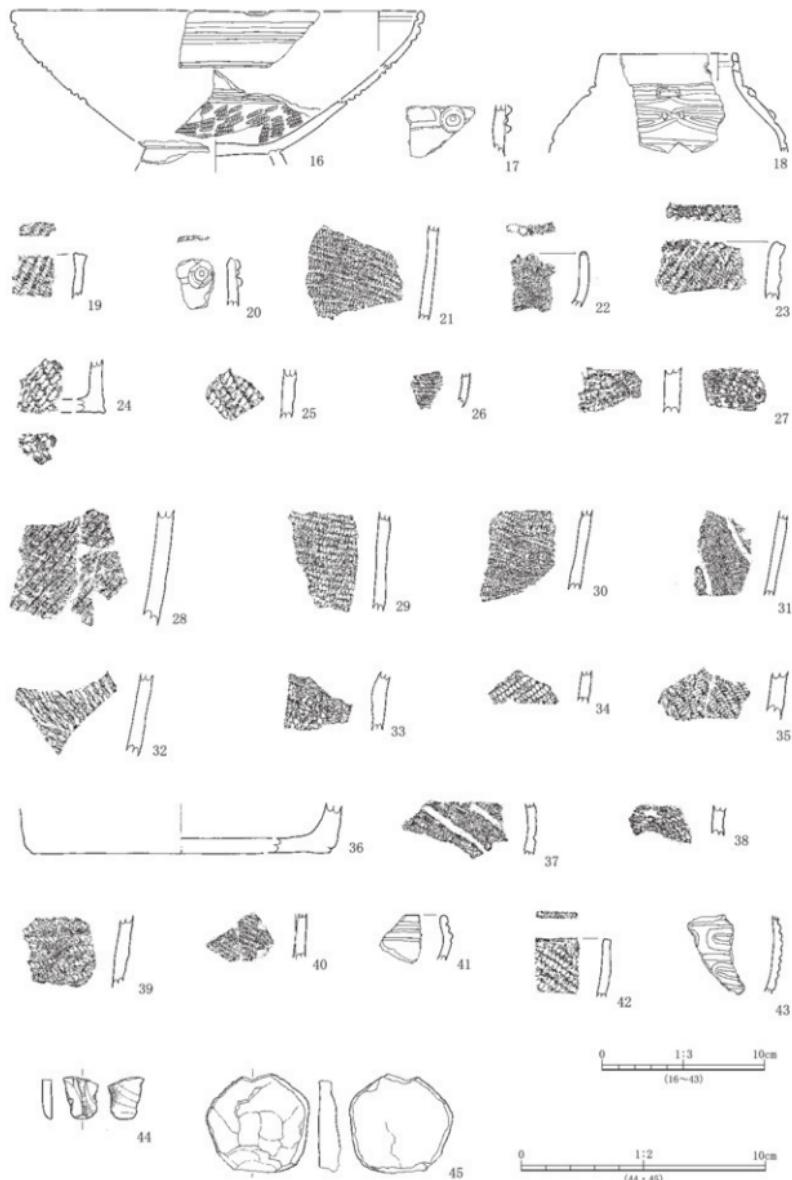
調査区中央から検出し、SK01・02と隣接する。平面形は不整形で、半分以上が攪乱によって破壊されている。開口部の長軸は不明、短軸0.8m、深さ28cmである。弥生時代前期の壺(18)が出土している。

(2) 遺物

縄文時代前期初頭土器片(2点)、晩期土器片(小コンテナ1箱)、弥生時代初頭土器片(3点)、石錐1点、碎片1点が出土した。土器にはボタン状突起のつく17・20、平行沈線、多条沈線など縄文時代晩期～弥生時代初頭が主体である。6の大洞C2式の注口土器口縁片は沈線区画内に赤彩が施されている。



第6図 出土遺物1



第7図 出土遺物2

第2表 遺物観察表

No.	出土地点	層位	種別	器種	部位	時期	備考
1	SK01	-	縄文土器	深鉢	胴部		
2	SK01	-	縄文土器	深鉢	口縁部		
3	SK01	-	縄文土器	深鉢	胴部		
4	SK02	1~2層	縄文土器	深鉢	胴部		
5	SK02	1~2層	縄文土器	深鉢	口縁部		
6	SK02	4層	縄文土器	注口	口縁部	縄文晩期	大洞C2、赤彩塗付
7	SK03	上層	縄文土器	深鉢	底部		
8	SK03	上層	縄文土器	深鉢	胴部		
9	SK03	上層	縄文土器	深鉢	胴部		
10	SK03	上層	縄文土器	深鉢	胴部		
11	SK04	上~中層	縄文土器	深鉢	胴部		
12	SK04	下層	縄文土器	鉢	口縁部	縄文晩期	
13	SK04	下層	縄文土器	深鉢	胴部		
14	SK04	1層	縄文土器	深鉢	口縁部		
15	SK04	-	縄文土器	深鉢	胴部		
16	SK04	-	縄文土器	台付鉢	胴部		
17	SK06	-	縄文土器	深鉢	頸部	縄文後期初頭	
18	SK07	-	弥生土器	壺	口縁~肩部	弥生前期	
19	調査区中央	II層	縄文土器	深鉢	口縁部		
20	調査区東	I層	縄文土器	深鉢	口縁部		
21	-	I層	縄文土器	深鉢	胴部		
22	SK03・04	-	縄文土器	深鉢	胴部		
23	調査区南西	I層	縄文土器	深鉢	頸部		
24	調査区南西	I層	縄文土器	深鉢	底部		
25	調査区南西	I層	縄文土器	深鉢	胴部		
26	調査区南東	I・II層	縄文土器	深鉢	胴部		
27	調査区南東	I・II層	縄文土器	深鉢	胴部		
28	調査区北西	II層	縄文土器	深鉢	胴部		
29	調査区北西	II層	縄文土器	深鉢	胴部		
30	調査区北西	II層	縄文土器	深鉢	胴部		
31	調査区北西	II層	縄文土器	深鉢	胴部		
32	調査区北西	II層	縄文土器	深鉢	胴部		
33	調査区北西	II層	縄文土器	深鉢	胴部		
34	調査区北西	2層	縄文土器	深鉢	胴部		
35	調査区南西	I層	縄文土器	深鉢	胴部		
36	調査区西	I層	縄文土器	深鉢	底部		
37	調査区南	I層	縄文土器	深鉢	胴部		
38	調査区西	I層	縄文土器	深鉢	胴部		
39	調査区西	I層	縄文土器	深鉢	胴部		
40	調査区西	I層	縄文土器	深鉢	胴部		
41	調査区北	I層	弥生土器	鉢?	口縁部	弥生前期	
42	調査区西	I層	縄文土器	深鉢	口縁部		
43	調査区	表土	弥生土器	鉢	胴部	弥生前期	
44	調査区西	I層	石器	剥片	法量 (cm)		石質 (产地)
					長さ:2.5 幅:2.1 厚さ:0.5		頁岩(北上山地・古生代後期～中生代前中期)
45	SK03	-	石製品	石鏟	法量 (cm)		石質 (产地)
					長さ:6.0 幅:6.3 厚さ:1.4		花崗閃綠岩(北上山地五葉山岩体・中生代白堊紀)

5 まとめ

今回の調査では、造成のため削平された棚田の調査区北西から7基の土坑が検出された。そのうちSK03・06土坑は形状からプラスコ型貯蔵穴の可能性がある。SK01・02・04・05は規模から貯蔵穴の可能性も考えられるが、SK07を含め性格は不明である。緩斜面上に土坑が存在することや周辺地形をみると、集落の本体は調査区の南西側、一段標高の高い場所にあったと考えられる。

＜引用・参考文献＞

- 釜石市教育委員会 1991『釜石市埋蔵文化財分布調査報告書IV』釜石市文化財調査報告書第16集
- 釜石市教育委員会 2006『釜石市遺跡詳細分布調査概報IV-甲子地区-』釜石市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 釜石市教育委員会 2008『小白浜遺跡発掘調査報告書-小白浜簡易水道再選推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-』
- 釜石市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 釜石市教育委員会 2013『釜石市遺跡詳細分布調査報告書3-釜石の古代・中世遺跡-』釜石市埋蔵文化財調査報告書第21集
(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『金附遺跡発掘調査報告書-緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査
県営は場整備事業下岡地区関連遺跡発掘調査-』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集
- (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2010「落合2区I遺跡」「立花館遺跡」『平成21年度発掘調査報告書』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第571集

【分析鑑定報告1】

不動ノ滝遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

不動ノ滝遺跡は、岩手県釜石市甲子町8-178-76他(北緯 $39^{\circ}15'04.7619''$ 、東経 $141^{\circ}47'17.5630''$)に所在する。測定対象試料は、土坑から出土した炭化物2点である(表1)。

2 測定の意義

年代を特定するには遺構からの出土遺物が少ないため、炭化物の年代測定によって遺構の使用時期を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/?$ (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、 0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差(±1σ)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の¹⁴C年代は、No.1が2380±20yrBP、No.2が2410±20yrBPで、2点の値は誤差(±1σ)の範囲で一致する。

历年較正年代(1σ)は、No.1、2とも縄文時代晚期末葉から弥生時代前期への移行期頃に相当する(小林2009)。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

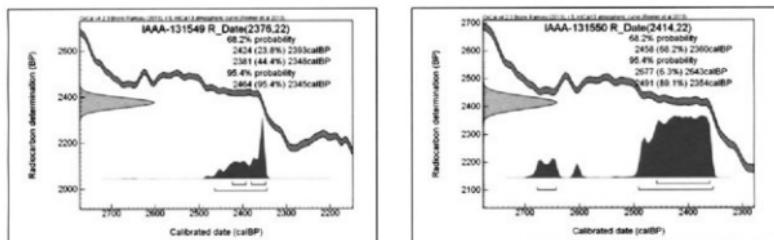
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-131549	No.1	SK01土坑 下層	炭化物	AAA	-28.02 ± 0.22	2,380 ± 40	74.39 ± 0.21
IAAA-131550	No.2	SK06土坑 下層	炭化物	AAA	-26.23 ± 0.21	2,410 ± 20	74.04 ± 0.21

[#6080]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		暦年 較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲		2 σ 暦年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)					
IAAA-131549	2,430 ± 20	73.93 ± 0.20	2,376 ± 22	2424 calBP-2393 calBP(23.8%)	2381 calBP-2348 calBP(44.4%)	2464 calBP-2345 calBP(95.4%)	
IAAA-131550	2,430 ± 20	73.85 ± 0.21	2,414 ± 22	2458 calBP-2360 calBP(68.2%)	2677 calBP-2643 calBP(6.3%)	2491 calBP-2354 calBP(89.1%)	

[参考値]



[図版]暦年較正年代グラフ（参考）

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radio carbon 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

(1) 不動ノ滝道路



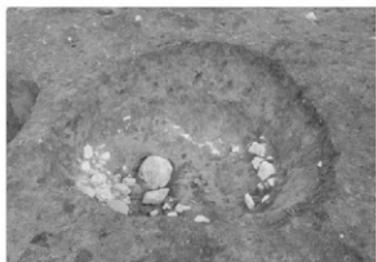
調査区遠景（北から）



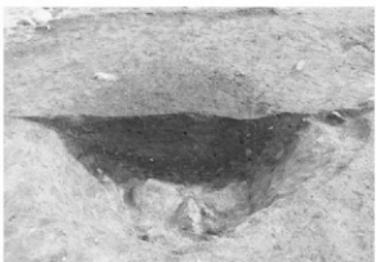
調査区近景（上が南）



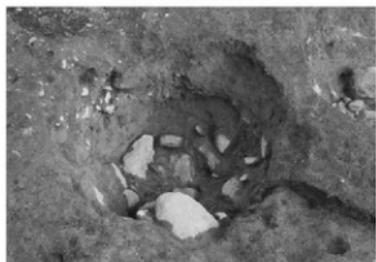
調査区近景（北東から）



SK01発掘（北西から）



SK01断面（北から）



SK02発掘（北西から）



SK02断面（北から）

写真図版2 SK01・02土坑

(1) 不動ノ淹道路



SK03・04完掘（北東から）



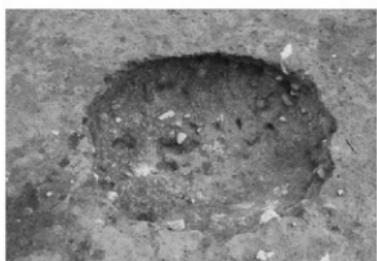
SK03・04断面（北東から）



SK05完掘（北西から）



SK05断面（北西から）



SK06完掘（北西から）



SK06断面（北東から）

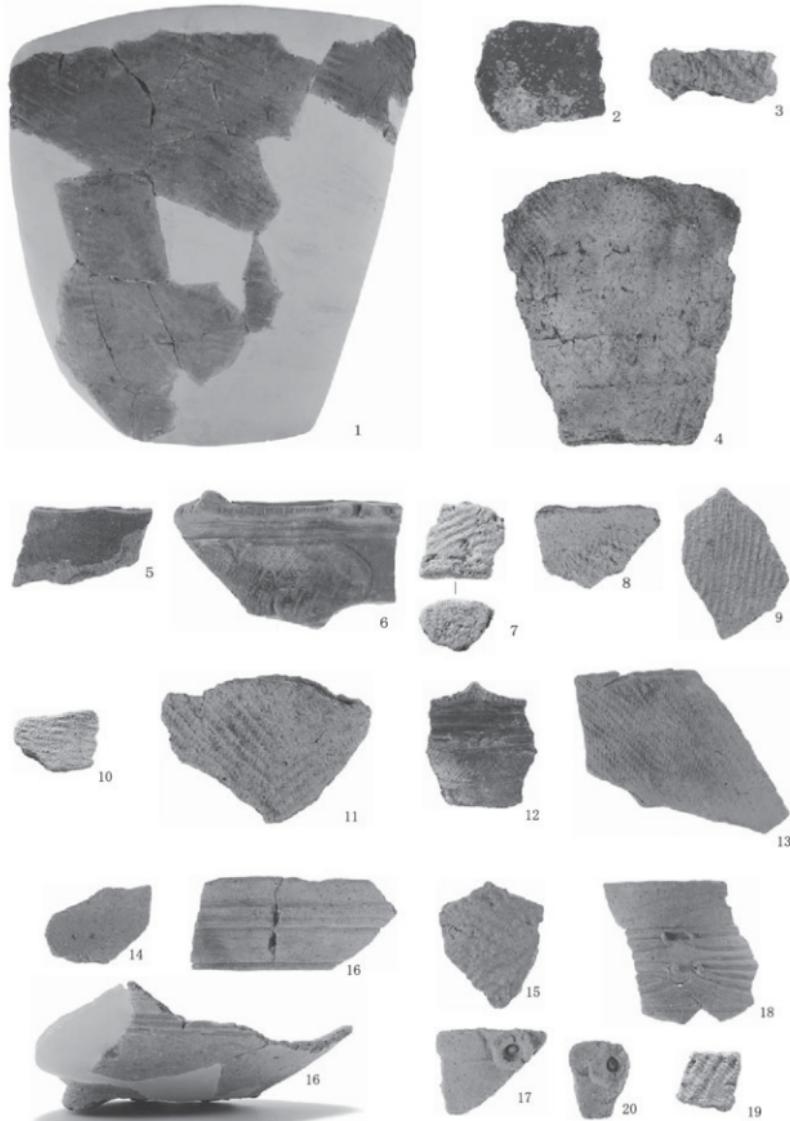


SK07完掘（南から）



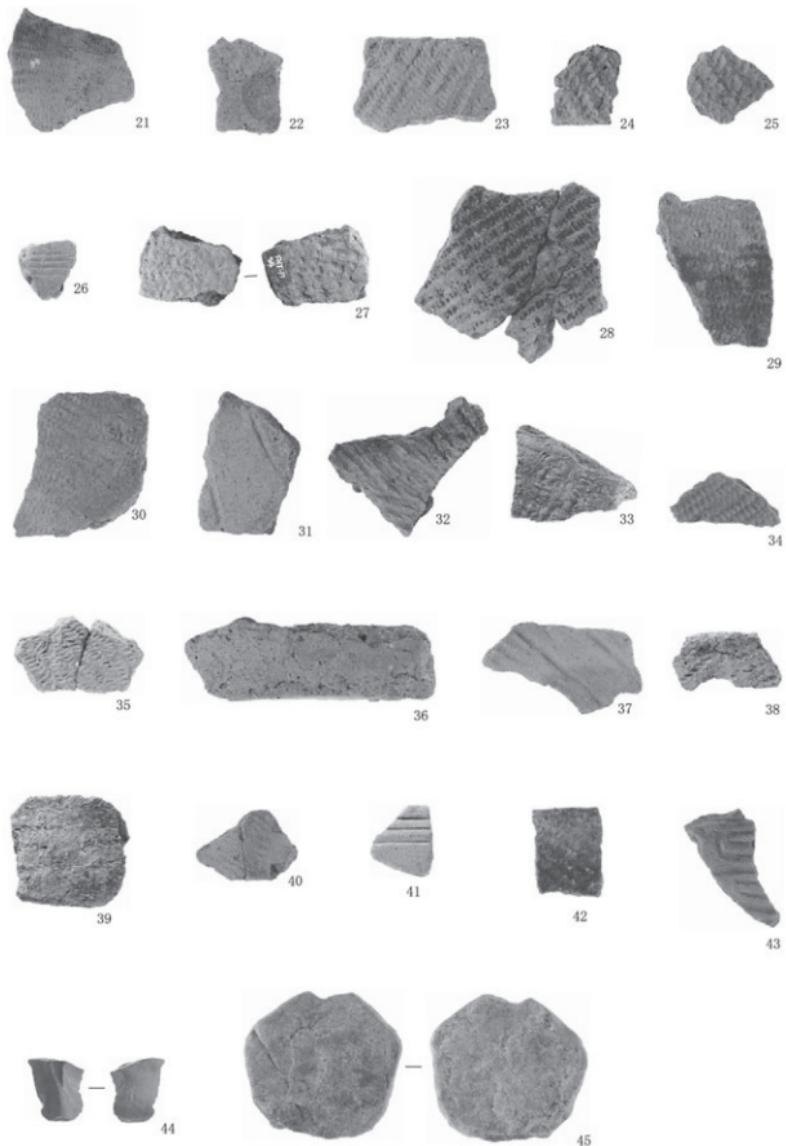
SK07断面（南から）

写真図版3 SK03~07土坑



写真図版4 出土遺物1

(1) 不動ノ流道路



写真図版5 出土遺物2

かみおさ べたあと
(2) 上長部館跡

所 在 地	陸前高田市気仙町字牧田130ほか	遺跡コード・略号	N F 77-1033・K O B-13
委 託 者	国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所	調査対象面積	6,950m ²
事 業 名	三陸沿岸道路	調査終了面積	6,950m ²
発掘調査期間	平成25年8月1日～10月4日	調査担当者	近藤行仁・村木 敬・立花雄太郎・中川重紀

1 調査に至る経過

上長部館跡は、三陸沿岸道路「唐桑高田道路（唐桑北～陸前高田）」の道路改築事業に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路「唐桑高田道路（唐桑北～陸前高田）」は、宮城県気仙沼市唐桑町館（唐桑北IC（仮））から岩手県陸前高田市竹駒町相川（陸前高田IC）を結ぶ延長約10kmの自動車専用道路である。

陸前高田市は東日本大震災の津波により甚大な被害を受けたことから、新しいまちづくりを進めるための取り組みとして、高台への移転及び市街地の整備を行うこととしたことから、ルート検討に際しては今泉地区土地区画整理事業や防災集団移転促進事業計画について陸前高田市と調整を図ったとともに、長部地区において長部IC（仮）を整備し利便性の向上及び地域振興支援を図ることとしている。

当該区間は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災からの復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年11月の第三次補正予算により「復興道路」として新たに事業化が決定されたものであり、平成25年2月6日に陸前高田市気仙町地内において起工式を開催し、工事に着手しているところである。

三陸沿岸道路等の既に供用していた区間は、東日本大震災時において救助・救援や支援物資輸送など「命の道」として機能を発揮したとともに、唐桑高田道路はじめ新たに事業化が決定された復興道路・復興支援道路は、東日本大震災からの早期復興への貢献、現道の隘路解消、交通混雑の緩和、交通安全の確保及び走行性・利便性の向上により地域間交流の促進や拠点間の連携強化、物流の効率化、



第1図 遺跡位置図

定時制・速達性の確保により地域の産業・経済・観光等への貢献が期待されている。

さらに救急医療施設への救急搬送時間短縮や医療施設間の連携強化、災害時の救助・救援活動の支援により地域の安全・安心の確保に資するものである。

また、「いのちを守り 海と大地と共に生きる ふるさと岩手・三陸の創造」を目指す姿とする「岩手県東日本大震災津波復興計画」の3つの原則のひとつ「安全の確保」においても、「災害時の確実な緊急輸送や代替機能を確保した信頼性の高い道路ネットワーク」を構築する幹線道路ネットワークとして位置付けられている重要な社会基盤である。

当該道路事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年7月13日付け国東整南陸調品確第22-6号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課あて試掘調査の依頼を行った。

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課では、平成24年12月20日に試掘調査を実施し、平成25年1月10日付け教生第1379号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、埋蔵文化財が確認されたことから発掘調査が必要となるので工事に先立ちその取扱について岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と協議するよう回答があった。

その回答を受けて南三陸国道事務所では、平成25年2月25日付け国東整南陸調品確第1062-2号「道路事業における埋蔵文化財の発掘調査について」により発掘調査を依頼したところである。

その結果、岩手県教育委員会教育長から平成25年3月14日付け教生1707号「平成25年度埋蔵文化財発掘調査事業について」により（公財）岩手県文化振興事業団から提出された計画書に基づき協議および契約事務を取り進めよう通知があったことから（公財）岩手県文化振興事業団との協議を経て平成25年4月1日付で発掘調査に係る委託契約を締結、調査を実施することとなったものである。

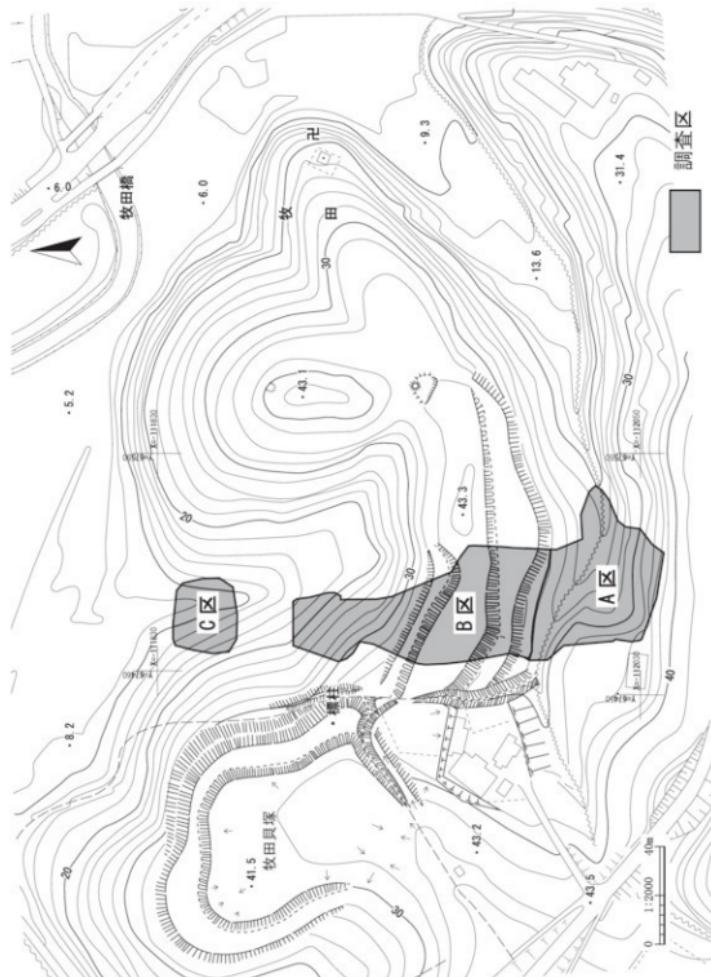
（国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所）

2 地理的歴史的環境

上長部館跡は、岩手県の沿岸南部地方、陸前高田市に位置している。南は宮城県気仙沼市、北は大船渡市、気仙郡住田町、西は一関市と接する。東には太平洋が開け、寒冷な岩手県にあっては、比較的温暖な地域となっている。平成23年3月11日の東日本大震災前の市中心部から南西に直線3kmの地点にある。地形的には、広田湾の北に広がる陸前高田平野の西端、南部北上山地の南端の笠長根山から南東に樹枝状に突出する一丘陵の先端に近い東側斜面に位置し、海拔はおよそ40mを測り、現海岸線から900mほど奥まったところにある。

歴史的にみると、上長部館跡に隣接する場所に、縄文時代前期の貝塚である牧田貝塚がある。近隣には、二日市貝塚、川口貝塚、福伏遺跡、神崎遺跡など縄文時代の遺跡や、奈良・平安時代の遺跡、廻館、今泉古館、館脇館、二日市館、双六塚、要谷館などの中・近世の遺跡や館跡が存在する。江戸時代には、脇往還として浜街道が三陸沿岸に沿って発達し、長部地区においては「水神の追分碑」が道標の一つとされていた。また古墳としては周知されていないが、気仙町垂井ヶ沢から、蕨手刀一振が発見されており、周囲に古墳が存在していた可能性が陸前高田市史において指摘されている。

文献資料に気仙地方の名が現れるのは、正史としては日本後紀（840年完成）において、弘仁元年（810年）10月27日の条に、「渡島の狄」200余人が気仙郡に来着したが、陸奥の国は管轄ではないとして、帰らせようとした。しかし狄等は寒い時期なので海路で行くには難しいので、来春に元の村に帰りたいと願い出た。これを許可して、とどまっている間は、衣食を施した、との記述がある。「長部」の記述としては、『大崎葛西陳（陣）割之覚』がある。記録の年代、成立年代とも明らかではないも



第2図 繩張図（室野秀文氏ご教示による 一部加筆修正）

のであるが、ここに南小梨半兵衛の四男として「長部次兵衛頼胤公」の記述があり、注意が必要であろう。年代がわかるものについては、『夷州仙台領分正保郷帳』(正保年間(1644~1648))がある。気仙郡の項で「一 三拾八貫六百七十九文 長部村 内 十壱貫五百九文 田方 武拾七貫百七拾文 番方」の記述がある。今のところ、この記述が最初としてよいであろう。

ここで近接する牧田貝塚について少し触れたい。昭和45年に陸前高田市教育委員会によって学術調査が行われ、翌46年に報告されている。発見された遺物は、縄文時代前期~中期の大木1式期から大木7a式期の土器、石器、骨角器である。動物遺存体は、レイシガイ、ヒメエゾボラ、アサリ、オオノガイなど、魚類はマダイ、マイワシなど、哺乳類はイノシシ、シカなどが発見されている。平成6年には岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって報告書が刊行されている。

気仙地区では、周辺の遺跡や出土遺物が、明治時代から鳥羽源蔵、八木奘三郎、松本彦七郎、小金井良精、長谷部言人といった学史的に著名な先人たちによって報告されている。

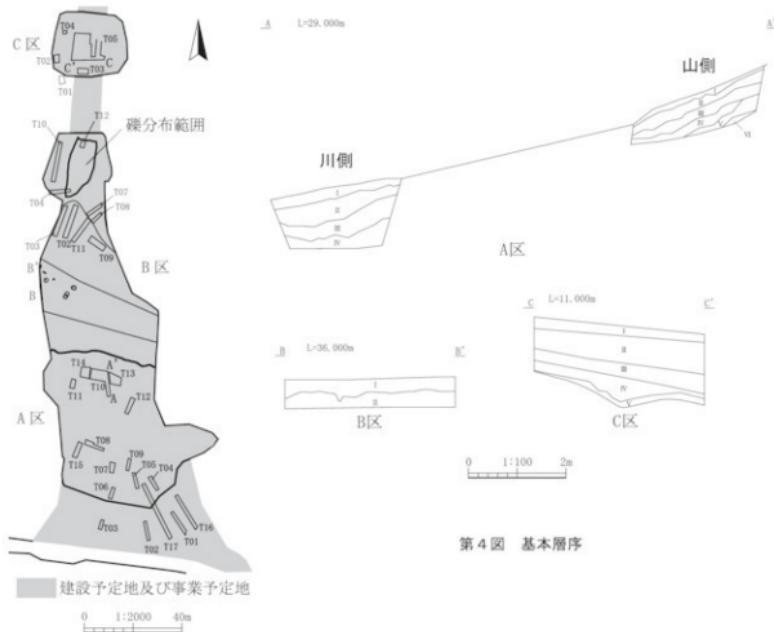
3 基本層序(第4図)

今回の調査区は尾根と斜面地になり、様相が区域ごとに異なっている。A区ではT10において、B区では平坦面において、C区ではT05において確認した。A区T10では山側と川側で様相が異なり、山側では崖錆での堆積、川側では河川による礫が多くみられる。

遺物はA区ではII層から縄文時代後晩期の土器、III層から縄文時代中期の土器、C区III~V層では縄文時代中期の土器が発見されている。A区山側はVI層の下、B区ではII層の下、C区では6層の下がそれぞれ地山となっており、遺構確認面である。A区川側は礫が多く遺構確認面は、認められなかつた。

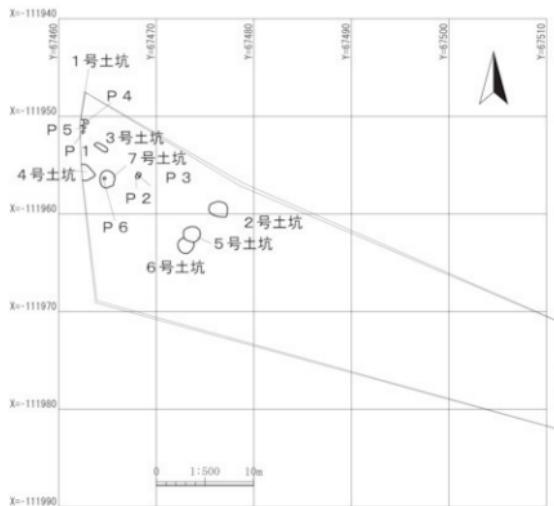
第1表 基本層序一覧

山側	I層	10YR2/3 黒褐色土 粘質土 植物根、腐植土を多く含む。2~3cmの小石を多く含む。赤色粒子少量化。2~3mmの小石含む。
	II層	10YR3/2 黒褐色土 粘質土 1~3mmの小石を多く含む。2~3cmの小石を少量含む。遺物を少量含む。
	III層	10YR3/2 黒褐色土 粘質土 2~3cmの小石を少量含む。遺物を含む。
	IV層	10YR3/3 黑褐色土 粘質土 1~1.5cmの小石を少量含む。1~3mmの小石を多く含む。
A区側	V層	10YR3/2 黑褐色土 粘質土 1~3mmの小石を多く含む。遺物を含む。2~3cmの小石を少量含む。
	VI層	10YR3/3 黑褐色土 粘質土 1~3mmの小石を多く含む。遺物を含む。1~3cmの小石を少量含む。少量の黄色砂を含む。
	I層	10YR4/4 楢色土 粘質土 植物根、腐植土を多く含む。2~3cmの小石を少量含む。炭化物少量含む。2~3mmの小石含む。
	II層	10YR4/3 に赤い黄褐色土 粘質土 1~3mmの小石を多く含む。2~3cmの小石を微量含む。遺物を微量含む。
B区	III層	10YR3/3 暗褐色土 粘質土 1~3mmの小石を多く含む。遺物を含む。炭化物微量。遺物を含む。
	IV層	10YR2/3 黑褐色土 粘質土 1~5cmの小石を少量含む50cm未満の礫含む。
	I層	10YR2/3 黑褐色土 粘質土 植物根、腐植土を多く含む。2~3cmの小石を多く含む。赤色粒子少量化。2~3mmの小石含む。
	II層	10YR4/3 に赤い黄褐色土 粘質土 1~3mmの小石を多く含む。2~3cmの小石を微量含む。
C区	表土-I	10YR2/1 黑褐色土 粘質土 植物根、腐植土を多く含む。砂粒を多く含む。
	表土-II	10YR4/2 灰黄褐色土 砂質土 植物根、腐植土を多く含む。砂粒を多く含む。雜物多く含む。
	表土-III	10YR1.7/1 黑褐色土 粘質土 植物根、腐植土を多く含む。砂粒を多く含む。
	II層	10YR3/3 暗褐色土 粘質土 2~5mm台の礫を多く含む。下層に大型の礫を多く含む。
	III層	7.5YR2/2 黑褐色土 粘質土 2~10mm台の礫を多く含む。大型の礫を含む。遺物含む。
	IV層	10YR2/3 黑褐色土 粘質土 5~10mm台の礫を多く含む。大型の礫を多く含む。遺物含む。
	V層	10YR3/3 暗褐色土 粘質土 5~15mm台の礫を多く含む。大型の礫を多く含む。遺物含む。
	VI層	10YR3/4 暗褐色土 粘質土 1~3cmの礫を多く含む。
C区1~III層は津波堆積層		



第4図 基本層序

第3図 調査区域図



第5図 B区造構配置図

4 調査の概要

今回の調査区は当初道路建設用地内の予定であったが、岩手県生涯学習文化課および国土交通省東北地方整備局南三陸事務所との協議の結果、今後工事により、削平されてしまうため、調査区外ではあるが、事業地内にもトレーナーを入れ、遺構の有無を確認する必要があると合意があった。

各区域の平坦部及び、斜面にトレーナーを入れ、遺構の有無を確認、B区の平坦部では、遺構の存在が確認され、調査を行った。

(1) 遺構（第6・7図）

城館跡は今回の調査では、根拠が薄く、発見できなかった。郭にあたる部分については、牧田貝塚の範囲と現況宅地範囲にあったと考えられる。今回の調査区に関しては、P4は14C年代測定により、471calBP-311calBPという曆年代範囲が示され、15C後半～17C前半に比定される。中世城館と推定される上長部館跡に付随する、何らかの施設の可能性があろう。遺物は出土しておらず、性格は不明であるが、通路等の可能性は十分考えられる。

A区 遺構については、今回確認されなかつたが、遺物の中に縄文時代晚期～弥生時代前期頃の土器があり、近隣に当該期の遺構の存在が考えられる。

B区 土坑7基と柱穴状土坑6個を検出した。1号土坑は、調査区中央平坦部の西端において検出された。遺物に尖頭器があるが、中層から出土しており、本遺構の時期決定には至らないと考えられる。しかしながら、覆土の色調が地山の色調に近く、他の遺構よりも古い様相を呈していると思われる。その他の遺物として、礫が底面から出土している。

2号土坑は調査区中央平坦部の北寄りで検出されている。遺物は縄文時代中期を中心とした土器が発見されており、当該期の遺構と考えられる。覆土には焼土、炭化物が含まれており、何らかの焼成行為があったことが想定される。

5号土坑、6号土坑については、重複関係が認められ、土層より、6号土坑が、5号土坑より新しいことが見て取れる。他の土坑、ピットからは、時期決定に至る遺物が出土しておらず、詳細については不明である。

第2表 遺構計測表

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	遺 物	放射性炭素年代測定結果
1号土坑	(0.68)	(0.32)	0.66	尖頭器、剥片、礫	
2号土坑	2.04	1.64	0.34	縄文時代中期土器・石器	
3号土坑	1.53	0.57	0.12		
4号土坑	1.63	1.34	0.54		
5号土坑	(1.77)	(1.62)	0.38		
6号土坑	(1.59)	(1.34)	0.20		
7号土坑	1.80	1.52	0.17	礫	
P1	0.33	0.29	0.52		
P2	0.33	0.32	0.50		
P3	0.44	0.43	0.50		
P4	0.61	0.38	0.58		471calBP-311calBP
P5	0.29	0.29	0.42		
P6	0.33	0.32	0.42		

() 内は現況

C区 遺構については、今回確認されなかった。遺物は縄文時代中期の土器が多く発見されているが、縄文時代前期、後晚期の遺物も発見されている。

(2) 遺物 (第8~14図)

A区

縄文時代前期～弥生時代前期と思われる土器が出土している。おもに縄文時代後期の土器が出土しているが、縄文時代晚期大洞BC期の土器や、弥生時代前期の土器も小破片であるが、出土している。

石器については石鏃、不定形石器、打製石斧、磨石、石棒石剣類の未製品が出土している。71、72、73、75の石器は、不定形石器である。門前貝塚において不定形石器の第1類（1辺に刃部を有するもの）として報告されているものと類似しており、同様の石器と考えられる。

B区

遺構の部分でも述べたが、1号土坑より尖頭器が出土している。遺構の中位から出土しているため、本遺構に伴うものとは考えにくい。1号土坑からは他に、礫の剥片が底面付近より出土している。

縄文時代の土器が遺構に伴い出土している。2号土坑からは縄文時代前期～後期と思われる土器が出土している。縄文時代前期大木5式期、縄文時代中期大木9式期、大木10式期そのほかの遺物として、花崗岩礫などが出土している。6号土坑からは縄文時代中～後期と思われる土器が出土している。上層から出土しており、6号土坑の帰属時期とは考えにくい。遺構外として、大木2aとされる土器が出土している。石器については1号土坑からは尖頭器が出土した。形状から縄文時代早期頃と考えられる。遺構の中位から出土しているため、1号土坑に伴っていないものと思われる。その他に粘板岩と花崗岩の礫が出土している。土坑の底面付近から出土しており、遺構に伴うものと思われる。磨石が5号土坑から出土している。遺構外としてはB区の平坦部に磨石が6点出土している。89は複数面が磨滅しており、特殊磨石としてよいと思われる。94は凹面であるが、棒状で、複数面に敲打痕がみられるものである。T07からは石棒石剣類と、凹面が出土している。

C区

縄文時代前期～晚期の土器が出土している。いずれも遺構に伴うものではないが、遺物包含層中から出土している。縄文時代前期の土器は大木2式期、大木5式期のものである。T05から縄文時代中期大木7a式期や大木10式期の土器が出土している。

5まとめ

今回の調査においては、C14年代測定から16世紀頃の遺構が存在し、館の帰属時期を示す可能性がある。縄文時代早期頃から弥生時代前期ごろまでの遺物が出土したことから、これらの時期を包含する遺跡であることが解った。縄文時代の土器については、前期大木2a式期から大洞BC式期の土器が出土している。石器については、縄文時代の尖頭器が出土した。身が厚く、有舌尖頭器と思われる。石鏃、石匙、剥片石器、凹面、磨石、石棒石剣類がみられ、これらは牧田貝塚、門前貝塚等の石器と類似する。石器、土器ともに数量は多くないものの、バリエーションに富んでいると思われる。

71、72、73、75の不定形石器は、微細な剥離痕を有する剥片、截断面を有する石器、調整剥片、スクレイパーなど様々な呼称で報告されているものである。遺物の形状の認知、使用状態の想定が困難なことから、担当者によって様々であると思われる。岩手県内ののみならず、岐阜県などでも、認知されているようである。通常のスクレイパーとの相違は、いさか感覚的ではあるが、微細な剥離は刃部のみであることが大きな相違と考えられる。共通点は、形状が台形状のものが多いが、きれいな台形を呈しているものは少なく感じる。微細な剥離による刃部がある、截断面・平坦な面を持つ点のみ

で、大きさは、1cm～4、5cmほどの大きさである。刃部を下端に向けた時、通常左側に截断面（平坦面）乃至は剥離による平坦面がくる。まれに、右側に来るものがあるが、使用時の利き手の違いからくるものと考える。平坦面は、力点として作り出されたものと思われる。この石器の機能としては切削用途としての刃器の一種と考える。

土製品については、土偶脚部および、耳環、土製円盤が出土した。それぞれ時期不明ではあるが、近隣の遺構の存在を示している。

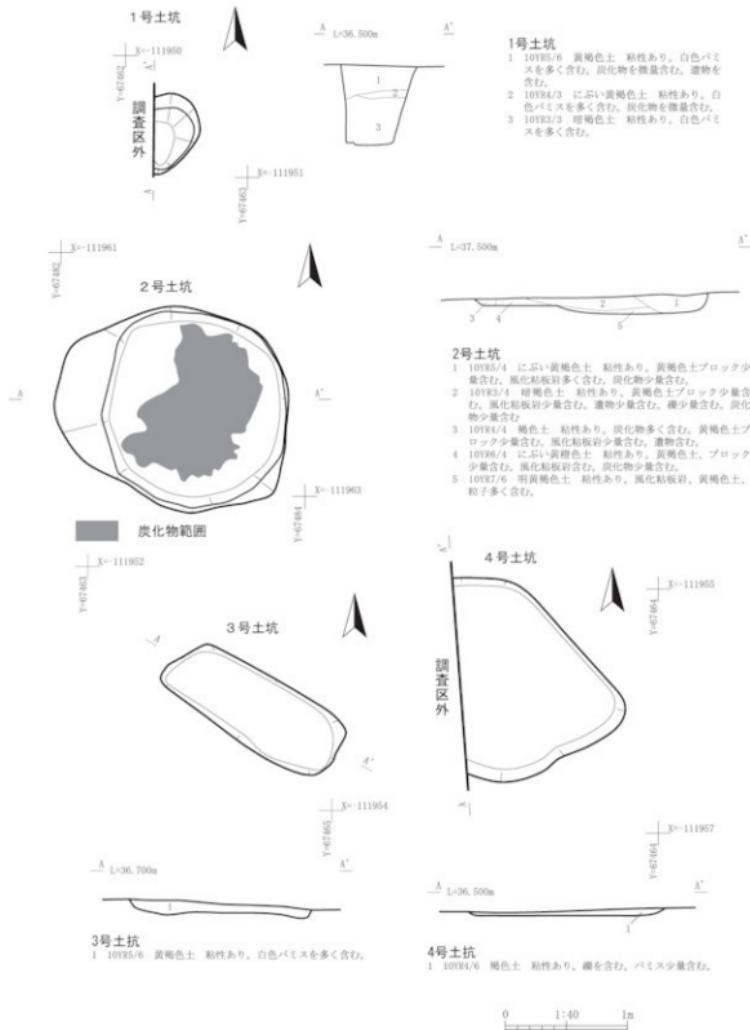
近世以降の遺物は、明治以降の染付が出土している。123は型紙を使用した型紙摺絵での染付があり、明治・大正期の技術の一端を垣間見ることができる。この時期の遺物は、そのほかに一銭銅貨が出土しており、この時期の生活の痕跡がとらえられる。

近代では、工場食器が出土している。126は中島飛行機（現富士重工）の社章が入ったものである。この遺物の統制番号は不明であるが、製造が昭和16年以降に国の大正期、管理下のもとに生産されたことがわかっている。戦争遺跡が注目を浴びてかなりたつが、これらの遺物は、まだ資料として認知が浅いと思われるが、今後工場食器、陶製代用品、統制番号資料の増加が見込まれる。

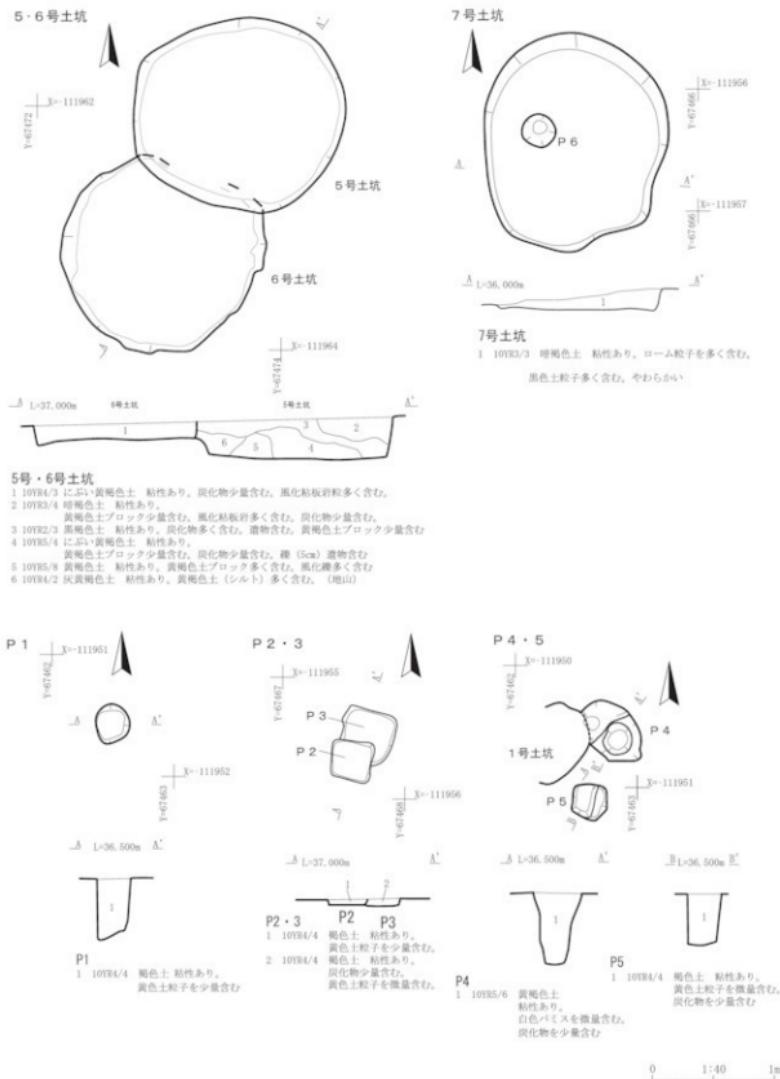
なお、上長部館跡平成25年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

＜引用・参考文献＞

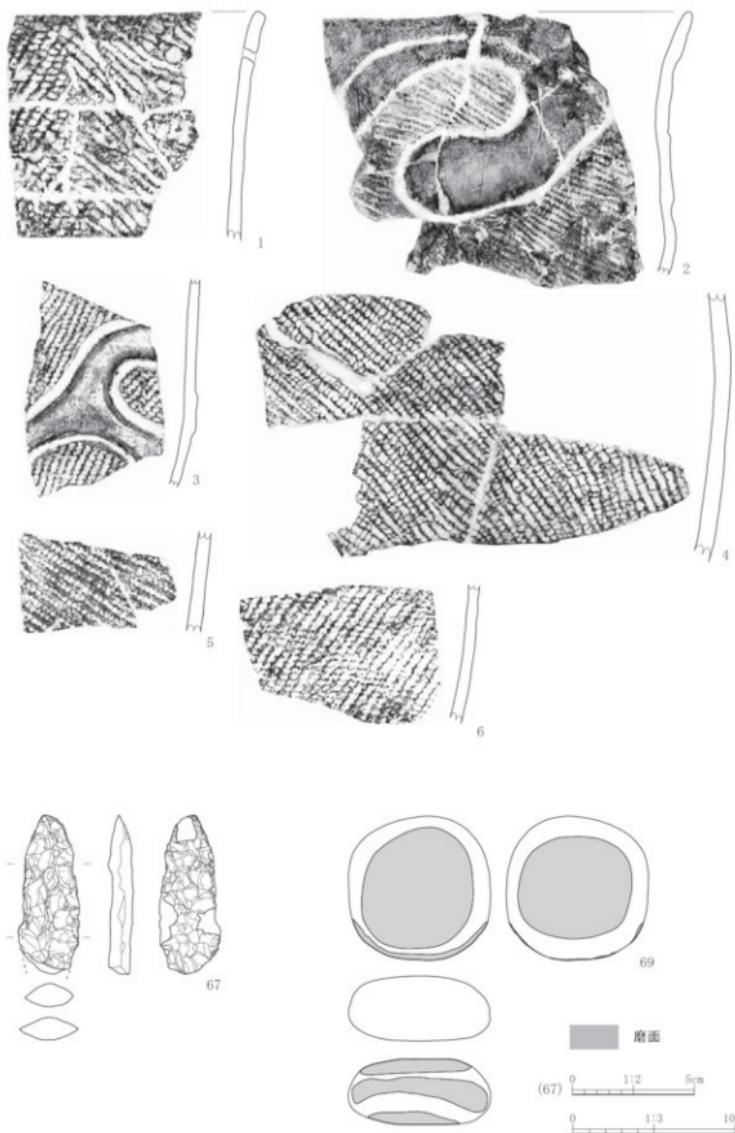
- 岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 『牧田貝塚発掘調査報告書』県営ふるさと農道緊急整備事業関連遺跡 発掘調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第241集
- 財団法人 岐阜県教育文化財団 2003 『岩井戸岩陰遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第81集
- 財団法人 岐阜県教育文化財団 2003 『尾元遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第82集
- 縄文時代文化研究会 1999 『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 縄文時代文化研究会 2007 『縄文時代』第18号 縄文時代文化研究会
- 縄文時代文化研究会 2009 『縄文時代』第20号 縄文時代文化研究会
- 紫桃正隆 1972 『史料 仙台藩領内古城館・第1巻』宝文堂出版販売株式会社
- 白石浩之 2001 『石槍の研究 旧石器時代から縄文時代初頭にかけて』株式会社 アム・プロモーション
- 細谷敬吉 1983 『陸前高田市の地名考』陸前高田市郷土史研究会
- 瑞浪市陶磁資料館 2012 『番号の付されたやきもの』-戦時下の瑞浪窯業生産-
- 瑞浪市陶磁資料館 2012 『釜戸上平遺跡における旧石器～縄文時代遺物の詳細報告』研究紀要第14号 P123-205
- 陸前高田市教育委員会 2006 『雲南遺跡』-主要地方道大船渡広田跡前高田線（アップルロード）道路改良工事-陸前高田市文化財調査報告第26集
- 陸前高田市教育委員会 1997 『堂の前貝塚発掘調査報告書1』-団体営農道整備事業農道久野立山線改良工事-陸前高田市文化財調査報告第18集
- 陸前高田市教育委員会 1971 『牧田貝塚発掘調査概要』
- 陸前高田市教育委員会 1992 『門前貝塚』-県道広田半島線の改修に伴う緊急発掘- 陸前高田市文化財調査報告第16集
- 陸前高田市立博物館 1998 『陸前高田市立博物館紀要』第3号
- 陸前高田市立博物館 2002 『陸前高田市立博物館紀要』第7号
- 渡辺信夫他 1984 『宮城の研究』第1巻 考古学編 清文堂出版株式会社



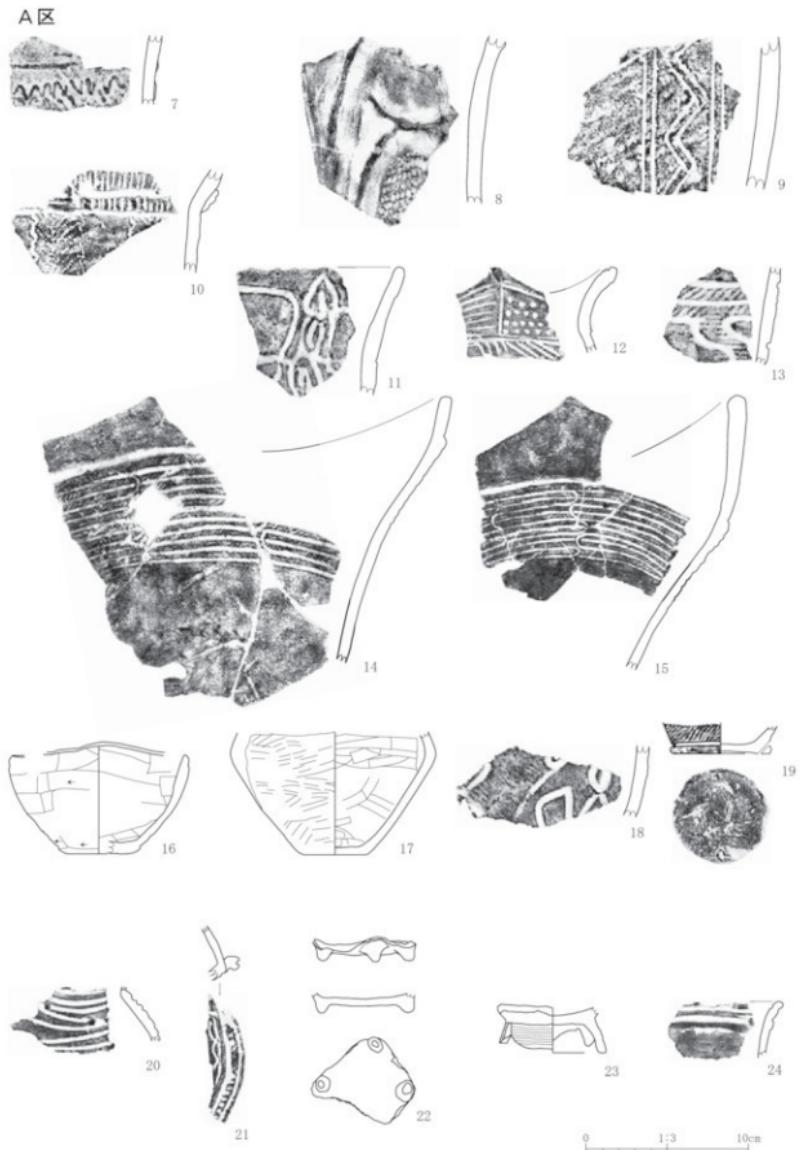
第6図 1~4号土坑



第7図 5~7号土坑、P 1~6

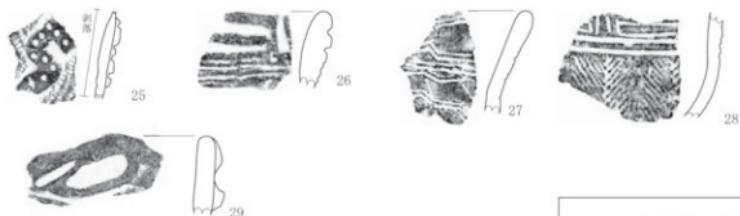


第8図 遺構内出土遺物

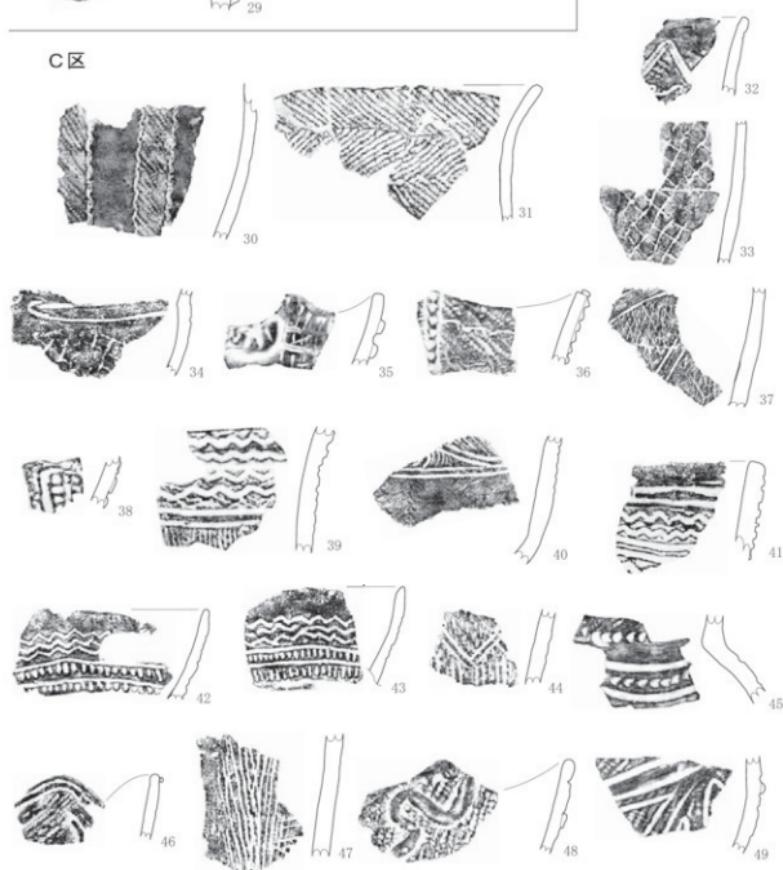


第9図 遺構外出土遺物 1

B区

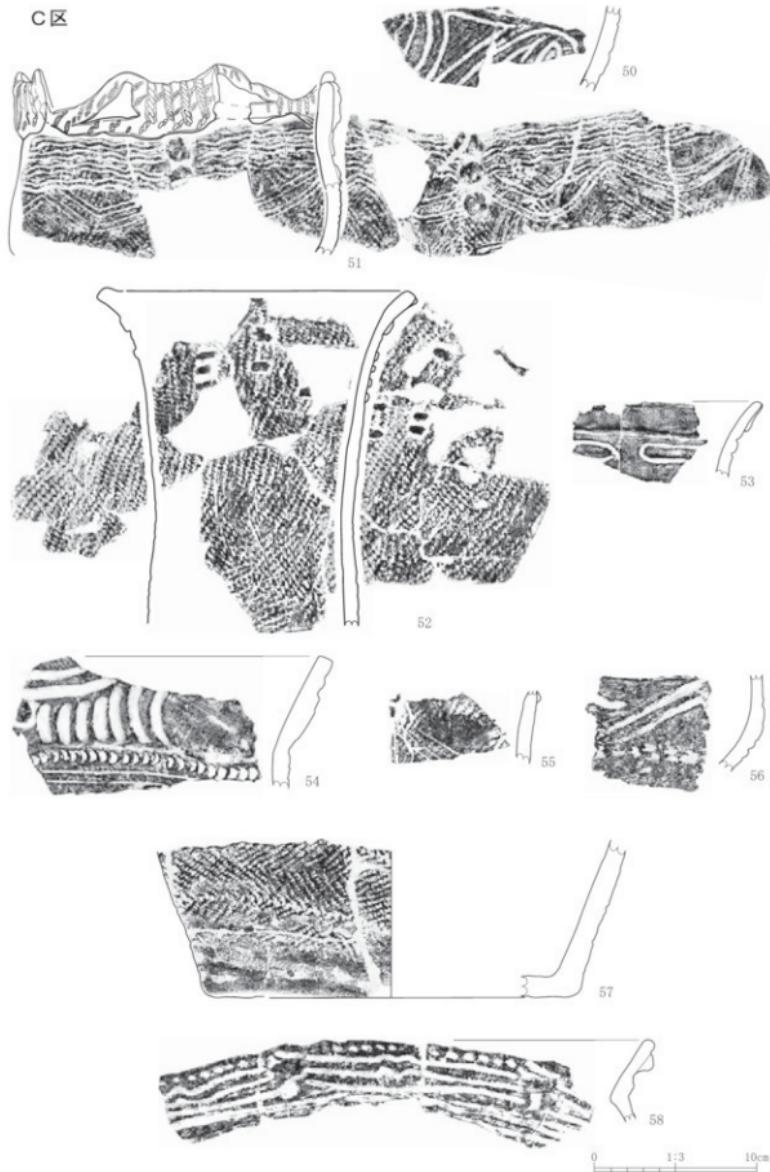


C区



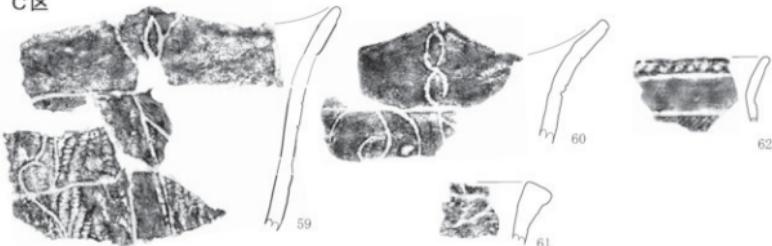
0 1:3 10cm

第10図 遺構外出土遺物2

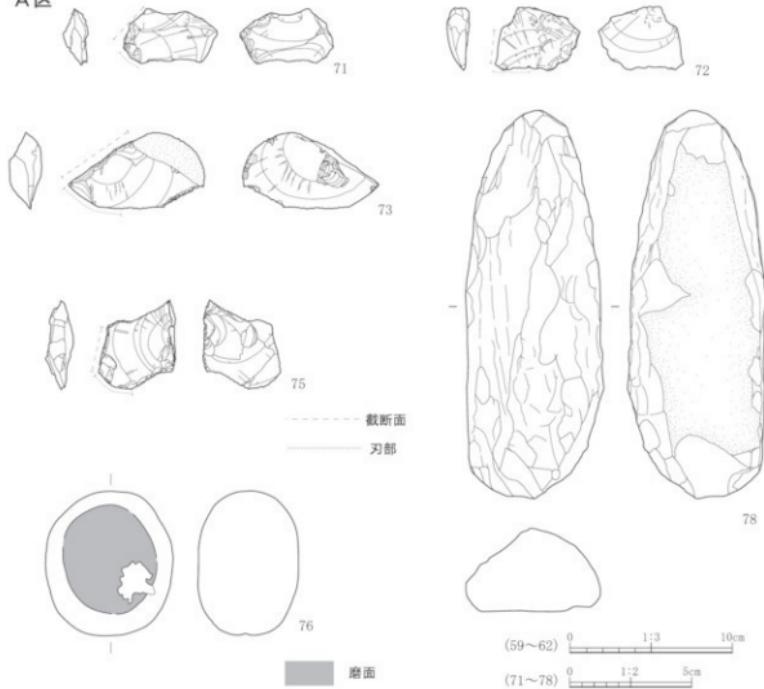


第11図 遺構外出土遺物 3

C区



A区

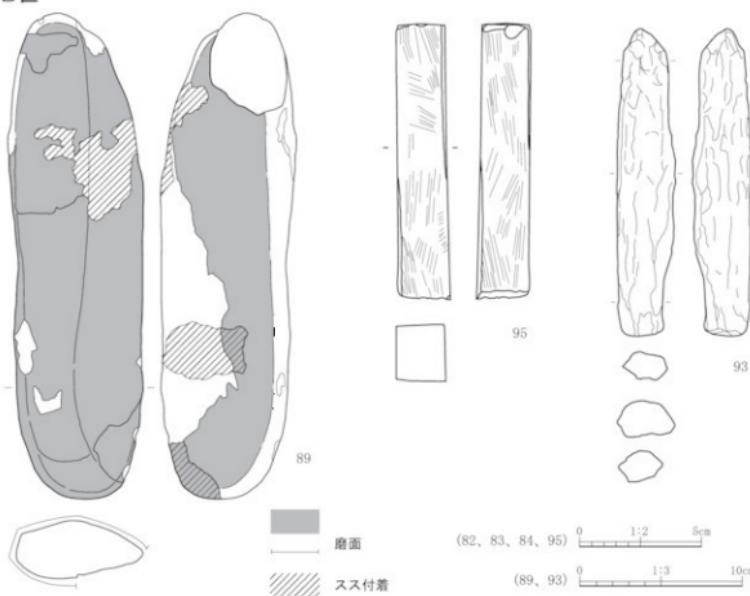


第12図 遺構外出土遺物4

A区

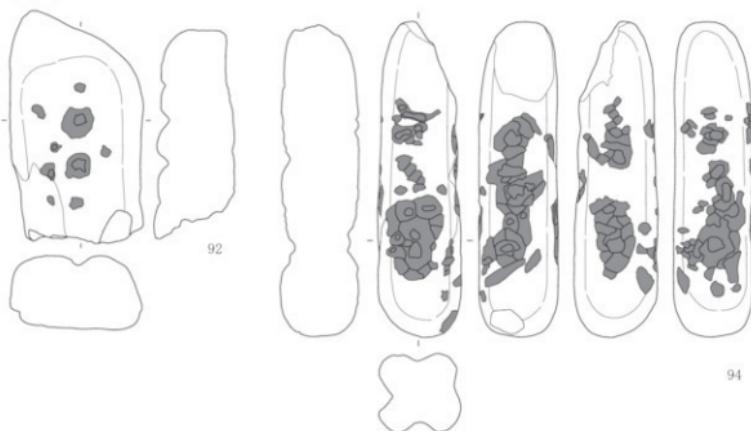


B区

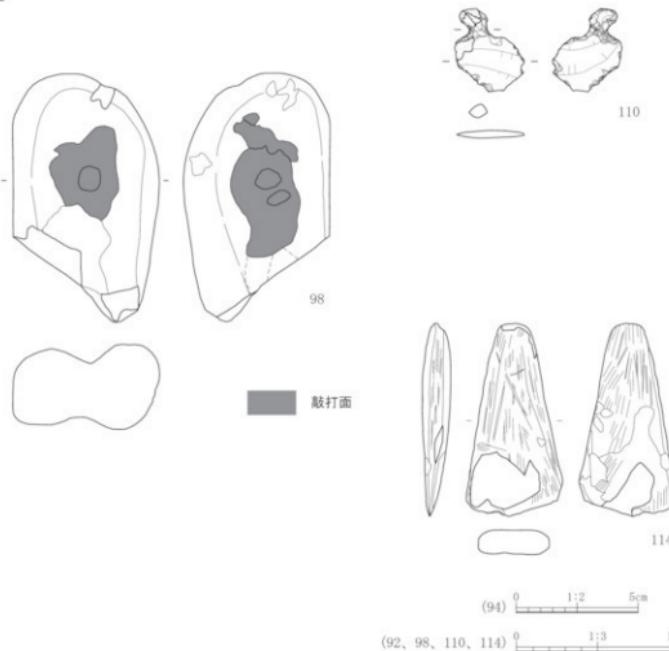


第13図 遺構外出土遺物5

B区



C区



第14図 遺構外出土遺物 6

第3表 土器観察表(1)

No.	出土地点	時代	時期	型式	残存部位	器種	原体	施文	重量 (g)	特記
1	B区2号土坑	圓文	前期	口縁部	深林	羽狀	輪孔丸あり		193.2	
2	B区2号土坑	圓文	中期	大木10 口縁部	深林	羽狀	輪孔の割り落し箇所		323.2	
3	B区2号土坑	圓文	中期	大木10 脚部	深林	羽狀	底盤区画内に施文並および焼痕		99.7	
4	B区2号土坑	圓文	中期	大木10 脚部	深林	羽狀			398.8	
5	B区6号土坑	圓文	中~後期	大木10 脚部	深林	羽狀			59.6	
6	B区2号土坑	圓文	中~後期	大木5 脚部	深林	羽狀			109.3	
7	A区T10東	圓文	前期	大木5 脚部	深林	羽狀	原体地文落粘付 原体地文落粘付と削面による文脈		30.0	
8	A区T13	圓文	中期	大木9 脚部	深林	羽狀	原体地文落粘付と削面による2条1單位の文織		140.0	
9	A区T14西	圓文	中期	大木9 脚部	深林	羽狀	原体地文落粘付による2条1單位の文織		146.2	
10	A区T10東	圓文	中期	大木9 脚部	深林	羽狀	軸十根を複数に通すヘラ状工具による削痕 軸十根を複数に通すヘラ状工具による削痕		69.3	
11	A区T10	圓文	後期前葉	口縁部	深林	羽狀	棒状工具によるびびりの施文		57.2	
12	A区T10東	圓文	後期中葉	口縁部~脚部	深林	羽狀	沈殿区画内、2条1單位の文織、円形刻突起付、内面にコゲ		32.0	
13	A区T10	圓文	後期中葉	脚部	深林	羽狀	沈殿による文織施化後は焼痕		31.0	
14	A区T10東山側IV層	圓文	後期	口縁部~脚部	深林	羽狀	沈殿文後、2条1單位の沈殿および平行線、赤彩		234.4	
15	A区T10東山側IV層	圓文	後期	口縁部~脚部	深林	羽狀	沈殿文後、2条1單位の沈殿および平行線、赤彩		253.0	
16	A区T10東	圓文	後期	脚部~底部	深林	羽狀	外側ケブリ		58.9	
17	A区T10東	圓文	後期	脚部~底部	深林	羽狀	外山字が窓		133.4	
18	A区T10東	圓文	後期	脚部	深林	羽狀	沈殿区画内所附施文		47.1	
19	A区T10西II層	圓文	後期	底部	深林	羽狀	沈殿面上に沈殿		52.9	底部 突起あり 2ヶ所
20	A区T10西II層	圓文~学生	後期~後生	脚部~脚部	深小池	羽狀	裏面工字文		18.5	
21	A区T10西II層	圓文	後期	大木B.C	脚部~脚部	注目土器	手筋式文		23.6	
22	A区T10西II層	圓文~学生	後期~後生	脚部	四脚付?	直			19.0	
23	A区T10西II層	圓文~学生	後期~後生	脚部	脚台部	台付林	脚部に2条1單位の文織		65.6	
24	A区T14	学生?	前葉?	大木2a	脚部	直	外側口唇部直下に沈殿。内面口唇部直上に焼痕。 される		12.6	
25	B区T10	圓文	前期	大木2a	脚部	羽狀	原体地文画、粘土相附付、粘土相付上に円形刻突起		23.4	
26	B区T7	圓文	前期	口縁部	深林	羽狀	棒状工具によるびびりの焼痕		57.0	
27	B区T7	圓文	後期	脚部	深林	羽狀	棒状工具による2条1單位の文織、削突		36.1	
28	B区T10	圓文	後期	脚部	深林	羽狀	棒状工具による文織、羽状焼痕		53.5	
29	B区T7	圓文	後期	脚部	深林	羽狀	棒状工具による文織		123.3	
30	C区T1Ⅲ層	圓文	前葉	大木5	脚部	羽狀	原体地文ないしは焼痕文。原体地文を範囲に施文		91.6	
31	C区T1Ⅲ層	圓文	前葉	口縁部	深林	羽狀	黏着のない羽状焼痕文		78.3	

第4表 土器観察表(2)

No.	出土地点	時代	時期	型式	残存部位	器種	原体	施文	施文	直轄 (cm)	特記
32	C区Ⅲ層	绳文	前期	口縁部	深杯	筒形	原体は底面に施文、柄次工具による2条1單位の直轄			18.8	
33	C区Ⅲ層	绳文	前期	脚部	深杯	筒形	原体底部に施文、筒次工具による直轄			50.5	
34	C区Ⅲ層	绳文	前期	脚部	深杯	筒形	原体底部に施文、筒次工具による直轄			43.5	
35	C区	绳文	中期	口縁部	深杯	筒形	原体工具による直轄、柄子形状から棒状工具による削突、 「タ」字工具による直轄			23.9	
36	C区T 5	绳文	中期	口縁部	大木7a	筒形	原体底面後端に施文、柄子形状から棒状工具による削突			32.4	
37	C区Ⅲ層	绳文	中期	大木10	脚部	筒形	原体底部に施文、柄子形状から棒状工具による削突			73.7	
38	C区	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	原体底面後端に施文による2条1單位の直轄			14.5	
39	C区	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	原体底面後端に施文、柄子工具による直轄、半截竹管による平行直轄施文、 筒状骨系文			86.8	
40	C区	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	原体底面による直轄、2条1單位の直轄光沢、羽状網文施文			115.6	
41	C区T 1 Ⅲ層	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	柄状工具による直轄、棒状工具により2条1單位の直轄状を平行施文			59.7	
42	C区T 1 Ⅲ層	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	柄状工具による直轄の側面内側を削突で先鋒、半截竹管による2条1單位の直轄			51.6	
43	C区T 1 Ⅲ層	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	半截竹管による直轄の直轄施文、 筒状骨系文			42.5	
44	C区T 1 Ⅲ層	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	半截竹管による2条1單位の直轄による施文			31.9	
45	C区T 2 Ⅲ層	绳文	中期	脚部～脚部	深杯	筒形	柄状工具による直轄、半截竹管による直轄光沢、 羽状網文			68.8	
46	C区T 2 Ⅲ層	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	柄状工具による直轄、柄子形状による直轄施文、 斜安			17.5	
47	C区T 4	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	柄状工具による直轄、柄子形状による直轄施文			78.6	
48	C区T 5	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	原体口端に施文、柄子工具による直轄			49.7	
49	C区	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	原体口端に施文、柄子工具による直轄			45.0	
50	C区T 5	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	原体口端に施文による直轄施文			63.8	
51	C区T 5 Ⅲ層	绳文	中期	口縁部～脚部	深杯	筒形	半截竹管による直轄、 筒状骨系文			532.5	
52	C区Ⅲ層	绳文	中期	口縁部	深杯	筒形	原体口端に施文、柄子形状付			478.8	
53	C区Ⅲ層	绳文	中期	口縁部	深杯	筒形	柄状工具による直轄、折り返し口縁			41.7	
54	C区Ⅲ層	绳文	中期	口縁部～脚部	深杯	筒形	柄状工具による直轄施文、柄子工具による爪形文底面削突、柄子形状			189.5	
55	C区Ⅲ層	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	15施文後、棒状工具による2条1單位の直轄、 柄子形状付			38.5	
56	C区Ⅲ層	绳文	中期	脚部	深杯	筒形	柄状工具による直轄、半截竹管による直轄削突			64.8	
57	C区Ⅲ層	绳文	中期	脚部～脚部	深杯	筒形	羽状網文施文			537.7	
58	C区T 5	绳文	後期	口縁部	深杯	筒形	柄状工具による直轄施文、竹管状工具による直轄削突、柄子形状			185.7	
59	C区T 5	绳文	後期	脚部	深杯	筒形	原体口端に施文、棒状工具による直轄			214.3	
60	C区T 5	绳文	後期	脚部	深杯	筒形	柄状工具による直轄			102.2	
61	C区T 5	绳文	後期	脚部	深杯	筒形	原体R			21.0	
62	C区T 4	绳文	後期	口縁部～脚部	深杯	筒形	原体R、柄子形状付			21.2	

第5表 土製品観察表

No.	出土地点	時代	器種	重量(g)
63	A区T10	縄文時代	土偶脚部	22.5
64	A区T10東 山側IV層	縄文時代	耳環	5.9
65	A区T8	縄文時代	土製円盤	12.8
66	C区II層	縄文時代	口縁部破片か	17.4

第6表 石器・石製品観察表(1)

No.	石器種別	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地
67	尖頭器	B区 1号土坑 No.1	6.5	2.5	0.9	17.5	頁岩	北上山地 古生代後期
68	剥片石器	B区 1号土坑	6.5	3.0	0.8	14.8	頁岩	北上山地 古生代後期
69	磨石	B区 5号土坑	8.9	8.9	4.1	567.4	頁岩	北上山地 古生代後期
70	剥片	B区 5号土坑	3.6	1.2	0.4	1.3	頁岩	北上山地 古生代後期
71	剥片石器	A区 T10 東山側面層IV層	3.5	2.5	0.6	6.7	頁岩	北上山地 古生代後期
72	剥片石器	A区 T10 東山側面層IV層	3.5	2.5	0.9	8.7	頁岩	北上山地 古生代後期
73	剥片石器	A区 T10 東山側面層IV層	5.6	3.0	1.1	16.5	頁岩	北上山地 古生代後期
74	剥片石器	A区 T10 東山側面層IV層	2.4	1.6	0.6	2.2	頁岩	北上山地 古生代後期
75	剥片石器	A区 T10	3.9	2.6	0.9	10.2	頁岩	北上山地 古生代後期
76	磨石	A区 T10	5.9	5.2	4.1	173.6	礫灰岩	北上山地 古生代後期
77	剥片石器	A区 T10 東山側面層IV層	2.7	3.1	1.0	7.5	頁岩	北上山地 古生代後期
78	打製石斧(未成品)	A区 T10	15.9	5.6	3.1	451.8	細粒斑礫岩	北上山地 氣仙沼体中生代白亜紀
79	小型打製石斧か	A区 T01	7.5	1.9	1.1	26.9	頁岩	北上山地 古生代後期
80	打製石斧	A区 T02	8.4	5.9	1.7	108.2	頁岩	北上山地 古生代後期
81	石棒石劍類	A区 T01	17.4	3.1	2.7	197.6	頁岩	北上山地 古生代後期
82	砾石	A区 T01	5.4	2.5	1.1	22.0	頁岩	北上山地 古生代後期
83	磨石(砥石再利用か)	A区 T14	10.8	5.8	4.1	276.0	礫灰岩	北上山地 古生代後期
84	石礫(脚部欠損)	A区 T13	3.1	1.5	0.4	1.8	頁岩	北上山地 古生代後期
85	剥片石器	B区 平坦部	1.6	0.8	0.4	0.5	黑曜石	産地不明
86	剥片石器	B区 平坦部	2.2	1.2	0.3	0.9	頁岩	北上山地 古生代後期
87	剥片石器	B区 平坦部	2.8	2.4	0.9	4.9	頁岩	北上山地 古生代後期
88	剥片石器	B区 平坦部	2.0	2.1	0.6	2.5	頁岩	北上山地 古生代後期
89	磨石	B区 平坦部	30.5	8.0	3.5	1338.6	ホルンフェルス 頁岩が中生代白亜紀に変成	北上山地 氣仙沼体の周囲古生代の 頁岩が中生代白亜紀に変成
90	磨石	B区 平坦部	16.6	11.5	4.3	980.3	礫灰岩	北上山地 古生代後期
91	磨石	B区 平坦部	7.8	6.4	4.6	369.3	花崗閃綠岩	北上山地氣仙沼体 中生代白亜紀
92	圓石	B区 T07	19.1	10.9	6.1	1572.3	礫灰岩	北上山地 古生代後期
93	石棒石劍類	B区 T07	19.0	3.5	2.1	233.5	頁岩	北上山地 古生代後期
94	圓石	B区 表採	19.3	4.9	5.1	647.8	礫灰岩	北上山地 古生代後期
95	砾石	B区 平坦部	11.0	2.2	1.9	95.9	頁岩	北上山地 古生代後期
96	磨石	C区 III層	10.4	7.9	6.4	827.9	細粒花崗閃綠岩	北上山地氣仙沼体 中生代白亜紀
97	磨石	C区 III層	8.5	7.5	5.4	493.1	アブライト	北上山地氣仙沼体 中生代白亜紀
98	圓石	C区 III層	10.1	6.0	3.5	260.6	礫灰岩	北上山地 古生代後期
99	磨石	C区 T02	2.9	2.9	0.9	9.3	頁岩	北上山地 古生代後期
100	磨石	C区 T02	3.5	2.0	0.4	3.0	頁岩	北上山地 古生代後期
101	石鍤	C区 T02	4.1	4.0	0.6	14.4	頁岩	北上山地 古生代後期

第7表 石器・石製品観察表(2)

No.	石器種別	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	産地
102	剥片	C区 T02 中層	5.3	3.7	0.8	11.6	頁岩	北上山地 古生代後期
103	剥片	C区 T02	3.0	1.7	1.1	5.0	赤色頁岩	北上山地 古生代後期
104	剥片	C区 T02	2.9	1.5	0.9	3.7	頁岩	北上山地 古生代後期
105	剥片	C区 T02	2.2	1.3	0.7	2.7	頁岩	北上山地 古生代後期
106	剥片	C区 T02	2.3	2.6	0.9	3.2	頁岩	北上山地 古生代後期
107	剥片	C区 T02	3.2	1.5	0.4	2.6	頁岩	北上山地 古生代後期
108	剥片	C区 T02	1.7	1.4	0.8	3.1	頁岩	北上山地 古生代後期
109	剥片	C区 T02	2.2	1.4	1.0	2.3	頁岩	北上山地 古生代後期
110	石匙	C区 T03	3.3	2.7	0.3	3.6	頁岩	北上山地 古生代後期
111	磨石	C区 T03	3.0	1.6	0.7	2.9	頁岩	北上山地 古生代後期
112	剥片	C区 T03	2.5	1.6	0.4	1.3	頁岩	北上山地 古生代後期
113	小型打製石斧	C区 T04	11.3	3.2	1.4	1.4	頁岩	北上山地 古生代後期
114	小型磨製石斧	C区 T04	7.9	3.9	1.1	36.4	ホルンフェルス 頁岩が中生代白亜紀に変成	北上山地 氷仙駒体の周囲古生代の 頁岩が中生代白亜紀に変成
115	磨石	C区 T05	11.0	7.0	2.9	233.3	凝灰岩	北上山地 古生代後期
116	磨石	C区 T05	3.9	3.2	0.6	7.6	頁岩	北上山地 古生代後期
117	磨石	C区 T05	3.4	2.4	0.4	3.0	頁岩	北上山地 古生代後期
118	剥片	C区 表採	5.1	4.3	0.9	18.7	頁岩	北上山地 古生代後期
119	圓石	C区 表採	11.9	10.0	3.6	751.1	閃綠岩 白亜紀	北上山地 氷仙駒体が周辺 中生代 白亜紀
120	剥片	表採	2.0	2.1	0.4	2.4	頁岩	北上山地 古生代後期
121	圓石	表採	14.4	12.4	4.5	1296.2	花崗閃綠岩	北上山地氷仙駒体 中生代白亜紀

第8表 陶磁器観察表(8)

No.	重量(g)	出土地点	時代	器種			遺存部位
122	122.4	A区T10山側IV層	18世紀以降	擂鉢			底部
123	34.4	A区 表採	大正時代	型紙摺り絵染付菊花文皿ないし鉢			底部
125	48.2	B区 表採	19世紀以降	染付草文小鉢ないし蕪麦猪口			高台部分
126	31.0	B区 表採	19世紀以降	上色鉢			90%
124	75.4	B区 平坦部	昭和16年以降	色絵二重巻縁コーヒーカップ 中島飛行機社章			口縁部

第9表 古銭観察表(9)

区域名	No.	重量(g)	出土地点	直徑(cm)	種別	初鋳年	備考
B区	127	3.2	B区平坦部	2.3	一錢銅貨	大正5年 (1916)	大正5年の貨幣法改正とともに発行。昭和13(1938)年まで 製造。昭和28(1953)年制定の「小額通貨の整理及び支払金の端 数計算に関する法律」により廃止。

[分析鑑定報告 1]

上長部館跡における放射性炭素年代

(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 测定対象試料

上長部館跡は、岩手県陸前高田市氣仙町牧田に所在する。測定対象試料は、P 4 出土炭化物1点である（表1）。

2 測定の意義

遺構の帰属時期を明らかにする。

3 化学処理工程

(1) メス・ビンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/? (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 测定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する

較正曲線上の曆年代範囲であり、 1σ =68.2% あるいは 2σ =95.4%で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

P4出土炭化物の ^{14}C 年代は 340 ± 20 yrBP、曆年較正年代(1σ)は456~318cal BPの間に3つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-131842	P4出土炭化物	遺構：P 4 層位：1層	炭化物	AAA	-26.67 \pm 0.54	340 \pm 20	95.92 \pm 0.28

[#6134]

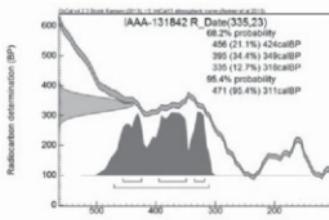
表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-131842	360 \pm 20	94.59 \pm 0.25	335 \pm 23	456calBP~424calBP(21.1%) 395calBP~349calBP(34.4%) 335calBP~318calBP(12.7%)	471calBP~311calBP(95.4%)

[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337~360
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0~50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869~1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion:
 Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355~363



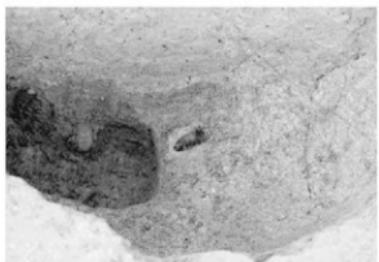
第17図 曆年較正年代グラフ (参考)



調査区近景（北から）



調査区遠景（北から）



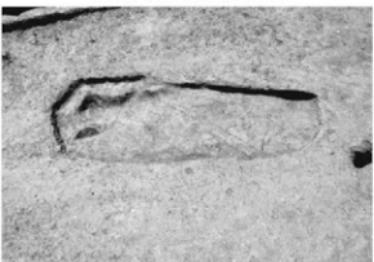
1号土坑遺物出土状況（東から） 1



1号土坑遺物出土状況（東から） 2



2号土坑遺物出土状況（西から）



3号土坑土層（南から）



5・6号土坑（北から）



P 4土層（東から）



B区平坦部完掘（東から）



C区土層（北から）



1



2



3



4



5



6



67

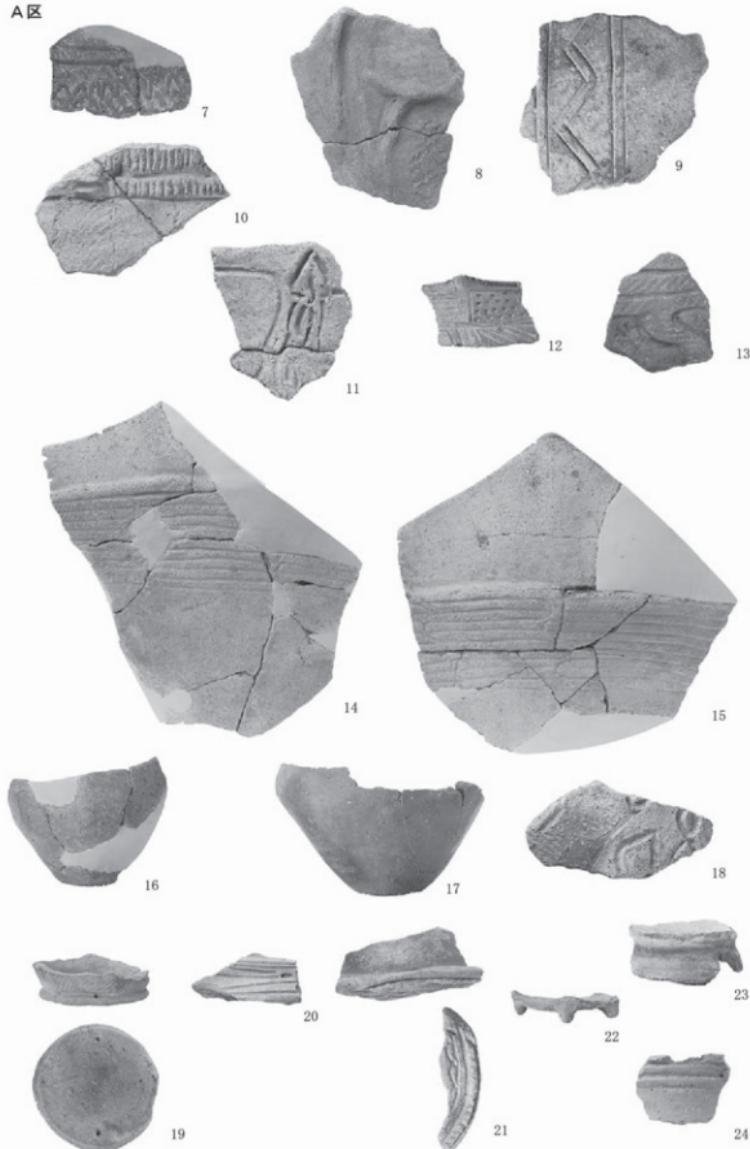


69



写真図版3 造模内出土遺物

A区



写真図版4 遺構外出土遺物 1

B区



25



26



27



28



29

C区



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



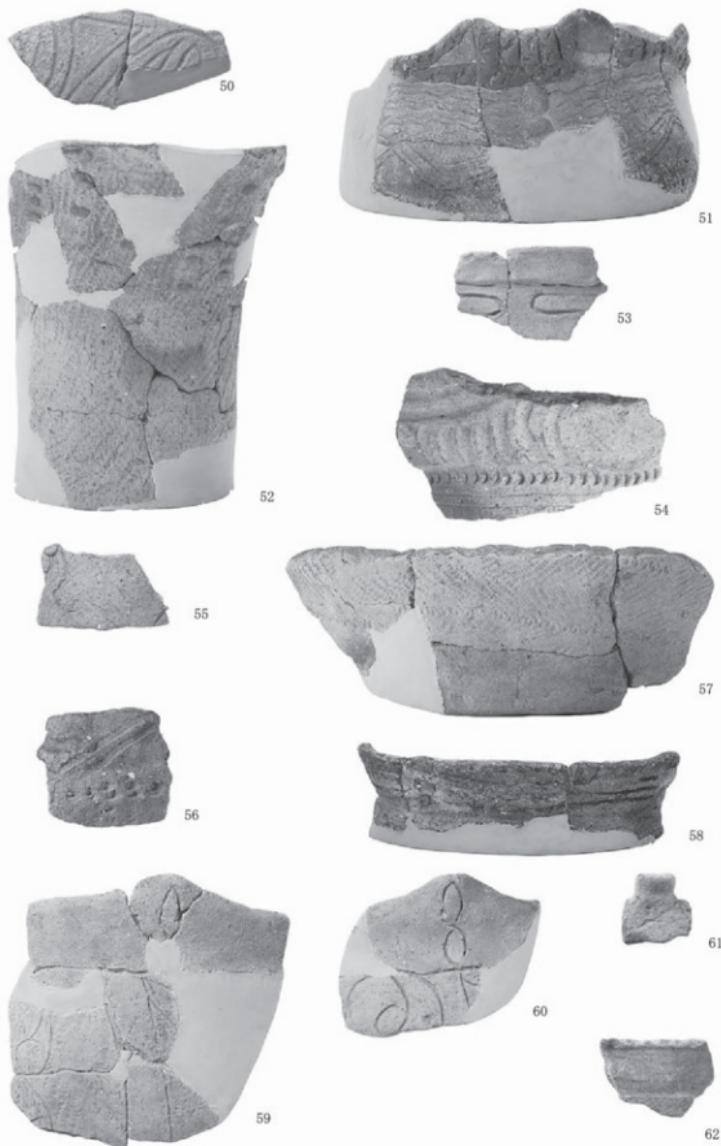
48



49

写真図版5 遺構外出土遺物2

C区



写真図版 6 遺構外出土遺物 3



写真図版 7 遺構外出土遺物 4

(3) 金浜V遺跡 かなはま

所 在 地	宮古市金浜第5地割18-2ほか	遺跡コード・路号	L G 53-0313・K H V -13
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	1,600m ²
事 業 名	三陸沿岸道路	調査終了面積	1,600m ²
発掘調査期間	平成25年7月15日～8月21日	調査 担 当 者	佐藤淳一・塙谷龍平

1 調査に至る経過

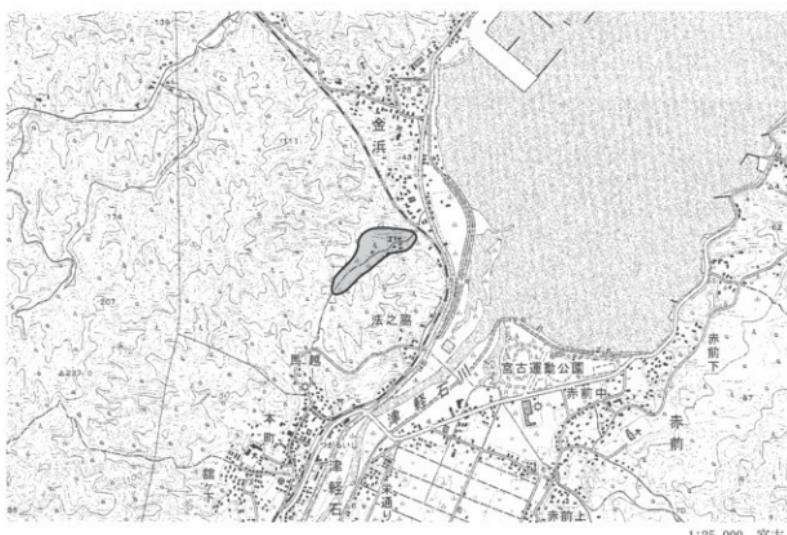
金浜V遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古南）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年2月1日付け国東整陸一課第1102号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年2月7日～8日にわたり試掘調査を行い、平成25年2月18日付け教生第1620号により、工事に先立つて発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、JR 山田線宮古駅から南約 5km、津軽石川河口から北西に約 1km の地点に位置する。海岸線からは約 500m の距離で、2 万 5 千分の 1 地形図には表現されない沢に隣接する尾根の南向き斜面に位置する。地形分類上は丘陵地に分類されている。

調査区は、小尾根の裾部分が主体で、標高の高い順から尾根→緩傾斜面→急崖→沢という地形構成を成し、標高は概ね海拔 30~40m である。

3 基本層序

調査区内における基本層序は以下のとおりである。

I 層 表 土：(20~30cm)

II 層 灰褐色土 (20~60cm)：畑作等により形成された層

III 層 黒褐色土 (0~120cm)：遺構（製鉄関係）、遺物（繩文、製鉄）を含む層

IV 層 暗褐色土 (10~40cm)：遺構及び遺物（繩文）を含む層

V 層 黄褐色土（層厚不明）

4 調査の概要

(1) 遺構

調査は前述した基本層序に従い重機により I 層及び II 層を除去した後、III 層にて 1 回目の遺構検出を行った（検出面 I）。その結果、1 号製鉄炉跡、1 号焼土を確認した。その後 III 層を更に掘り下げ 2 回目の遺構検出を行った（検出面 II）。2 回目の検出作業の結果、2 号焼土、3 号焼土を検出した。検出された遺構は竪穴住居跡 1 棟、製鉄炉跡 1 基、焼土遺構 3 基である。

1号竪穴住居跡

調査区中央西側 C-6 グリッドに位置する。IV 層上部にて検出した。III 層下を掘り下げて検出作業を行ったところ、石囲い炉を構成すると考えられる縦の配列を確認したため、住居跡の可能性があると推測した。しかしながら検出時に明確な遺構プランを確認することは出来ず、断面観察から壁の立ち上がりを確認しつつ掘り進めた。遺構北側の傾斜変換点に近いところを壁の立ち上がりと捉えたが、それ以外の場所で明確な壁の立ち上がりを確認することは出来ず、柱穴も未確認である。遺構内から No.21 の石皿が出土しているほか、遺構の周囲から大木 8a 式の土器片が数点出土している。

1号製鉄炉跡

調査区中央部 F-6 グリッドに位置する。III 層にて検出した。黒褐色土中に焼土ブロックを含む黄褐色土を主体とする長方形のプランを確認した。製鉄炉上部の大半が後世の畑作及び植林等によって削平されており、地下構造部分のみが遺存する状況であった。長径は約 2.8m、短径が約 1.5m である。検出面から埋土最下部までの深さは約 40cm であり、断面は船底形をなす。最下層は焼土層で、その直上に鉄滓及び炭化材を含む層を確認した。埋土から採取された炭化材 2 点について分析鑑定を行ったところ、およそ 1,400~1,500 年前後の較正年代を得た（[分析鑑定 1] を参照）。遺構内からの出土遺物は鉄滓以外に無いが、周囲から羽口が 3 点出土しており、当該製鉄炉に伴う可能性が極めて高い。

製鉄炉跡の検出に関連して、周辺に排滓場が存在する可能性を検討し、遺構の周囲にトレンチを入れて土層確認を行ったところ、排滓場と認定できる遺構は無かった。

1号焼土

調査区西部 C-6 グリッドに位置する。III 層にて検出した。断面観察によれば、一部の強い焼成箇所を除き、全体的に弱い焼成を受けている。出土遺物は無い。

2号焼土

調査区南部E-9 グリッドに位置する。IV層にて検出した。断面観察によれば、全体的に弱い焼成を受けている。出土遺物は無い。

3号焼土

調査区南部E-8 グリッドに位置する。IV層にて検出した。断面観察によれば、一部の強い焼成箇所を除き、全体的に弱い焼成を受けている。出土遺物は無い。

(2) 遺物

土器（1～10）

縄文土器は、総重量5,293 g のうち10点805.5 g を掲載した。時期は縄文時代中期大木8a式を主体とする。

陶磁器（11～16）

陶磁器は、総重量119.3 g のうち、6点90.2 g を掲載した。いずれも破片ないしは小片で、時期は18世紀以降のものが主体である。

石器・石製品（17～22）

石器は総重量10,141.9 g のうち、6点6,478.9 g を掲載した。剥片石器、礫石器とともに縄文時代のものが主体である。

製鉄関連（23～25、写真図版32～34、分析鑑定30・31）

鉄滓（写真図版32～34）は総重量252,622.7 g のうち、一部について集合写真を掲載した。調査区のうち1号製鉄炉跡よりも標高の低い地点かつ遺構に近いグリッドでの出土が多い。遺物については、取り上げたものを、洗浄→磁着検査→（磁着するものはメタルチェッカーで反応確認）→形態分類（流出滓、炉内滓、炉壁、羽口など）→重量計測という流れによって分類を行った。メタルチェッカーは、従来当センターで使用してきた機器（MR50B）が未調整であったため、今回は「下地センサーEX（品番78657シンワ測定株式会社）」を使用した。作業の結果、鉄塊系遺物11,451.4 g 、炉内滓51,688.9 g 、流出滓188,691.1 g 、炉壁791.3 g に分類された。No. 30及び31の鉄滓について分析鑑定を行ったところ、始発原料は砂鉄との結論を得た（[分析鑑定報告2] を参照）。

羽口（23～25）は1号製鉄炉跡周辺から3点出土しており、製鉄炉に伴うものと考えられる。いずれも部分的な出土で装着角度等は不明である。No.25について分析鑑定を行ったところ、 SiO_2 が60.0%、 Al_2O_3 が26.5%を示す胎土の耐火度1,410°Cの羽口であるとの結果を得た〔分析鑑定報告2〕を参照）。

鉄製品（26～29）

鉄製品は64.1 g のうち、4点59.4 g を掲載した。時期を明確に特定できるものは無い。

5 まとめ

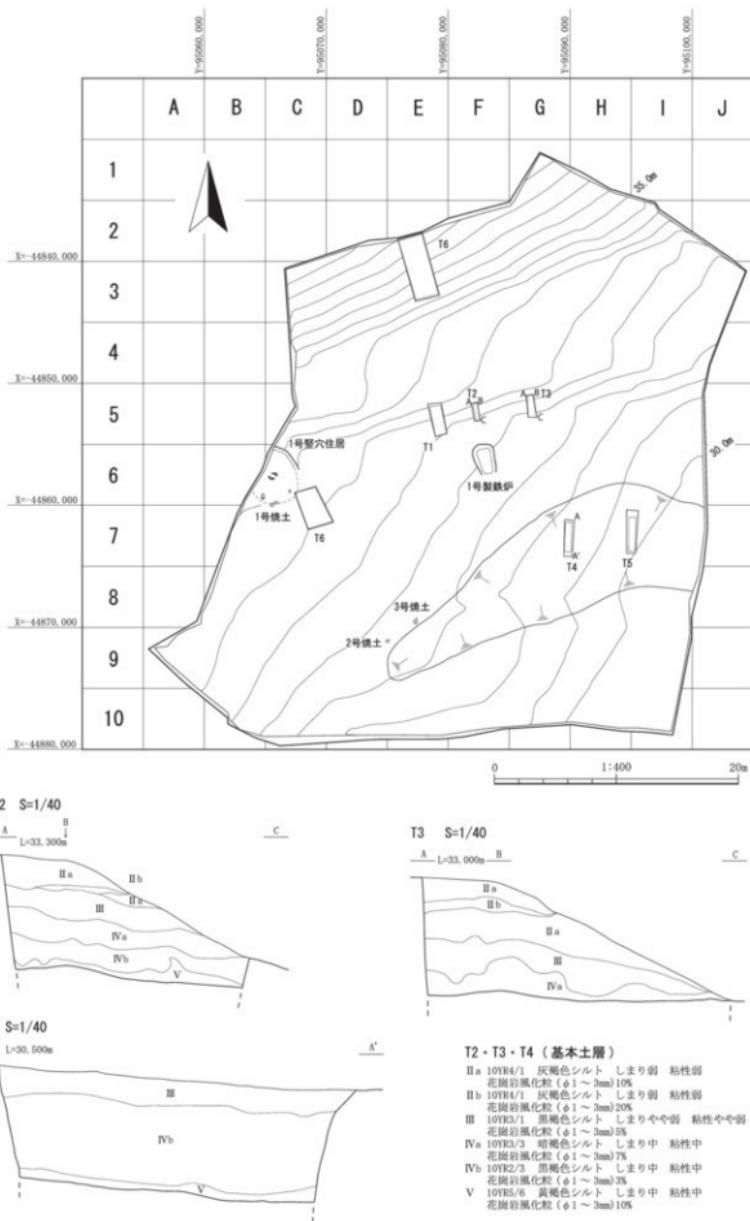
今回の調査によって、当該地域は縄文時代における生活の場の一部を成し、中世の比較的短い期間に製鉄炉による鉄生産が行われていたことが明らかとなった。

なお、金浜V遺跡平成25年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

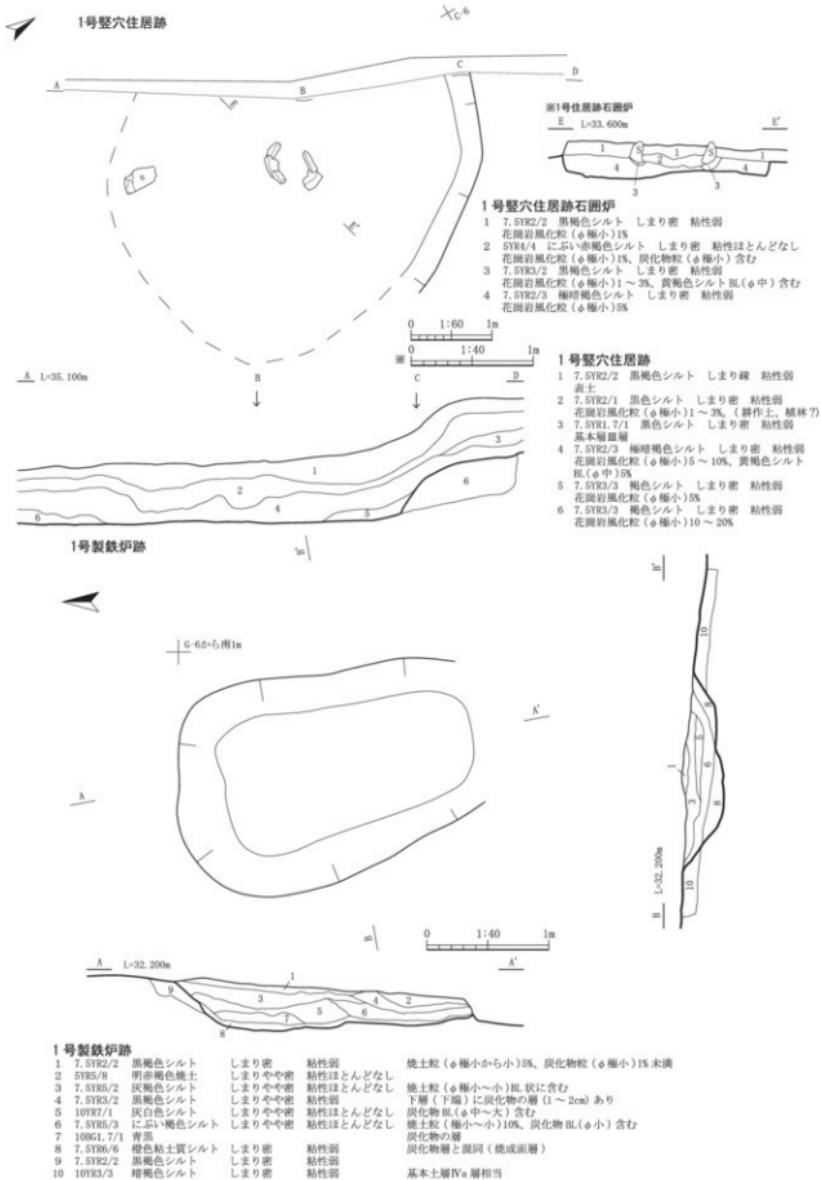
<引用・参考文献>

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2010『金浜I・II遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財 調査報告書第553集

宮古市教育委員会 1992 『金浜I遺跡 昭和58年度発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書30

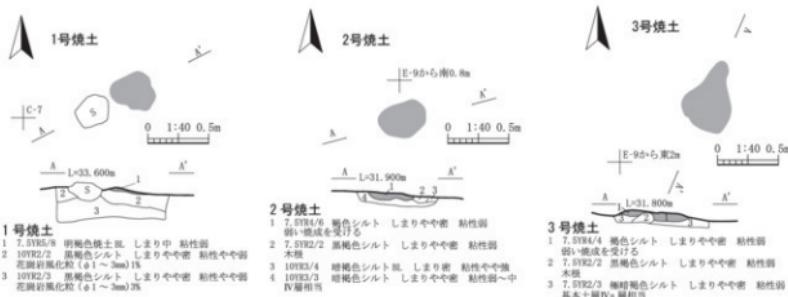


第2図 遺構配置図・基本土層



第3図 1号窓穴住居跡・1号製鉄炉跡

(3) 金浜V遺跡



第4図 1~3号焼土

第1表 土器観察表

No.	出土地点	器種・部位	文様・装飾等	特徴	備考
1	C-10グリッド 植出面II	深鉢・口縁部	口縁部削定、貼付け、壺状裝飾	縄文中期中集	
2	C-6グリッド 植出面II	深鉢・口縁部	口縁部削定、内面スズ付着、うず巻状装飾	縄文中期中集	
3	C-10グリッド 植出面II	深鉢・口縁部	R.L.（縫）、沈輪、貼付による縛帶、スズ付着	縄文中期中集	5と同一個体
4	C-6グリッド 植出面II	深鉢・口縁部	内面スズ付着	縄文中期中集	
5	C-10グリッド 植出面II	深鉢・口縁部	R.L.（縫）、沈輪、貼付による縛帶、スズ付着	縄文中期中集	3と同一個体
6	E-6グリッド 植出面II	深鉢・口縁部	ナデによる縛帶	不明	
7	D-9グリッド 植出面II	深鉢・口縁部	R.L.（縫）、口縁部削定	縄文中期中集	
8	E-6グリッド IV層相当	深鉢・口縁部	R.L.（縫）、口縁部削定装飾（※単位）、口縁部に原形による網状压痕あり	縄文中期中集	
9	E-6グリッド IV層相当	深鉢・口縁部	R.L.（縫）、口沿部の面削痕、突起、内外面スズ付着	縄文中期中集	
10	F-5グリッド 植出面I	深鉢・口縁部	L.（縫）、コブ状の突起、内外面ナデ	縄文中期中集	

第2表 陶磁器観察表

No.	出土地点	器種・部位	残存状況	施土・施薬・施粉など	製作地・年代	備考
11	D-9グリッド 植出面II	蓋	破片	付着物あり	肥前・18C	
12	D-9グリッド 植出面II	碗・口縁	小片	13.2回同一（上部）		
13	D-10グリッド 植出面II	碗・底盤	破片	透明釉	肥前・18C	
14	E-6グリッド 植出面II	碗・底盤	小片	ワラ灰釉	不明・19C?	
15	E-6グリッド 植出面II	碗・口縁	破片	ワラ灰釉	小久慈・19C?	
16	I-10グリッド 植出面II	二輪子六鉢	小片	1	江戸前・17C後～18C初期	

第3表 石器・石製品観察表

No.	出土地点	器種	計測値(cm)			石質	備考
			長さ	幅	厚さ		
17	B-7グリッド 植出面II	石器	4.0	1.0	0.4	1.1	質鉄
18	E-6グリッド 植出面II	スリ石	11.6	7.0	2.9	370.2	花崗岩
19	D-7グリッド 植出面II	スリ石	11.3	8.7	4.5	625.2	花崗岩
20	E-6グリッド 植出面II	スリ石	15.4	8.7	4.2	878.5	花崗岩
21	1号住居跡 球土	石皿	18.9	22.1	7.6	4,200.0	ダイサイト
22	A-9グリッド 植出面II	石製品	9.9	6.9	4.6	403.9	砂岩

第4表 羽口観察表

No.	出土地点	残存部位	残存長(cm)	内径(cm)	外径(cm)	重量(g)	角度(°)	備考
23	G-7グリッド 植出面I	先	12.6	(4.5)	15.3	980.9	不明	
24	F-5グリッド 植出面I	先	14.2	(5.5)	14.6	783.9	不明	
25	F-5グリッド 植出面I	先	15.4	3.9	11.8	1,616.3	不明	

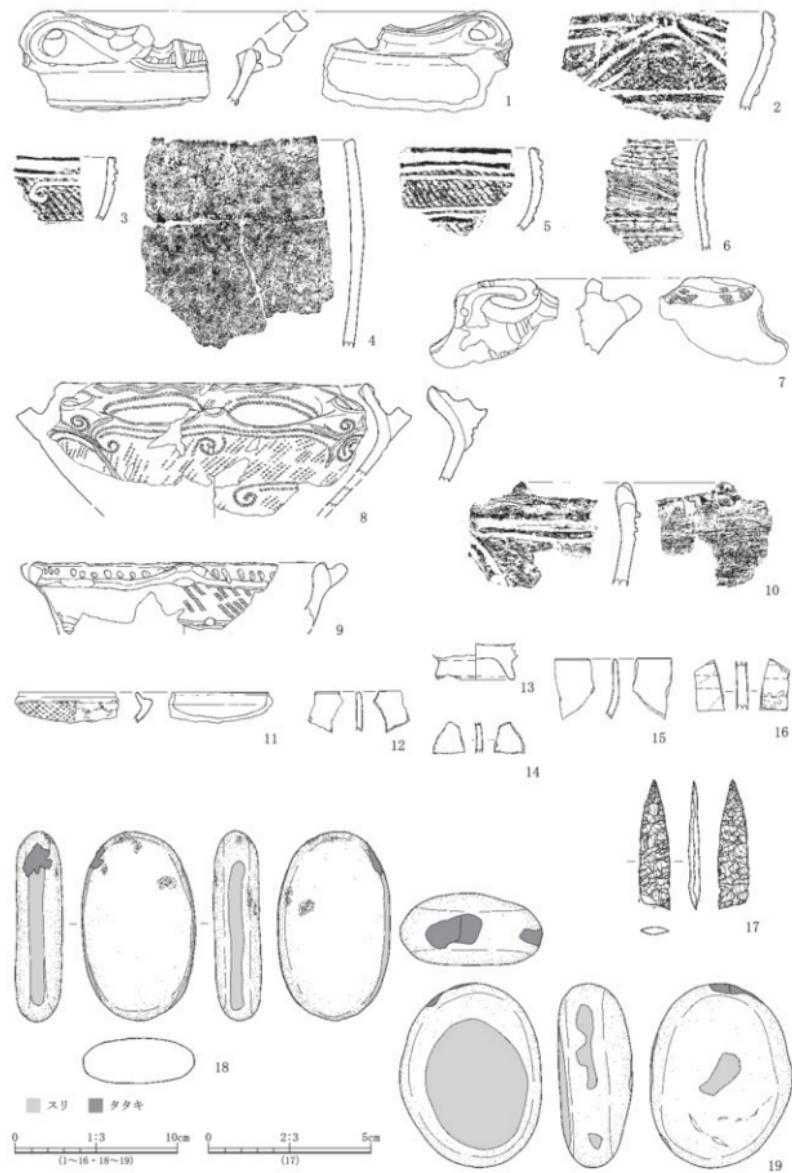
第5表 鉄製品観察表

No.	出土地点	器種	計測値(cm)		備考	
			長さ	幅	厚さ	
26	C-6グリッド 植出面II	不明	4.5	3.8	1.5	刀子の再利用か?
27	C-7グリッド 植出面II	不明 (壺状鉄製品)	4.5	4.3	0.4	
28	D-9グリッド 植出面II	不明	3.2	1.2	0.8	欠損
29	E-5グリッド 植出面II	小刀	11.5	2.9	0.6	欠損

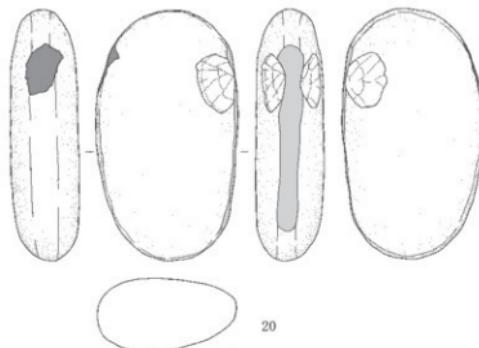
第6表 鉄津分類計測表

No.	出土地点	器種	計測値(cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
26	伊内岸	伊内岸				
メタル饭店あり	メタル饭店なし	メタル饭店あり	16,544.7	1,913.7	1,051.3	35,144.2
11,451.4						185,726.1
						791.3

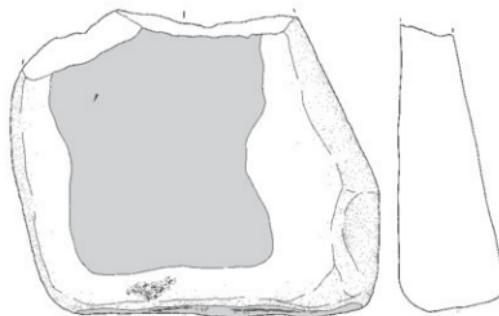
単位(g)



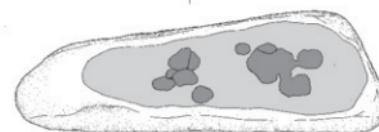
第5図 出土遺物1



20



21

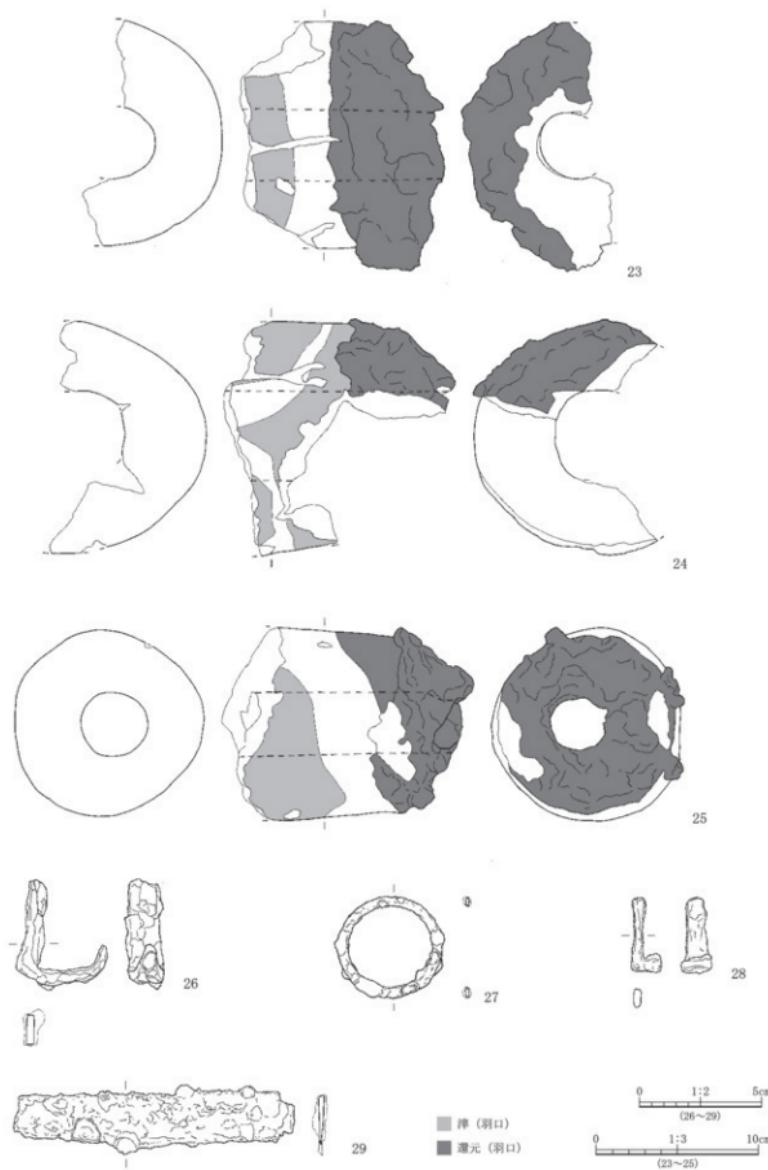


22

■スリ
■タタキ

0 1:3 10cm

第6図 出土遺物2



第7図 出土遺物3



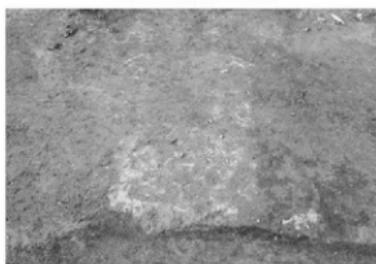
調査区近景（南東から）



1号整穴住居跡近景（南から）



1号整穴住居跡石圍炉断面（南から）



1号製鉄炉跡検出（南から）



1号製鉄炉跡検査中（南から）

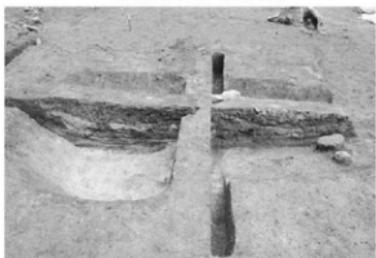
写真図版 1 調査区・検出遺構 1



1号製鉄炉跡精査中（南西から）



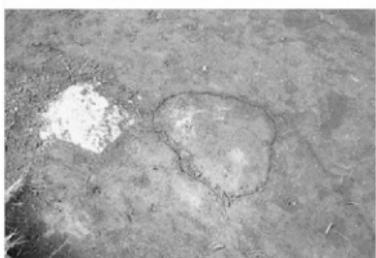
1号製鉄炉跡断面（南から）



1号製鉄炉跡断面（西から）



1号製鉄炉跡近景（南から）



1号焼土近景（南東から）



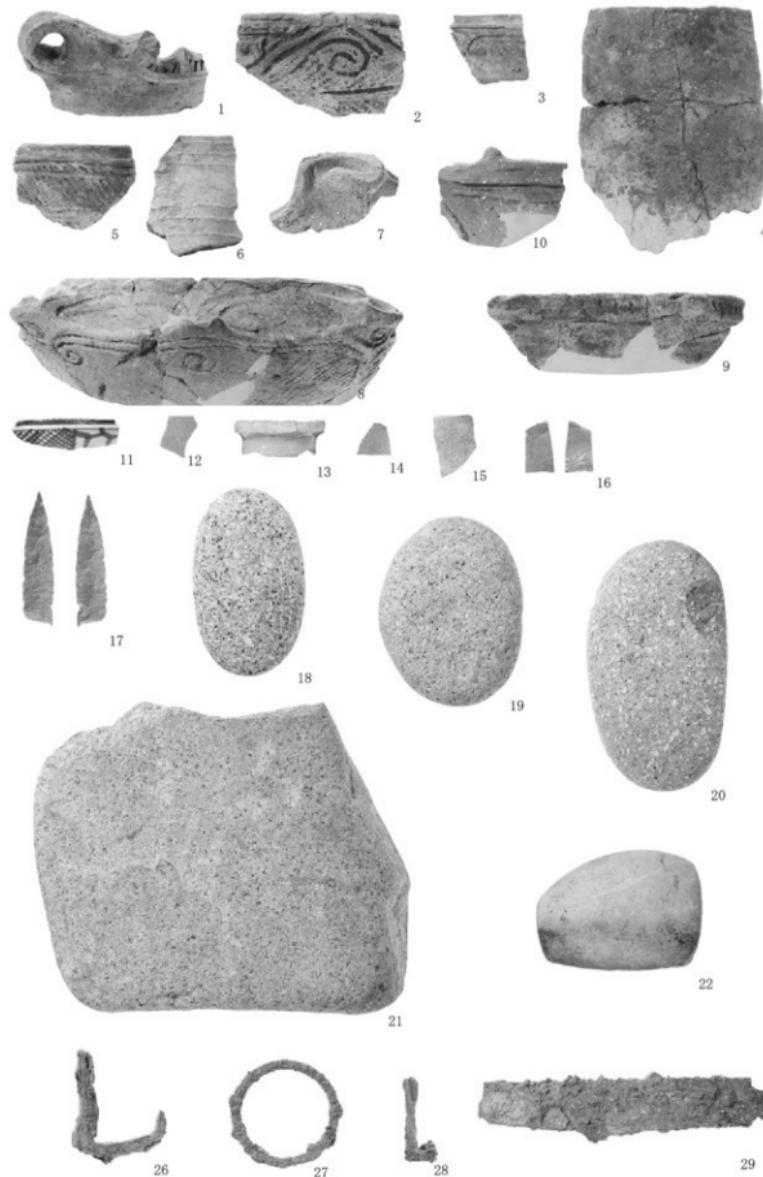
2号焼土断面（南東から）



3号焼土近景（南から）



3号焼土断面（南東から）



写真図版3 出土遺物1



23

24

25



1 2 3 4 5 6

32



1 2 3 4 5 6

33



1 2 3 4 5 6 7 8 9

34

写真図版 4 出土遺物 2

[分析鑑定報告書]

金浜V遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 测定対象試料

測定対象試料は、1号製鉄炉から出土した炭化材2点である（表1）。

2 测定の意義

炭化材の年代測定を行うことにより、製鉄炉の稼働年代を明らかにする。

3 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/? (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合には「AAa」と表1に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 测定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の歴年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、

年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、KHV-13-1が 400 ± 20 yrBP、KHV-13-2が 560 ± 20 yrBPで、年代差が認められる。曆年較正年代(1 σ)は、KHV-13-1が1447~1485cal ADの範囲、KHV-13-2が1325~1415cal ADの間に2つの範囲で示される。較正年代を2 σ の範囲に広げても両者の値は重ならないが、推定される時期に対しては2点ともおむね矛盾しない結果と見られる。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

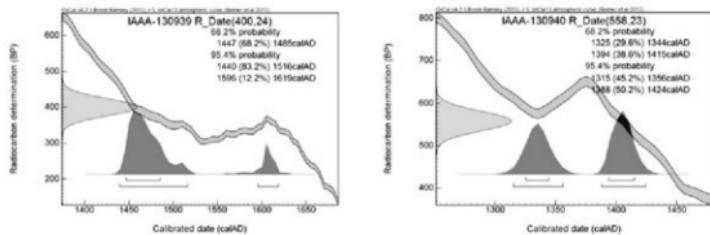
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-130939	KHV-13-1	1号製鉄炉 東側	炭化材	AAA	-28.20 \pm 0.51	400 \pm 20	94.14 \pm 0.29
IAAA-130940	KHV-13-2	1号製鉄炉 西側下層	炭化材	AAA	-25.38 \pm 0.46	560 \pm 20	93.28 \pm 0.27

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) [参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-130939	450 \pm 20	94.51 \pm 0.27	400 \pm 24	1447calAD-1485calAD(68.2%)	1440calAD-1516calAD(83.2%) 1596calAD-1619calAD(12.2%)
IAAA-130940	560 \pm 20	93.21 \pm 0.25	558 \pm 23	1325calAD-1344calAD(29.6%) 1394calAD-1415calAD(38.6%)	1315calAD-1356calAD(45.2%) 1388calAD-1424calAD(50.2%)

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



[図版]曆年較正年代グラフ (参考)

[分析鑑定報告2]

金浜V遺跡 鉄滓・羽口分析・鑑定調査

JFEテクノリサーチ株式会社
ソリューション本部(千葉)
埋蔵文化財調査研究室

1. はじめに

岩手県宮古市金浜第5地割地内に所在する金浜V遺跡から出土した鉄滓・羽口について、化学成分分析・顕微鏡組織観察を含む自然科学的観点での調査を依頼された。鉄滓、及び羽口の化学成分分析、ミクロ組織観察、X線回折分析、耐火度試験などの結果にともとづき材質、出発原料、製造工程上の位置づけなどを中心に調査した。その結果について報告する。

2. 調査項目および試験・観察方法

(1) 調査項目

調査試料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表1に示す。

(2) 調査方法

(i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

試料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位以下で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、試料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。試料の出土位置や試料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動き始めめる位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。金属検知にあたっては参考標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱(1.5mmφ×1.5mmH、2.0mmφ×2.0mmH、5mmφ×5mmH、10mmφ×10mmH、16mmφ×16mmH、20mmφ×20mmH、30mmφ×30mmH)を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

(ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・全鉄(T.Fe) : 三塩化チタン還元-二クロム酸カリウム滴定法。
- ・金属鉄(M.Fe) : 臭素メタノール分解-EDTA滴定法。
- ・酸化第一鉄(FeO) : 二クロム酸カリウム滴定法。
- ・酸化第二鉄(Fe₂O₃) : 計算。・化合水(C.W.) : カールフィッシャー法。
- ・炭素(C)、イオウ(S) : 燃焼-赤外線吸収法。
- ・ライム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、酸化ナトリウム(Na₂O)、珪素(Si)、マンガン(Mn)、リン(P)、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、アルミニウム(Al)、ヴァナジウム(V)、チタン(Ti) : ICP発光分光分析法。
- ・シリカ(SiO₂)、アルミナ(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化リン(P₂O₅)、酸化カリウム(K₂O) : ガラスピード蛍光X線分析法。
但しCaO、MgO、MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスピード蛍光X線分析法を選択。

・酸化ナトリウム(Na₂O)：原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、16成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe₂O₃、シリカSiO₂、アルミナAl₂O₃、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa₂O、酸化カリウムK₂O、二酸化チタンTiO₂、酸化マンガンMnO、酸化リンP₂O₅、化合水C.W.、炭素C、ヴァナジウムV）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

胎土成分は、12成分（全鉄T.Fe、酸化鉄FeO、シリカSiO₂、アルミナAl₂O₃、ライムCaO、マグネシアMgO、化合水C.W.、二酸化チタンTiO₂、酸化マンガンMnO、酸化ナトリウムNa₂O、酸化カリウムK₂O、炭素C）を化学分析している。

(iii) 顕微鏡組織観察

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。鉄滓試料は特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精鍊工程の判別、使用原料なども検討する。羽口試料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。

(iv) X線回折分析

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性X線を検出（回折）できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

測定装置 理学電気株式会社製 ロータフレックス（RU-300型）

測定条件

①使用X線	Cu-K α (波長=1.54178 Å)
②K β線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③管電圧・管電流	55kV・250mA
④スキャニング・スピード	4. 0° /min
⑤サンプリング・インターパル	0.020°
⑥D.S.スリット	1°
⑦R.S.スリット	0.15mm
⑧S.S.スリット	1°
⑨検出器	シンチレーション・カウンター

(V) 耐火度測定

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JIS R 2204（耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法）及びJIS R 8101（耐火度試験用標準コーン）に準拠して測定する。

遺物試料を粉碎し、規定（量的に少量であるから寸法は第2種の小型：幅7mm、高さ27mm）のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に装着し、毎分5°Cで加熱する。コーンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を耐火度（溶倒温度）とする。

3. 調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて70～71頁に示す。表1～4に試料の化学成分分析結果を、表5にX線回折分析の結果を、表6に耐火度測定結果をそれぞれ示した。全試料の外観写真を72～74頁に、鉄滓と羽口の顕微鏡ミクロ組織を75～80頁にそれぞれ示す。

以下、試料の番号順に述べる。

試料No. 25 羽口、着磁度：なし、メタル反応：なし

外観観察：外観写真を72頁に示す。重量1610.2g、長さ137.3mm、幅116.6mm、孔部は先端から基部までで差は殆んどなく内径は後部側の計測で37～38φmm、先端部は溶損し、滓の付着で黒褐色を呈している。外径は後部側の計測で115～118φmm、外表面は先端部から60～100mmが黒色に変色している。孔内部には軸方向に数本の亀裂が走っている。緻密でよく練られた羽口である。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を75～76頁に示す。外観に見られる大きな大きな鉱物粒はあまり観察されないが、鉱物粒は多い印象がある。粘土質の素地に半透明の石英粒や長石類などの鉱物粒が多く観察される。

化学成分：化学成分分析結果を表3～4に示す。強熱減量5.80%、化合物は3.72%で結晶水など残存した状態である。 SiO_2 は60.0%と通常の粘土並みで、耐火度に有利な Al_2O_3 は26.5%と通常の粘土より高い。一方、造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) 中の軟化性を持つアルカリ士類成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は1.41%で並である。耐火度を低下させると思われる $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ は2.35%である。軟化性成分である全鉄分は3.74%と並である。MnOは0.06%である。

耐火度：耐火度測定の結果を70頁の表6に示す。耐火度は1410°Cで、成分系を反映して製鉄炉の羽口として高い方である。

以上から本試料は SiO_2 が60.0%、 Al_2O_3 が26.5%を示す胎土の耐火度1410°Cの羽口である。

試料No. 30 鉄滓、着磁度：1、メタル反応：なし

外観観察：外観写真を73頁に示す。重量185.4g、長さ61.0mm、幅50.1mm、厚さ37.7mm。ゴツゴツとした表面のずつしりと重量感のある鉄滓で酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色である。上面側には2～3mm大の気泡が点在し、1～3mm大の小石も多数付着している。下面側は破面で表面は平滑で気泡は観察されない。着磁度は1でメタル反応はない。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を77～78頁に示す。繭玉状のウスタイト (Wustite : FeO) と思われる組織が多く観察され、ウルボスピニル (Ulvospinel : 2FeO·TiO₂) 組織と樹枝状に見えるやや白い灰色のマグネタイト (Fe₃O₄) あるいはこれらの背後にファイヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) 組織も観察される。

化学成分：化学成分分析結果を表1～2に示す。全鉄54.1%に対して金属鉄は0.16%とわずかである。FeOは59.8%、Fe₂O₃は10.7%、 SiO_2 は15.7%、 Al_2O_3 は4.25%、 TiO_2 は4.47%で始発原料は砂鉄である。FeO-NiO-TiO₂の3成分系に換算するとFeOは80.3%、 SiO_2 は14.8%、 TiO_2 は4.9%となる。71頁のFeO-NiO-TiO₂系の平衡状態図ではウスタイト、及びウルボスピニル組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。71頁に示す図2は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2で見ると本試料は砂鉄系製鉄滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した鉄滓と見られる。

X線回折：結果を70頁の表5に示す。ウスタイト (Wustite : FeO) 組織、及びウルボスピニル (Ulvospinel : TiO₂) 組織が確認された。

spinel:2FeO・TiO₂)組織の回折線が高強度に、マグネタイト(Fe₃O₄)組織、及びファイヤライト(Fayalite:2FeO・SiO₂)組織の回折線が弱強度で認められる。

試料No. 31 鉄滓、着磁度：1、メタル反応：なし

外観観察：外観写真を74頁に示す。重量438.5g、長さ93.3mm、幅83.1mm、厚さ59.6mm。不齊台形状のずつしりと重量感のある鉄滓で粘土や小石が多数付着している。上面側には丸味を帯びた滓が観察され破面で見ると発泡で生じた5~10mm大の気泡が観察される。下面側は粘土や白色の礫が付着した面である。着磁度は1でメタル反応はない。

顕微鏡組織：滓の顕微鏡組織写真を79~80頁に示す。ウルボスピニル(Ulvospinell:2FeO・TiO₂)組織とマグネタイト(Fe₃O₄)と思われる組織が多く、これらの背後にファイヤライト(Fayalite:2FeO・SiO₂)組織が観察される。

化学成分：化学成分分析結果を表1~2に示す。全鉄42.8%に対して金属鉄は0.20%とわずかである。FeOは48.2%、Fe₂O₃は7.34%、SiO₂は23.8%、Al₂O₃は5.82%、TiO₂は5.37%で始発原料は砂鉄である。FeO-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOは65.6%、SiO₂は28.1%、TiO₂は6.3%となる。71頁のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではウルボスピニル組織、マグネタイト組織、及びファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。71頁に示す図2は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

X線回折：結果を70頁の表5に示す。ウルボスピニル(Ulvospinell:2FeO・TiO₂)組織、及びマグネタイト(Fe₃O₄)組織の回折線が高強度に、ファイヤライト(Fayalite:2FeO・SiO₂)組織の回折線が弱強度で認められる。

4.まとめ

本調査で得られた3試料は鉄滓2試料、羽口1試料である。鉄滓の出所を製造工程別に推定すると、製錬工程が2試料で今回調査した遺跡では鉄素材の供給である製錬が行なわれていた可能性が高いと考えられ、鉄滓2試料いずれからもTiO₂鉱物のウルボスピニル組織が観察されていることから、本遺跡の始発原料は砂鉄と判断される。羽口はSiO₂が60.0%、Al₂O₃が26.5%を示す胎土の耐火度1410°Cの羽口である。

表1 鉄津の化学組成分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	比率	
											FeO	Fe ₂ O ₃
No.30	54.1	0.16	59.8	10.7	15.7	4.25	1.46	1.10	0.15	0.14	84.9	15.1
No.31	42.8	0.20	48.2	7.34	23.8	5.82	3.65	2.83	0.50	0.38	86.8	13.2

表2 鉄津の化学組成分析結果（続き）(%)

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	C	化合水	V	TiO ₂ / T.Fe	MnO/ TiO ₂	造津成分
No.30	4.47	0.61	0.528	0.03	0.61	0.32	0.080	0.136	22.8
No.31	5.37	1.25	0.603	0.01	0.22	0.072	0.125	0.233	37.0

造津成分 = SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + Na₂O + K₂O

表3 羽口の化学成分分析結果 (%)

試料No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O
No.25	3.74	0.01	1.58	3.58	60.0	26.5	0.41	1.00	1.78	0.57

表4 羽口の化学成分分析結果（続き）(%)

試料No.	TiO ₂	MnO	強熱減量	化合水	C	耐火度(℃)
No.25	0.61	0.06	5.80	3.72	0.14	1410

表5 X線回折測定結果

試料No.	同定鉱物種と回折強度
No.30	W強、U強、M弱、F弱
No.31	U強、M強、F弱

鉱物記号 : W (ウスタイト : Wustite-FeO)、M (マグネタイト : Magnetite-Fe₃O₄)、
 F (ファイヤライト : Fayalite-Fe₂SiO₄)、U (ウルボスピネル : Ulvöspinel-2FeO • TiO₂)、

表6 炉壁の耐火度試験結果

試料No.	試験結果	溶倒温度 (℃)	色	膨張	試験錐の性状
No.25	SK14	1410	茶褐色	わずかに膨張	光沢なし

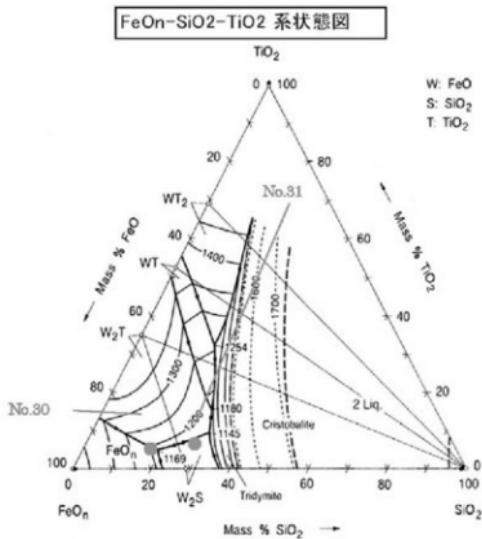
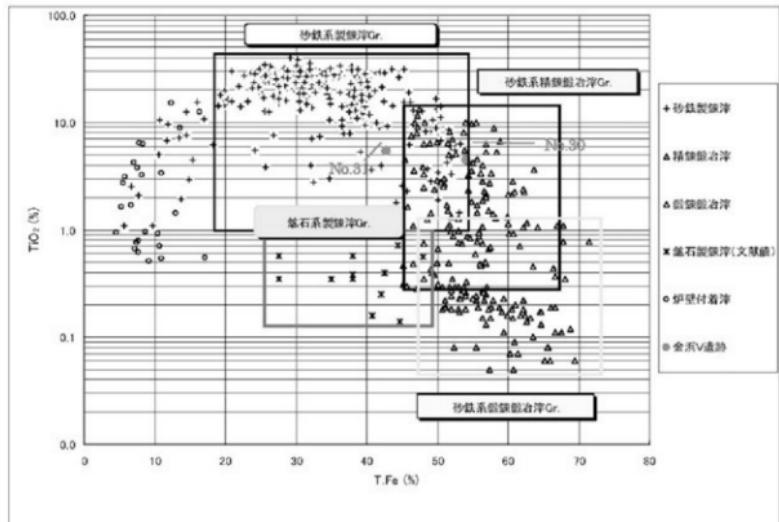
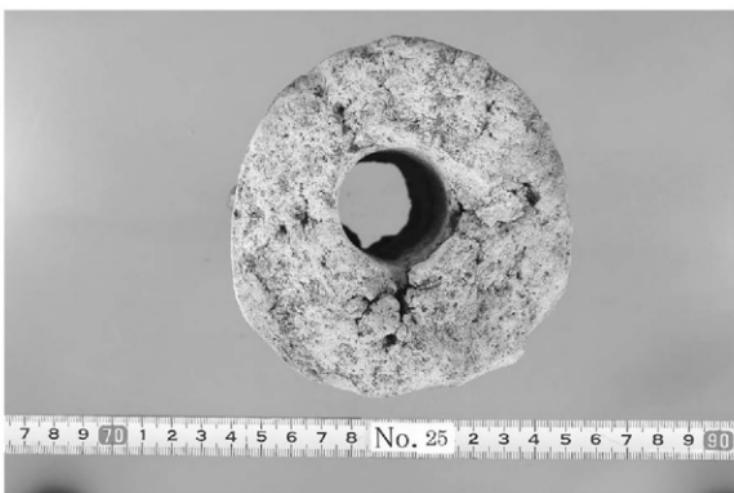
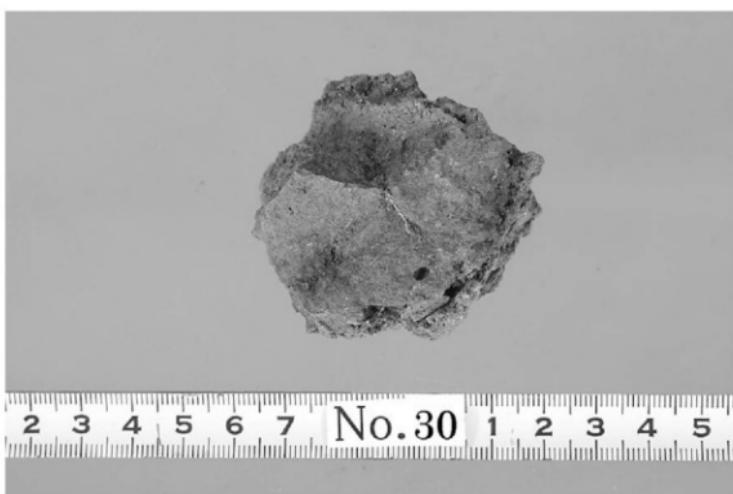
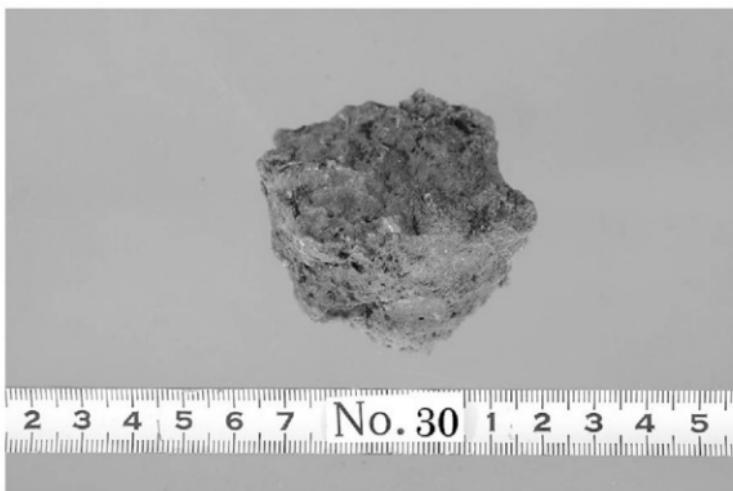
図1 FeO–SiO₂–TiO₂系鉄滓の平衡状態図

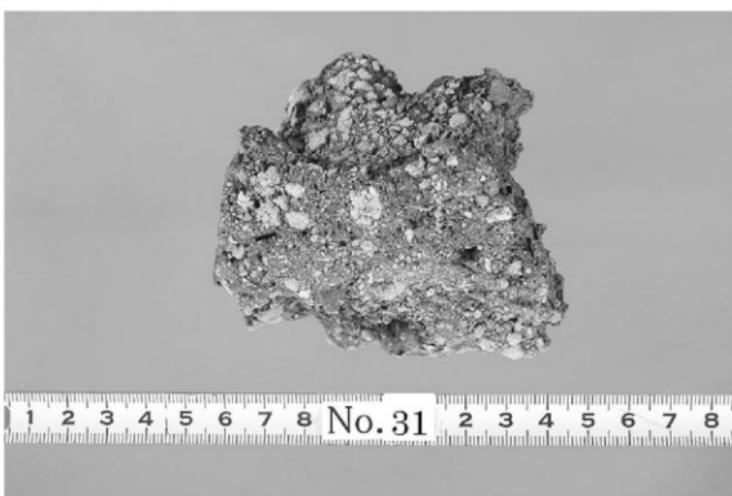
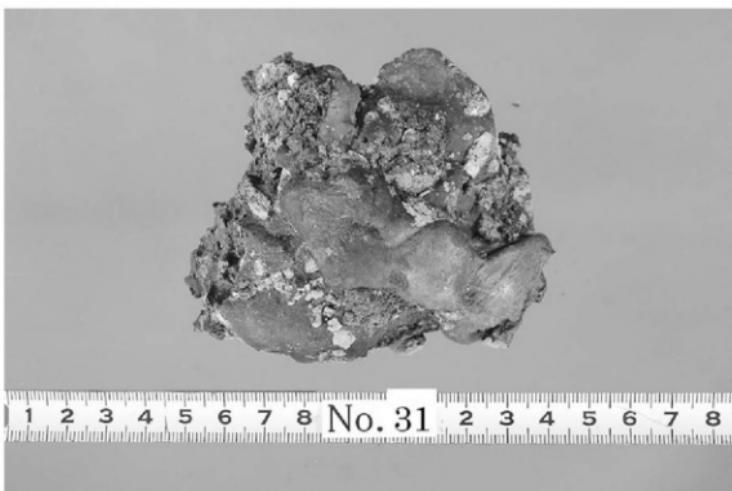
図2 製錬滓、精錬滓、及び鍛錬滓の分類



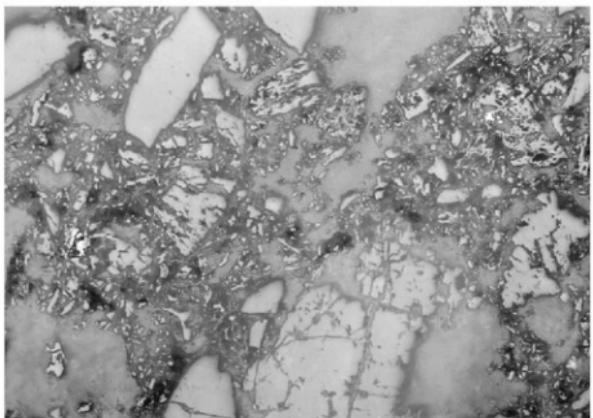
外観写真 No.25



外観写真 No.30



外観写真 No.31

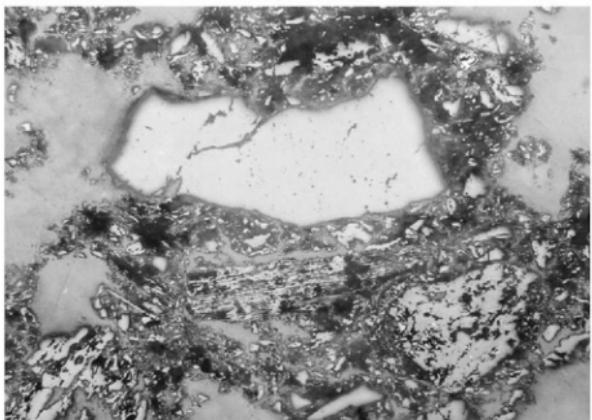


×100

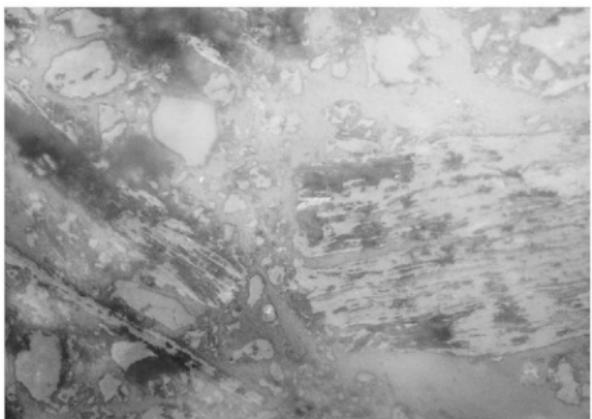


×400

顯微鏡写真 No.25-1

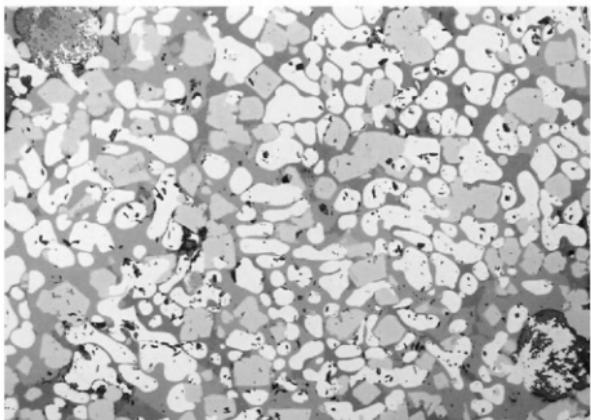


×100

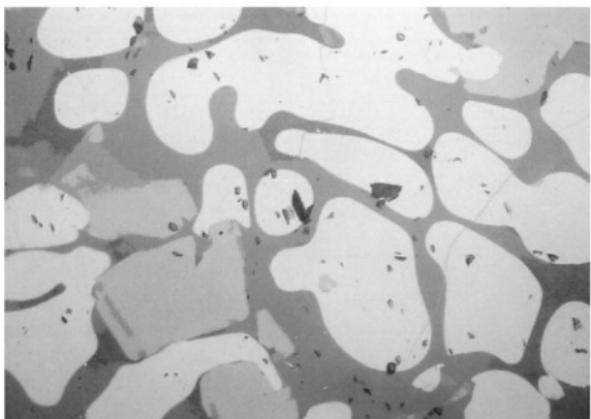


×400

顯微鏡写真 No.25-2

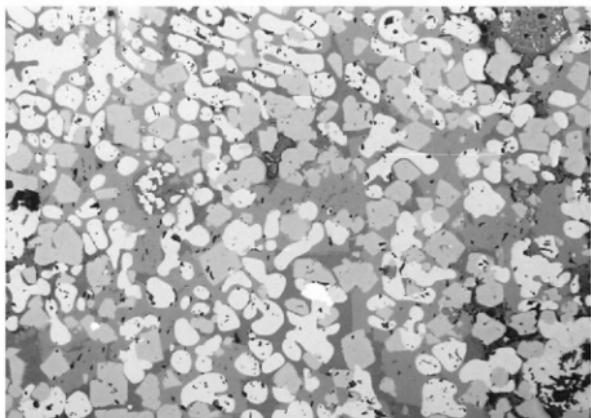


×100

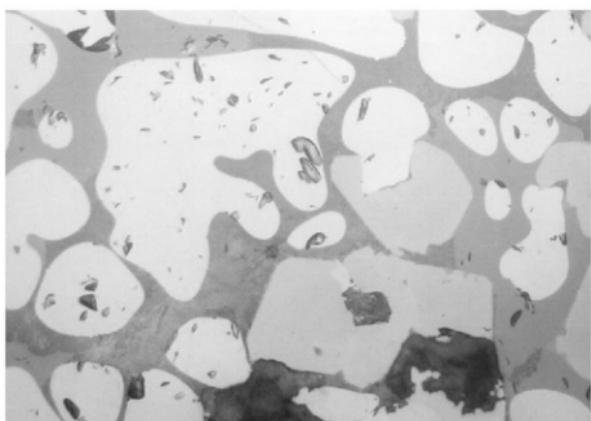


×400

顯微鏡写真 No.30-1

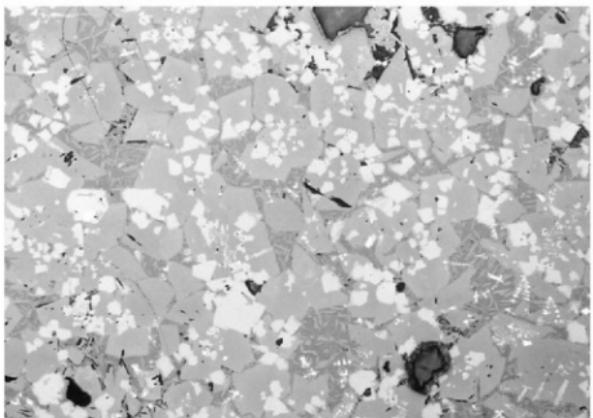


×100

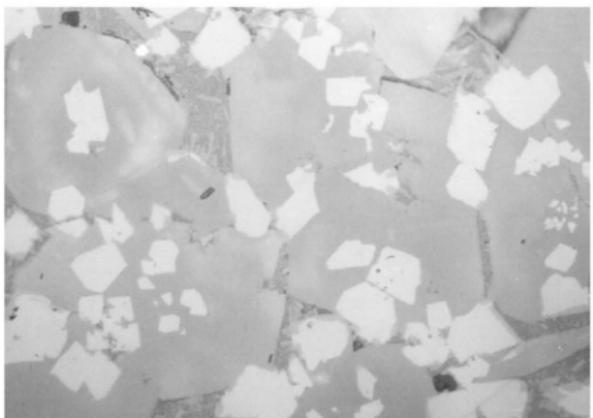


×400

顯微鏡写真 No.30-2

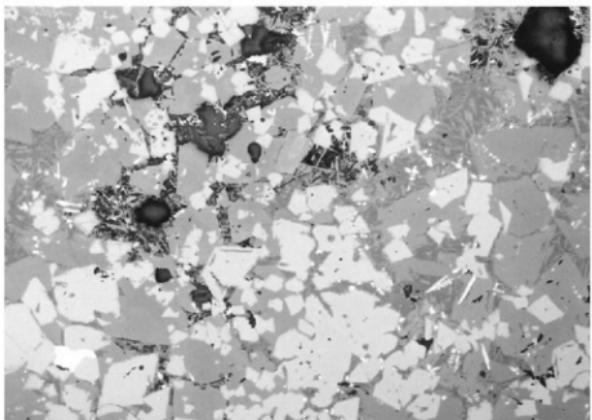


×100

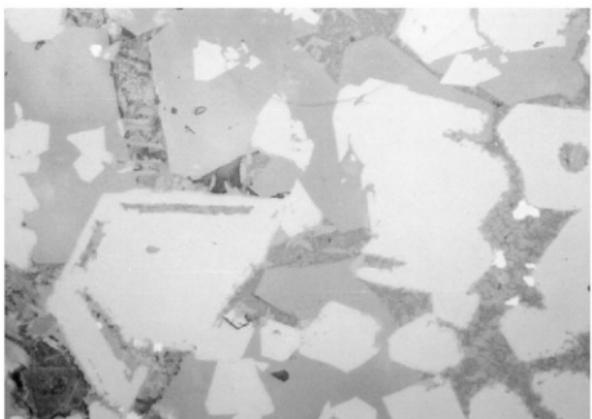


×400

顯微鏡写真 No.31-1



×100



×400

顯微鏡写真 No.31-2

(4) おとべ
乙部遺跡

所 在 地	宮古市田老字青野滝北5-5ほか	遺跡コード・略号	K G 84-0069・OB-13
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	2,500m ²
事 業 名	三陸沿岸道路	調査終了面積	2,500m ²
発掘調査期間	平成25年10月15日～11月29日	調査 担 当 者	巴 亜子・西澤正晴

1 調査に至る経過

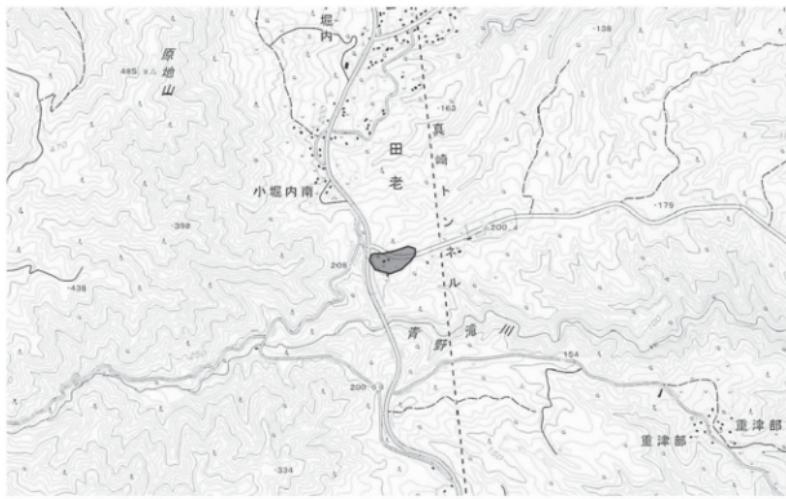
乙部遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（宮古中央～田老）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年8月1日付け国東整陸一課第46号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年9月25日及び平成25年4月15日～16日にわたり試掘調査を行い、平成24年10月1日付け教生第942号及び平成25年5月10日付け教生第207号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年6月28日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地、周辺遺跡（第2図、第1表）

遺跡は宮古市の北東、田老地区に位置し、道の駅たろうから北西1.2kmの地点に立地する。遺跡は青野瀧川の北側に位置する尾根の先端で調査区の北西方向に向かって傾斜している。南側には青野瀧川が、北側には小さな沢が流れている。現状は山林で、標高は188～194mである。

田老地区の北側では谷底平野部に遺跡が多く分布する。乙部遺跡の周辺には複数の遺跡が確認されており、ほとんどが縄文時代の散布地だが、昭和56年に発掘調査が行われた小堀内遺跡（14）では、縄文時代前期の遺物や土坑が確認されている。このほか、縄文時代前期の遺物が見つかっている物見峠I（19）・物見峠III（17）・小堀内遺跡、縄文時代中期の物見峠II（18）・小堀内・向新田I遺跡（13）などがある。

乙部遺跡（16）は、平成19年に宮古市教育委員会によって踏査が行われており、その際遺物は出土しなかった。その後岩手県教育委員会で実施された試掘調査により乙部遺跡北側より遺物が確認されたため、今回の発掘調査となった。



第2図 周辺遺跡

1:25,000 田老鉱山

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	遺構・遺物	番号	遺跡名	時代	種別	遺構・遺物
1	向新田XIV 縄文	新石器	散布地	縄文土器(早期)	12	向新田Ⅱ 縄文	新石器	散布地	縄文土器(後期)
2	向新田XV 縄文	新石器	散布地	縄文土器(前・中期)、胎生土器、フレーク	13	向新田Ⅲ 縄文	新石器	散布地	縄文土器(中・後期)
3	向新田XVI 縄文	新石器	散布地	縄文土器(後期)	14	小堀内 縄文	新石器	散布地	縄文(中期)、貝器及び縄文土器・陶土(中・後期)・土器
4	向新田XVII 縄文	新石器	散布地	縄文土器	15	向新田Ⅳ 縄文	新石器	散布地	縄文土器・骨器
5	向新田XVIII 縄文	新石器	散布地	縄文土器	16	乙部 縄文	新石器	散布地	縄文土器(中期)
6	向新田XIX 縄文	新石器	散布地	縄文土器(中期)	17	物見峠Ⅲ 縄文	キヤンブ地	散布地	縄文土器(初期)
7	向新田XX 縄文	新石器	散布地	縄文土器(前・中・後・後期)、磨石、石斧、剥片	18	物見峠Ⅳ 縄文	キヤンブ地	散布地	縄文土器(中期)、石斧、フレーク
8	向新田XXI 縄文	新石器	散布地	縄文土器(前・中・後・後期)、石器	19	物見峠Ⅴ 縄文	キヤンブ地	散布地	縄文土器(中期)
9	向新田XXII 縄文	新石器	散布地	縄文土器(前・中・後・後期)	20	青野瀧南 縄文	新石器	散布地	縄文土器・フレーク、石器
10	向新田XXIII 縄文	新石器	散布地	縄文土器(中期)	21	青野瀧南Ⅱ 縄文	新石器	散布地	縄文土器(中期)
11	向新田Ⅲ 縄文・胎生	新石器	散布地	縄文土器(中期)、胎生土器					

3 基本層序

本遺跡の基本層序は、概ね以下のとおりである。

I層は現表土である。II層は縄文時代前期の遺物が出土している。また、III層下面に含まれる赤色礫は赤色の凝灰岩と赤色の頁岩であることが分かった。各層の土色及び詳細は以下のとおりである。

I層 10YR1.7/1 黒色土 粘性中 しまり中 根などが多く入っている。現表土

II層 10YR4/4 褐色土 粘性やや強 しまり中 径5cmのIII層ブロックを10%、縄文時代の遺物を含む。

III層 10YR7/6~6/8 明黄褐色土 粘性強 しまり強 径10~20cmの赤色礫を下面に含む。

4 調査の概要（第3図）

調査区のグリッド設定は、調査区内に任意で打設した3級基準点の値から、100×100mの大グリッドを設定した。任意の原点を起点とし、南北方向には北からローマ数字を、東西方向には西から大文字アルファベットで表した。また、4×4mの小グリッドも大グリッドと同様に、南北方向は北からアラビア数字、東西方向には西から小文字アルファベットで表した。またグリッドの交点に区画杭を打設した。

打設した杭の値は以下のとおり（世界測地系）である。なお、Zは標高値である。

K 1 X=-24302. 955m Y=96791. 433m Z=194. 303m K 2 X=-24256. 893m Y=96782. 305m Z=188. 362m

No. 1 X=-24296. 000m Y=96792. 000m Z=193. 752m No. 2 X=-24272. 000m Y=96792. 000m Z=191. 279m

No. 3 X=-24308. 000m Y=96772. 000m Z=193. 646m No. 4 X=-24280. 000m Y=96808. 000m Z=193. 201m

調査は人力でトレンチを掘削後、重機によりII層下面まで掘り下げを行った。II層中で遺物が多い地点はII層中位付近まで掘り下げた。その後検出と精査を行った。また調査区内にトレンチを複数箇所設定し、III層で遺構が検出されないことを確認した。

調査の結果、土坑2基と遺物集中区2箇所が確認された。遺物は、土器が大コンテナ5箱総重量約77kg、石器類が剥片石器・礫石器合わせて小コンテナ2箱、総重量18.9kgとなった。掲載遺物は土器は1~40、石器はS 1~S 24とつけた。

（1）遺構と遺構内出土遺物

S K01土坑（第4・5図・写真図版1）

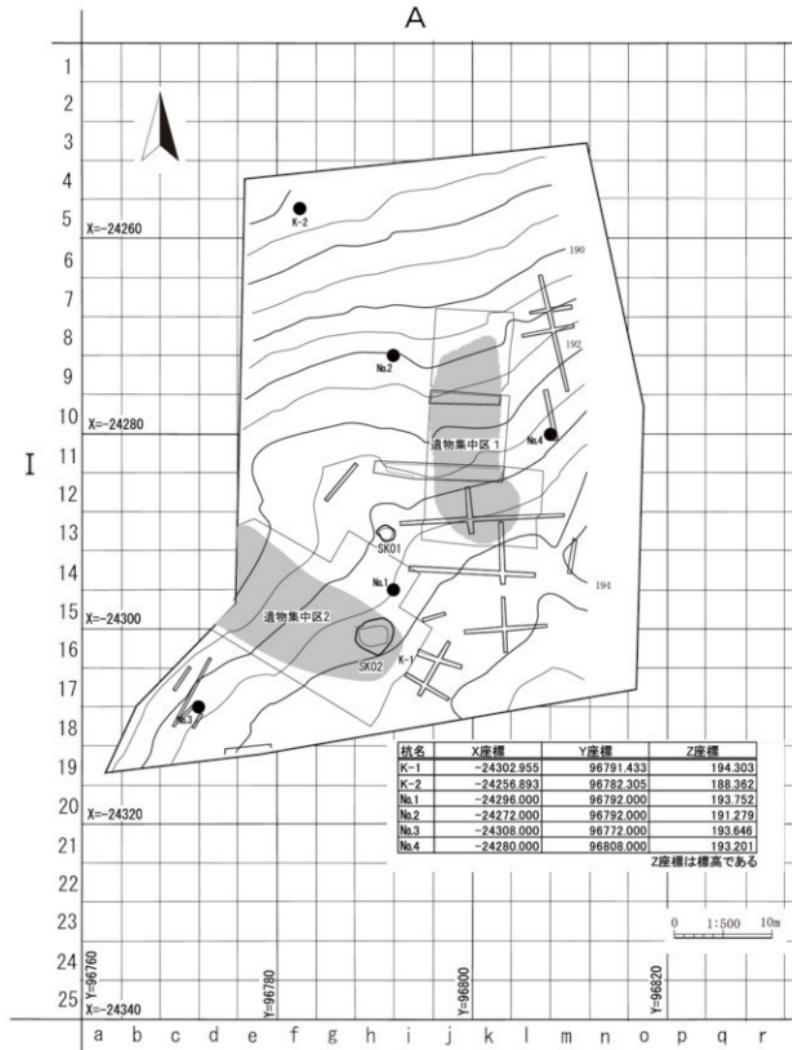
調査区のほぼ中央IA13hグリッドのIII層上面で確認した。規模は長軸1.9m、短軸1.5mの凹凸のある不整楕円形を呈する。確認面からの深さは35cmである。底面はやや丸みを持ち、壁面が緩やかに外傾する。埋土は単層でIII層ブロックを含んでいる。

遺物は縄文土器数点と石匙、剥片が出土した。1は横位の單輪絶条体第1類が施文されている土器である。文様の特徴から前期前葉と考えられる。S 1は石匙で縦長剥片の表面を中心に剥離が両面に及んでいる。

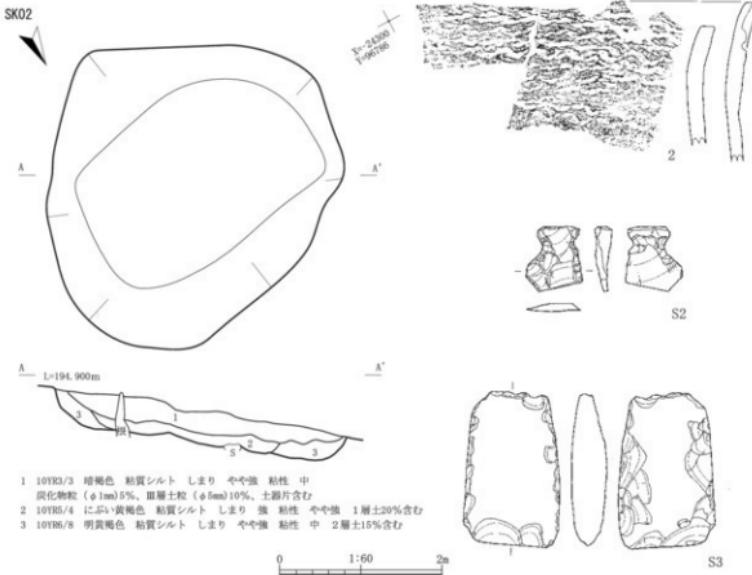
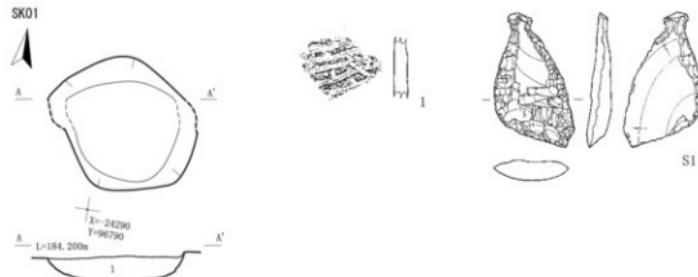
S K02土坑（第4・5図・写真図版1）

調査区中央よりやや南よりのIA15h・16hグリッドのII層下面で確認した。南東から北西に緩やかに傾斜している。規模は長軸4.0m、短軸3.5mの南側にやや張り出す不整楕円形を呈する。確認面からの深さは40cmである。底面は小さな凹凸があり、地形の傾斜と同様に南東から北西へ傾斜する。壁面は緩やかに外傾する。埋土は3層に区分した。1層に縄文時代前期の土器を多く含んでいた。3層が斜堆積をしていることから自然堆積であると考えられる。

遺物は縄文土器や剥片石器・礫石器が出土し、うち3点を掲載した。2は口縁部破片で小突起を持ち、口縁部には多段結節回転文が施文されている。S 2は石匙のつまみ部分で縦長石匙であると考え



第3図 遺構配置図



1・2, S3 0 1:3 10cm

S1・S2 0 1:2 10cm

第4図 SK01・02

られるが先端が欠損している。微細剥離は縁辺に及んでいる。礫石器（S 3）は打製石斧である。土器の年代から前期前葉であると考えられる。

(2) 遺物集中区出土遺物

調査区内に遺物集中範囲を 2 箇所確認でき、北側を遺物集中区 1、南西側を遺物集中区 2とした。遺物集中区 1（第 5 図、第 2 表、写真図版 2）

調査区の中央よりやや東側に位置する。微かに窪む谷状の地形の中に遺物が集中していたため、遺物集中区として遺物を取り上げた。遺物が集中する範囲に任意の 4×4 m のグリッドを設定し、北西から 1 ~ 30 の番号を付した。遺物集中区は II 層を主体にしており、他の遺構は確認されなかった。この集中区から出土した遺物は土器が約 20kg、石器類が 2.9kg である。

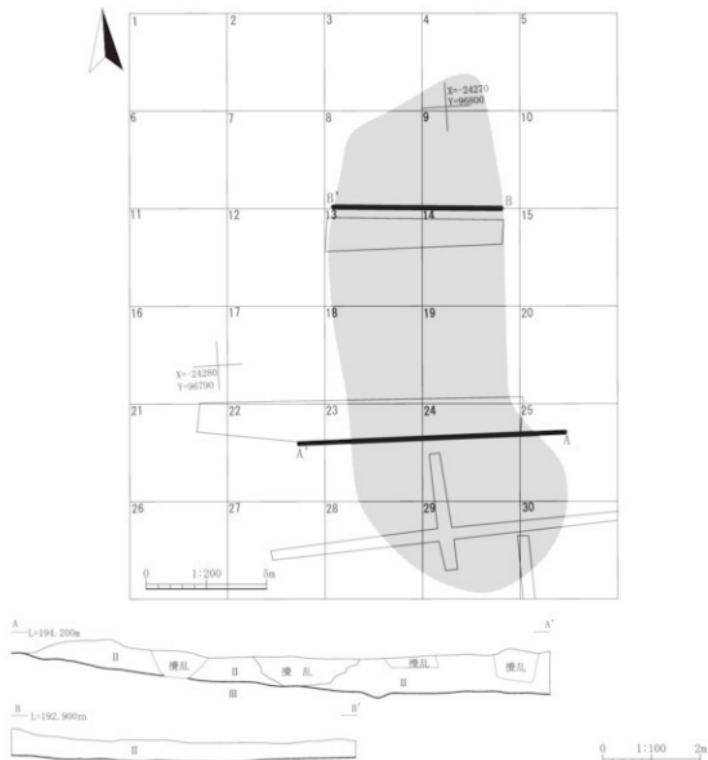
遺物集中区 2（第 6 図、第 3 表、写真図版 2）

調査区の中央より南西寄りに位置する。遺物集中区 1 と同様に微かに窪む谷状の地形の中に遺物が集中していたため遺物集中区 2 として遺物を取り上げた。遺物の集中する方向が南東 - 北西であったため、任意で 4×4 m のグリッドを設定して北西から 1 ~ 20 の番号を付した。しかし、10・15 の南東に SK 02 が確認できたことから更に 1 列追加し、北から南へ大文字アルファベットを付した。遺物集中区は II 層が地形に沿って堆積していた。集中区の中に SK 02 があり、II 層掘下げ中に確認できた。この集中区から出土した遺物は土器が約 30kg、石器類が約 7kg である。

出土した土器はほとんどが深鉢で、施文技法によって 6 種に大別出来る。①口縁部に単軸絡条体第 1 類や多段結節回転文が施文されるもの、②胴部に羽状縄文が施文されるもの、③胴部に木目状撚糸文が施文されるもの、④胴部に網目状撚糸文が施文されるもの、⑤地文のみ施文されるもの、⑥隆線及び沈線で区画を作るものである。①の口縁部に単軸絡条体や多段結節回転文を施文するものは口縁部の形状が波状口縁や平縁があり、口縁部文様帶の幅も差がある。口縁部文様帶の下に縄文が施文されるが、5・15 のように羽状縄文や 11 のように組紐が施文されるものもあり、前期前葉と考えられる。②の胴部に羽状縄文が施文されるものは同一原体を異方向に転がしている。先述の①も口縁部文様帶の下に羽状縄文が施文されるものもあり①のグループに属するものもあると考えられ、前期前葉に含まれると考えられる。遺物観察において羽状縄文の中に 0 段多条の原体で施文したもの（10・19）があり、大木 1 式に類すると考えられる。③の木目状撚糸文が施文される破片は少なく 3 点掲載した。いずれも赤褐色の胎土で非常にろくなっている。④の網目状撚糸文が施文される破片も少なく 2 点掲載した。いずれも横位に施文され、胎土も纖維の混入がやや少なめで緻密で、大木 2 式に類すると考えられる。⑤の地文のみ施文されるものはほとんどが縄文で、少数の撚糸文が含まれる。これらの年代は不明だが前期に属するものと考えられる。⑥の隆線や沈線で渦巻きや区画を作るものも破片数が少なく 7 点掲載した。いずれも胎土に纖維を含まず緻密である。文様の特徴などから縄文時代中期中頃の破片であると考えられるが、34 は付加条を施文しており、また区画する隆線の上に刺突が伴っていることから中期前半であると考えられる。縄文時代前期前葉のものが多く、中期の遺物を少量含んでいる。

剥片石器は石鏃が 6 点出土したうち 3 点図示した。形状が二等辺三角形に近いもの、正三角形にちかいものの二種類があり、石質は頁岩が多いが、S 5 のみメノウ製である。

石匙はつまみを有するものを石匙として 19 点選別した。そのうち代表的なもの、他と異なる特徴を持つ 5 点を図示した。出土した石匙は縦長が多く、横長は S 10 を含めて 3 点のみである。石質は頁岩が多い。S 8 は大型で赤色頁岩製である。また S 9 は幅が狭い。S 12 は頁岩製の異形石器である。形が人形に似ていること、端まで剥離が及んでいることから石偶の可能性も考えられる。



第5図 遺物集中区1

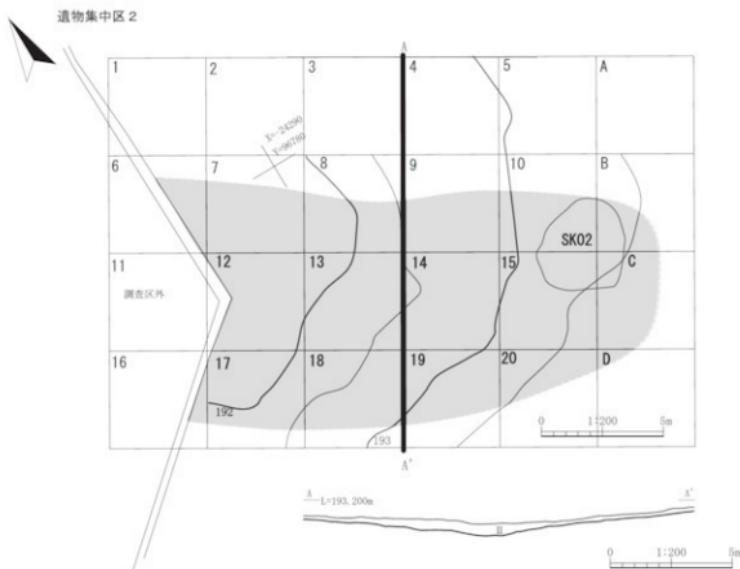
第2表 遺物集中区1出土遺物

土器

グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)
1	6			11	34.1	16		21			26
2	7			12	79.2	17		22	277.1	27	222.4
3	8	1338.4		13	710.4	18	878.8	23		28	1394.2
4	358.1	9	2413.4	14	1293.4	19		24	4592.2	29	3078.6
5		10	331.8	15	264.9	20		25		30	2714.5

石器

グリッド	重量(g)										
1	6			11		16		21			26
2	7			12		17		22	48.9	27	
3	8			13	617.0	18	14.3	23	8.2	28	1425.7
4	52.8	9	7.3	14	5.2	19	236.8	24	348.6	29	15.7
5		10		15		20	5.7	25		30	66.3



第6図 遺物集中区 2

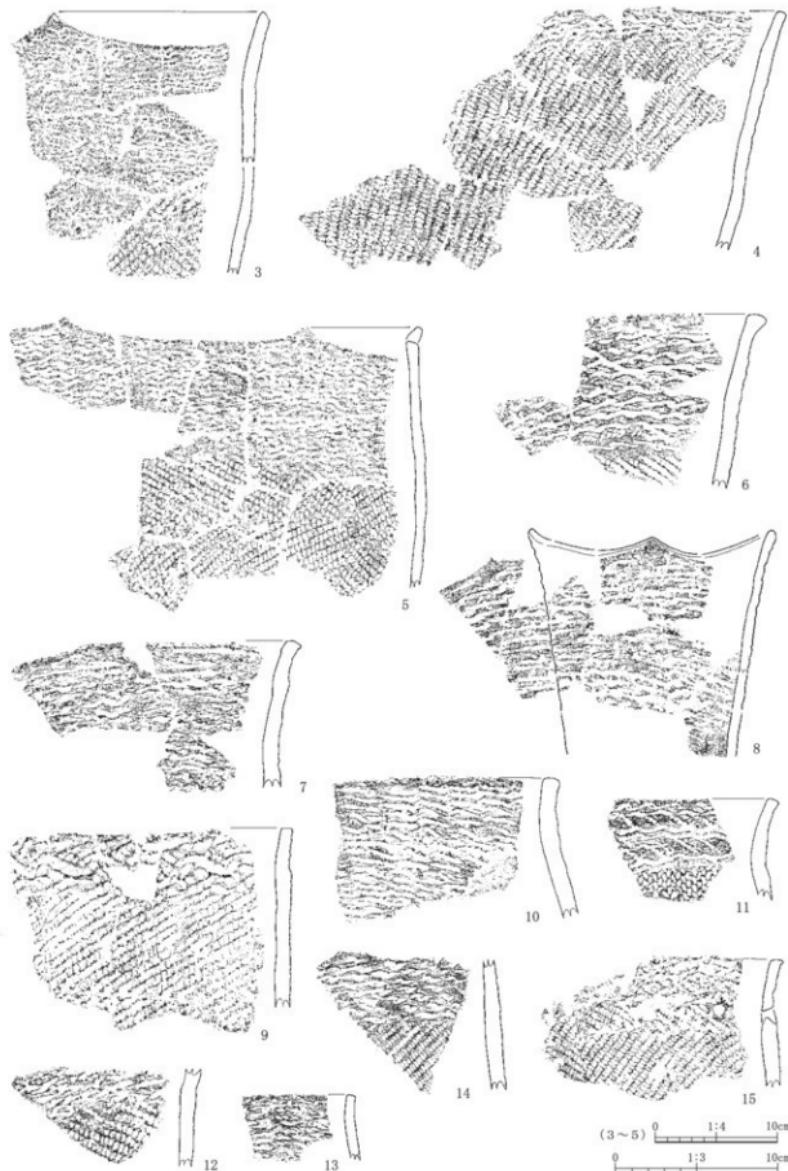
第3表 遺物集中区 2 出土遺物量表

土器

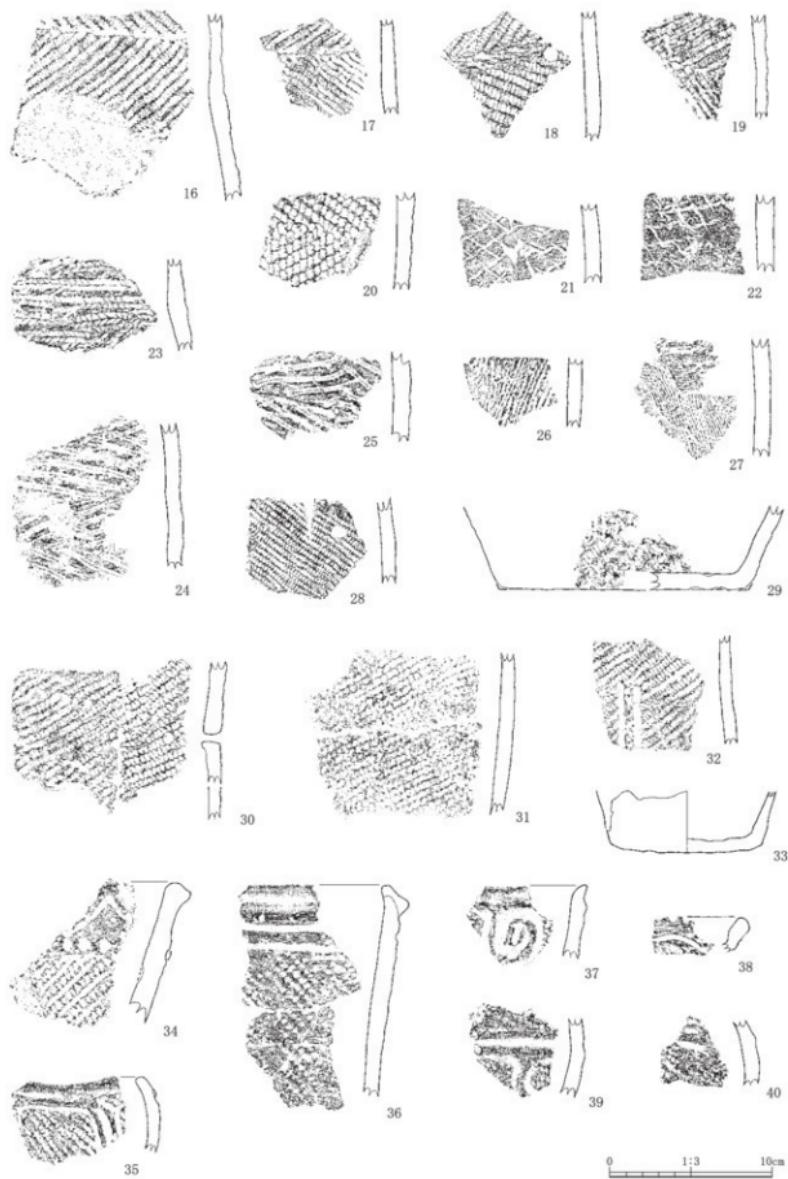
グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)
1	5	9	988.0	9	2087.3	13	1326.3	17	212.7	A	
2	6	9	988.0	10	7323.4	14	3364.5	18	205.6	B	2131.5
3	7	11	1661.5			15	2987.8	19	496.2	C	1081.4
4	769.5	8	3485.3	12	470.3	16	262	20	692.7	D	

石器

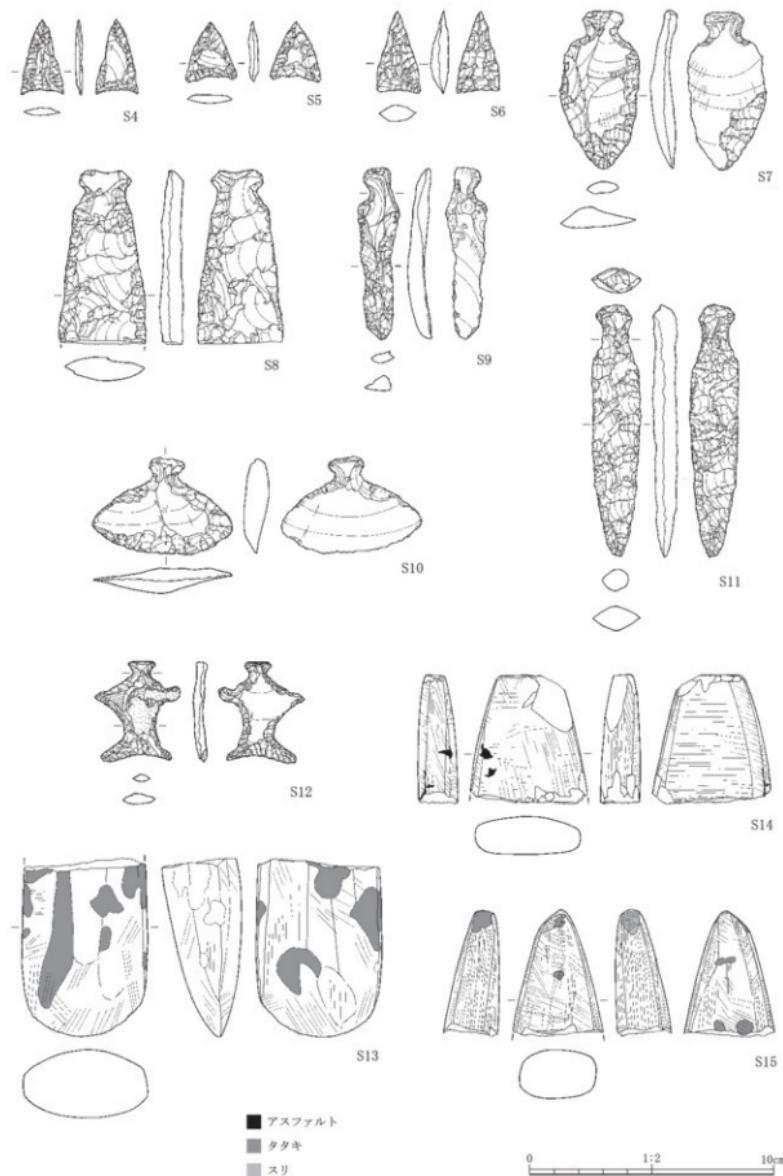
グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)
1	5	614.4	9	719.0	13	567.1	17			A	
2	6		10	959.8	14	259.4	18	1.0	B		760.7
3	7	8.8	11		15	56.6	19		C		786.1
4	732.3	8	622.5	12		16		20	503.5	D	422.8



第7図 遺物集中区出土遺物 1

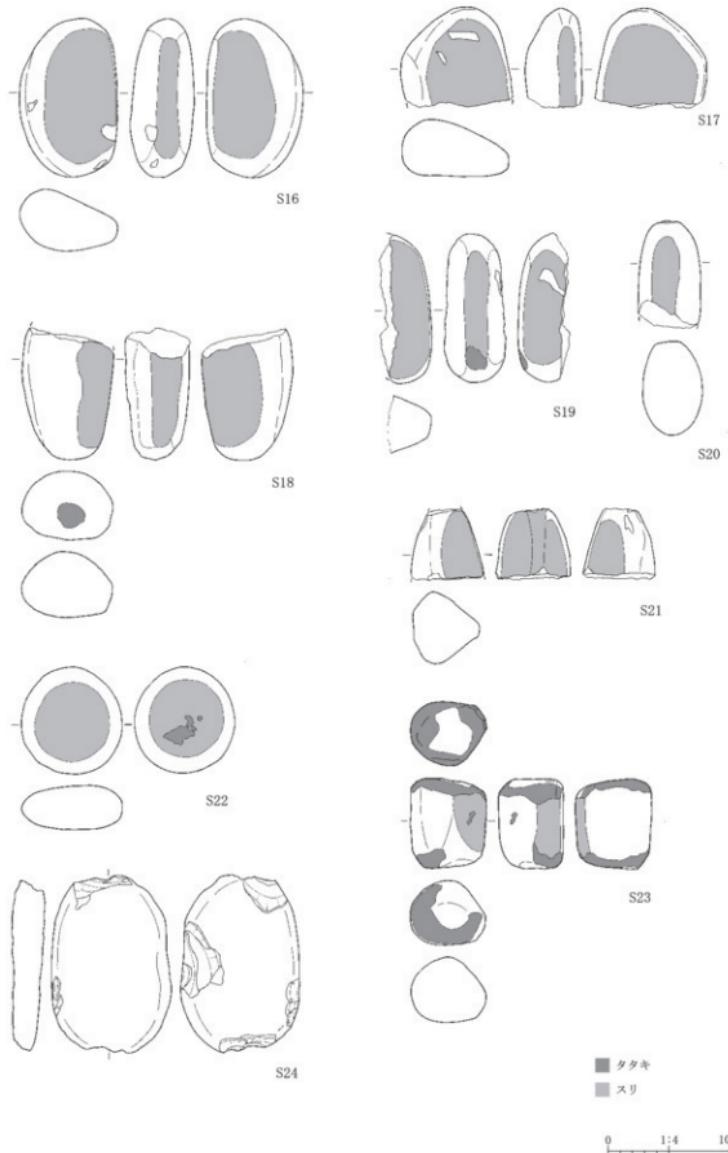


第8図 遺物集中区出土遺物2



第9図 遺物集中区出土遺物3

(4) 乙部遺跡



第10図 遺物集中区出土遺物 4

第4表 土器観察表

番号	地点	層位	器種	残存範囲	文様の特徴	量
1	SK01	I層	深鉢	胴部	単軸絡条体第1類 (R)	多量
2	SK02	II層	深鉢	口縁部	小突起あり 多段結節回転文 (L)	少量
3	遺物集中区2-13	II層	深鉢	口縁～胴部	波状口縁 多段結節回転文 (r) 胴部非結束羽状繩文 (LRL) 真方向	多量
4	遺物集中区2-15	II層	深鉢	口縁～胴部	平縁 多段結節回転文 (R) 膜斜繩文 (RL)	少量
5	遺物集中区2	II層	深鉢	口縁～胴部	波状口縁 口唇やや肥厚 多段結節回転文 (r) 非結束羽状繩文 (LRL) 真方向	少量
6	遺物集中区2-10	II層	深鉢	口縁～胴部	平縁 口唇やや肥厚 横位多段結節回転文 (L) 斜繩文 (RL)	少量
7	遺物集中区2-7	II層	深鉢	口縁	平縁 多段結節回転文 (r) すす付着	多量
8	遺物集中区2-30	II層	深鉢(小型)	口縁～胴部	波状口縁 単軸絡条体第1類 (R)	少量
9	遺物集中区1-24	II層	深鉢	口縁～胴部	平縁 多段結節回転文 (r) 斜繩文 (O段多条)	少量
10	遺物集中区1-14	II層	深鉢	口縁部	平縁 横位多段結節回転文 (r)	少量
11	遺物集中区2-13	II層	深鉢	口縁部	平縁 多段結節回転文 (L) 脊：組紐	少量
12	遺物集中区1-15	II層	深鉢	胴部	多段結節回転文 (L) 斜繩文 (RL)	多量
13	遺物集中区1-13	II層	深鉢	口縁部	平縁 口唇や丸み帯びる 多段結節回転文 (R)	なし
14	遺物集中区2-8	II層	深鉢	胴部	多段結節回転文 (R) 斜繩文 (RL)	少量
15	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	平縁 多段結節回転文 (L) 非結束羽状繩文で菱形 (RL) 真方向	少量
16	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	表面裏面共に剥落あり 非結束羽状繩文 (LRL) の真方向	多量
17	遺物集中区1-14	II層	深鉢	胴部	非結束羽状繩文 (O段多条) RL0 真方向	少量
18	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	非結束羽状繩文 (RL) 縦横方向に施す 補修孔あり	少量
19	遺物集中区2-14	II層	深鉢	胴部	非結束羽状回転文 (O段多条) RL0 真方向	少量
20	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	非結束羽状繩文 (RL) 真方向	少量
21	遺物集中区1	II層	深鉢	胴部	単軸絡条体第4類網目状燃系文	少量
22	遺物集中区1-24	II層	深鉢	胴部	単軸絡条体第4類網目状燃系文	なし
23	遺物集中区1-12	II層	深鉢	胴部	単軸絡条体第1A類木目状燃系文	なし
24	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	単軸絡条体第1A類木目状燃系文	少量
25	遺物集中区2-4	II層	深鉢	胴部	単軸絡条体第1A類木目状燃系文	少量
26	遺物集中区2-11	II層	深鉢	胴部	単軸絡条体第1類	少量
27	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	単軸絡条体第1類	少量
28	遺物集中区2-10	II層	深鉢	胴部	斜繩文 (RL)	なし
29	遺物集中区2	II層	深鉢	底部～胴部下	平底 斜繩文 (LR)	多量
30	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	斜繩文 (LR) 補修孔あり	少量
31	遺物集中区2-23	II層	深鉢	胴部	斜繩文 (LR)	少量
32	遺物集中区2-9	II層	深鉢	胴部	斜繩文 (LR) 沈線	多量
33	調査区南東	II層	深鉢	底部～胴部下	平底 施文なし	なし
34	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	平縁 口縁無文帯 陸縁に半円状の刺突を施して区画 区画内は付加条 (LRL)	なし
35	遺物集中区1	II層	深鉢	口縁部	波状口縁 口唇直下は無文帯 繩文 (RL) 施文後陸縁・沈線で区画	なし
36	遺物集中区1	II層	深鉢	口縁～胴部	丸縁 陸縁と2本の浅い沈線で区画 陸縁は断面カマボコ状 沈線は無文帯 脇：斜繩文 (RL)	なし
37	遺物集中区1-10	II層	深鉢	口縁部	先端外反 陸縁で上下に区画 上部無文帯 下部は陸沈縁で下垂する 滾巻	なし
38	遺物集中区2	II層	浅鉢	口縁部	波状口縁 突起を3つに区分して王冠状 口唇直下は剥落のため不明 沈線で区画 裏面に段をもつ	なし
39	遺物集中区1-10	II層	深鉢	胴部	陸沈縁で上下に区画、上部には斜繩文(RL) 下部には陸縁が下垂(渦巻?)	なし
40	遺物集中区2	II層	深鉢	胴部	陸縁で上下に区画 上部は無文 下部は斜繩文 (RL)	なし

(4) 乙部遺跡

第5表 石器観察表

番号	地点	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
S 1	SK01	I 層	石匙	5.6	3.3	1.0	14.3	頁岩	
S 2	SK02	I 層	石匙	(2.6)	(2.3)	0.35	3.2	頁岩	
S 3	SK02	I 層	打製石斧	9.6	6.0	2.2	189.1	細粒閃綠岩	
S 4	遺物集中区 2-B	II 層	石鏟	3.1	1.7	0.3	1.3	メノウ	
S 5	遺物集中区 1-14	II 層	石鏟	2.5	2.1	0.4	1.4	頁岩	
S 6	遺物集中区 1-29	II 層	石鏟	3.35	1.75	0.65	3.3	頁岩	
S 7	遺物集中区 2-B	II 層	石匙	6.5	3.25	1.1	15.6	頁岩	
S 8	遺物集中区 2-15	II 層	石匙	(7.1)	3.6	1.0	28.1	赤色頁岩	尖頭器?
S 9	遺物集中区 2-20	II 層	石匙	7.05	1.7	0.95	6.7	頁岩	
S 10	遺物集中区 1-29	II 層	石匙	4.1	3.7	1.0	15.3	頁岩	
S 11	遺物集中区 2-ペルト	II 層	石匙	10.4	2.0	1.0	21.7	頁岩	尖頭器?
S 12	遺物集中区 2 レンチ	II 層	異形石器	4.1	3.5	0.6	4.3	頁岩	
S 13	遺物集中区 2-9	II 層	磨製石斧	(7.3)	5.2	3.2	179.2	細粒閃綠岩	
S 14	遺物集中区 2-14	II 層	磨製石斧	(5.3)	(4.8)	(1.6)	70.8	凝灰岩	
S 15	遺物集中区 1-9	II 層	磨製石斧	(5.2)	(3.7)	(2.3)	54.0	凝灰岩	
S 16	遺物集中区 1	II 層	特殊磨石	13.1	8.0	5.1	764.9	砂岩	
S 17	遺物集中区 2-4	II 層	特殊磨石	8.2	8.35	4.6	471.5	安山岩	
S 18	遺物集中区 2-8	II 層	特殊磨石	10.8	7.6	5.4	604.5	花崗岩	
S 19	遺物集中区 2	II 層	特殊磨石	(10.3)	(5.1)	(4.3)	333.6	花崗岩	
S 20	遺物集中区 1-28	II 層	特殊磨石	(8.7)	5.1	4.9	586.2	花崗岩	
S 21	遺物集中区 1-13	II 層	特殊磨石	(5.8)	(6.0)	(6.2)	255.4	花崗岩	
S 22	調査区南西	II 層	磨石	8.8	8.4	3.5	378.4	凝灰岩	
S 23	遺物集中区 2-D	II 層	特殊磨石	7.5	6.3	5.3	419.6	砂岩	
S 24	遺物集中区 1-24	II 層	石錐	14.25	9.8	2.65	597.0	砂岩	

※()は残存値

磨製石斧は完形・欠損を含めて7点あり、うち3点を図示している。石質は凝灰岩・細粒閃綠岩である。磨製石斧の刃部は丸みを帯びるもの(S 13)と丸みを持たず直線的なもの(S 3)の二つに大別できる。S 14ではアスファルト付着が確認できた。細長く紐のように伸びている部分もあるため、石斧を柄に装着した際に紐で固定し、アスファルトを塗布したと考えられる。刃部が欠損しており、使用中に折れたと推定される。磨石の中には磨面が裏面にあるものと磨面が縁に集中するものが確認できた。後者は、特殊磨石である。S 23は上・下端に敲打痕が残っていることが確認できた。S 23は石錐で扁平な砂岩の両端を打ち欠いている。

5まとめ

乙部遺跡は尾根の先端に位置する。調査の結果、尾根の上では土坑2基、尾根の裾から遺物集中区が2箇所確認できた。遺物は上部からの流れ込みと考えられるが、住居跡などは確認できなかった。

このことから、調査区外に住居などの居住域があると考えられる。

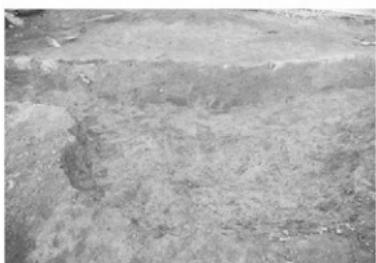
なお、乙部遺跡平成25年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

<参考文献>

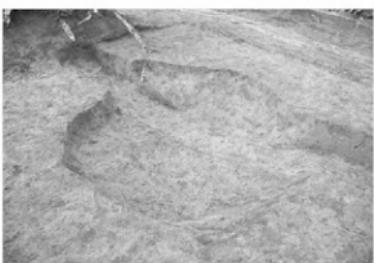
- (財) 岩手県埋蔵文化財センター 岩手県福祉部 1983 『小堀内I遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財調査報告書 第52集
- 宮古市教育委員会 1995 『崎山貝塚-範囲確認調査報告書-』 宮古市埋蔵文化財調査報告書44
- (附) 岩手県文化振興事業団 2011 『八木沢野來遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第573集



調査区近景（北から）



S K01断面（南から）



S K01完掘（南東から）



S K02断面（北から）



S K02完掘（西から）

(4) 乙部遺跡



遺物集中区 1 断面（北東から）



遺物集中区 1 断面（北東から）



遺物集中区 1 完掘（南から）



遺物集中区 2 断面（南西から）

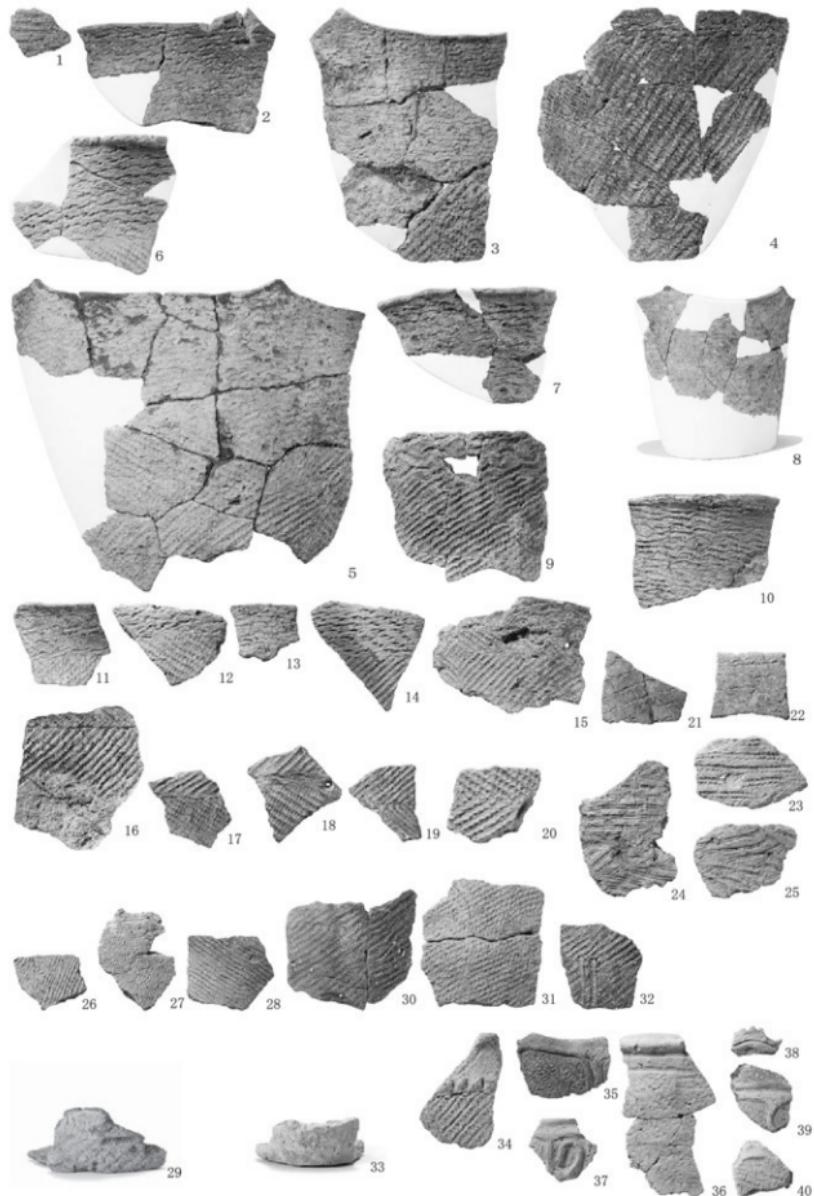


遺物集中区 2 遺物検出状況（北西から）



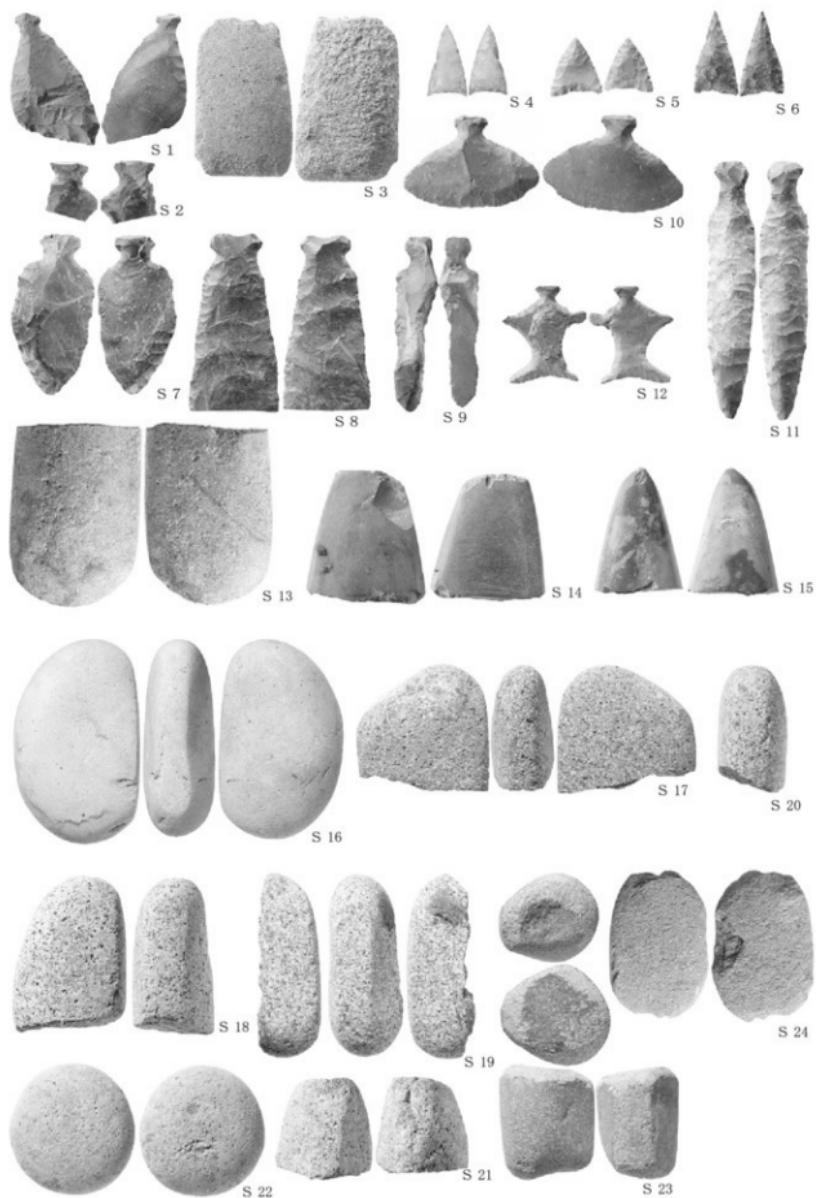
遺物集中区 2 完掘（南西から）

写真図版 2 遺物集中区 1・2



写真図版3 出土遺物1

(4) 乙部遺跡



写真図版4 出土遺物2

(5) 北野X III遺跡

所 在 地	久慈市侍浜町大字北野第10地割59-1ほか	遺跡コード・路号	J G 00-1122・KN X III-13
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	3,700m ²
事 業 名	久慈北道路	調査終了面積	3,700m ²
発掘調査期間	平成25年11月1日～11月28日	調査 担 当 者	米田 寛・小野寺純也・中川重紀

1 調査に至る経過

北野X III遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（久慈北道路）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路であるが、そのうち久慈北道路（久慈市夏井町から久慈市侍浜町間7.4km）については、平成20年度に事業化した道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年10月1日付け国東整陸二工第1013号により、三陸国道事務所から岩手県教育委員会生涯学習文化課課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年10月30日～11月1日にわたり試掘調査を行い、平成24年12月7日付け教生第1641号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年9月13日付けで財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

2 遺跡の位置と立地

北野X III遺跡は、JR八戸線侍浜駅から東へ約2.1kmにあり、日本で最も古い海成段丘とされる九戸段丘面上に位置する。

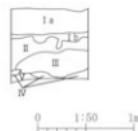


第1図 遺跡位置図

3 基本層序（第2図）

本遺跡の基本土層は以下のとおりである。表土の殆どが畑地造成によって約60cm掘削されており、I a・I b層は近現代の耕作土、遺構検出面であるII層上面は一部削平されている。また、南部浮石と考えられる黄褐色火山灰がII層中に堆積している。

I a層	10YR2/1黒色土	粘性弱	しまり粗（耕作土）
I b層	10YR2/3暗褐色土	粘性弱	しまり粗（耕作土）
II 層	10YR5/6黄褐色火山灰	粘性弱	しまりやや粗 To-Nb包含
III 層	10YR4/6褐色火山灰	粘性弱	しまり粗（To-H風成層？）
IV 層	10YR7/8黄橙色火山灰	粘性弱	しまり密（To-H層）
V 層	10YR5/8黄褐色火山灰	粘性強	しまりやや密 砂粒3%



第2図 基本土層図

4 調査概要

(1) 検出遺構（第5図・写真図版1）

焼土遺構1基、炭化物集中1箇所を南側調査区から検出した。北側調査区では遺構を検出していない。なお、遺構に伴う遺物は出土していない。

1号焼土遺構

（位置）X=29031、Y=80941付近で、1号炭化物集中の東側に位置する。

（検出状況・形状）III層面より検出した。形状は不整形である。一部トレンチにより削平されている。

（出土遺物）なし。

（時期）遺物や形状から判断することができないため不明である。

1号炭化物集中

（位置）X=29031、Y=80941付近で、1号焼土遺構の西側に位置する。

（検出状況・形状）III層面より検出した。形状は不整形である。

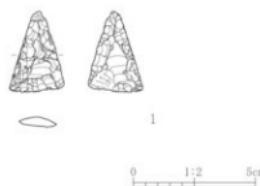
（出土遺物）なし。

（時期）遺物や形状から判断することができないため、不明である。

(2) 出土遺物

縄文土器1点、石鏃1点、剥片1点が出
土した。縄文土器は摩耗しており、細別時
期は不明である。1の石鏃は北側調査区か
ら出土している。

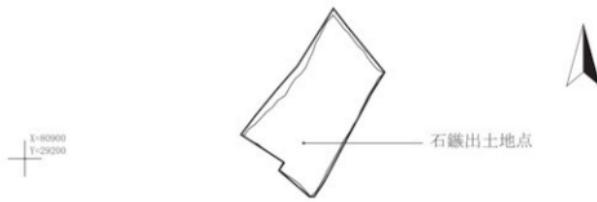
なお、北野X III遺跡平成25年度調査に
する報告はこれをもって全てとする。



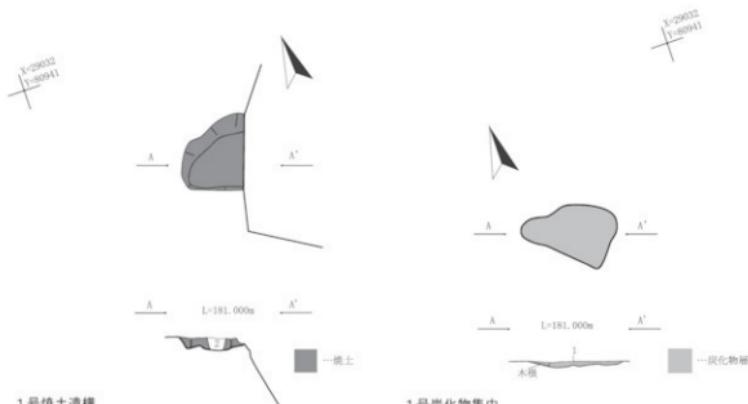
第3図 出土遺物

第1表 出土石器観察表

No.	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	石鏃	北側調査区検出面	3.1	2.6	0.4	2.2	表裏面に一次剥離あり



第4図 遺構配置図



第5図 1号焼土遺構、1号炭化物集中



南側調査区全景（北東から）



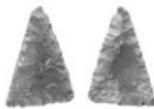
1号焼土遺構（南から）



1号炭化物集中地点（南から）



北側調査区全景（南西から）



写真図版1 調査全景、検出遺構、出土遺物

(6) 小滝沢遺跡

所 在 地	釜石市片岸町第8地割113-1	遺跡コード・路号	MG42-0398・K TS-13
委 託 者	釜石市復興推進本部	調査対象面積	1,060m ²
事 業 名	片岸地区土地区画整理事業	調査終了面積	1,060m ²
発掘調査期間	平成25年11月1日～11月28日	調査担当者	福島正和・芋坪祐樹

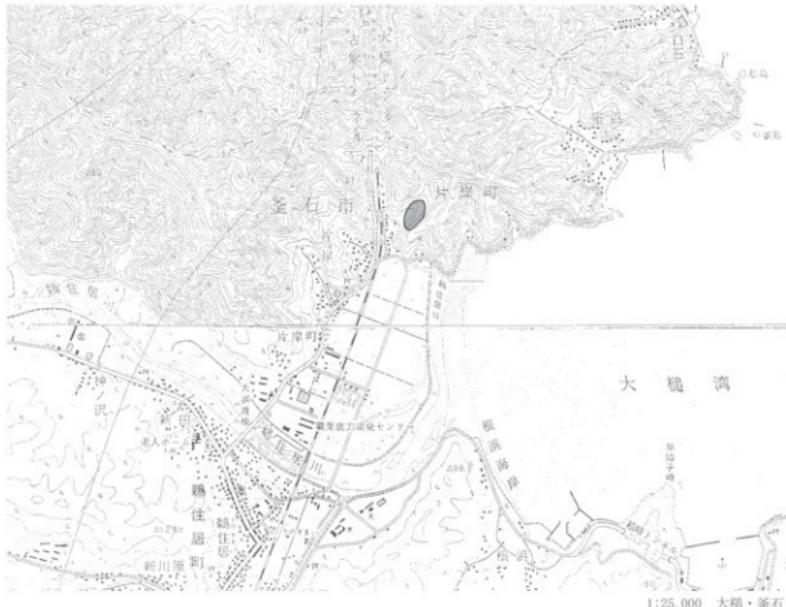
1 調査に至る経過

小滝沢遺跡は、「片岸地区被災市街地復興土地区画整理事業」の宅地造成工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

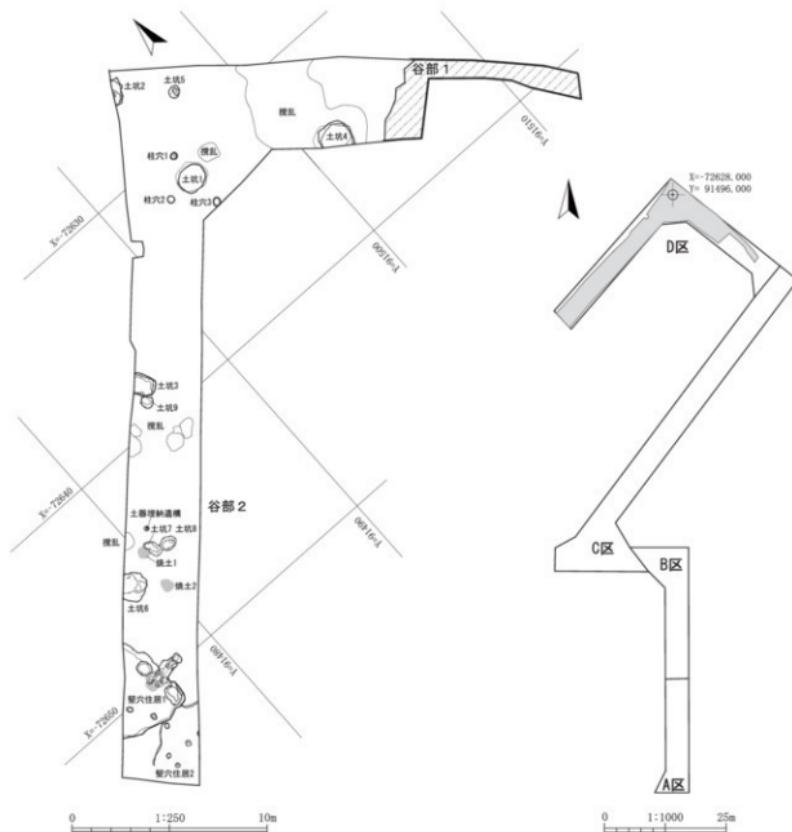
片岸地区被災市街地復興土地区画整理事業は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により被災した地域を、新たな道路・街区形成も図り復興する事業である。事業対象地域である「片岸地区」においては、釜石市と地域の被災住民間で協議を重ね、復興まちづくりに向けた合意形成がなり、平成25年3月には岩手県による事業計画の認可を受け本格的な計画策定を進めているところである。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。岩手県においては市町村が主体となる開発に関連する埋蔵文化財調査は市町村教育委員会が担当することとなっていきるが、復興関連調査の増大と調査員不足の状況から、県教育委員会が協議・調整を行い、本調査に関しては、公益財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、釜石市復興推進本部から平成24年5月17日



第1図 遺跡の位置



基本層序

- I 黒褐色シルト 層厚約10~240cm
(表土・耕作土・現代盛土)
- II 黄褐色~暗褐色シルト 層厚0~20cm
(古代以降の自然堆積層)
- III 暗褐色シルト 層厚0~50cm
(縄文時代中期の遺物包含層)
- IV 暗褐色粘質シルト 層厚0~30cm
(縄文時代前期の遺物包含層)
- V 暗褐色シルト~疊 層厚不明
(無遺物自然堆積層・地山)

第2図 調査区と基本層序

付釜復都第8号「被災市街地復興土地区画整理事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により釜石市教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた市教育委員会は平成24年7月9日～10日に試掘調査を実施し、工事に着手するには小滝沢遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成24年7月18日付釜教生第149号「被災市街地復興土地区画整理事業に係る埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。

その結果を踏まえて当市復興推進本部は岩手県教育委員会及び市教育委員会と協議し、県教育委員会の調整を経て平成25年11月1日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

（釜石市復興推進本部）

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、釜石市北東部の片岸町に位置し、大槌湾に面する丘陵裾部および谷底平野に立地している。今回の調査地点は北から南へ注ぐ小滝沢と東から西へ注ぐ館鼻沢とが合流する低地部分である。調査区の標高は、最高位で7m、低地部分は限りなく0mに近い値である。ちなみに、調査区のほぼ全域が平成23年3月11日に発生した東日本大震災による津波の浸水域である。

国道45号および併走するJR山田線を隔てて西側には片岸貝塚が位置しており、小滝沢遺跡と同一事業に伴う発掘調査が岩手県教育委員会の支援で行われた。

3 基本層序

調査区内の基本層序は、大別すると最上位から表土および現代の盛土、古代以降の自然堆積層（遺物包含層）、最下層のいわゆる地山が存在する。基本層序の詳細については第2図を参照されたい。

なお、調査区内には先述した通り、館鼻沢起源の開析谷（以下、谷部1と呼称）と小滝沢起源の開析谷（以下、谷部2と呼称）の2筋の筋状低地が認められる。これらの中では黒色土が良好に堆積、発達しており、海側の地点（A区・B区）では地形的につながり落ち込んでいる。

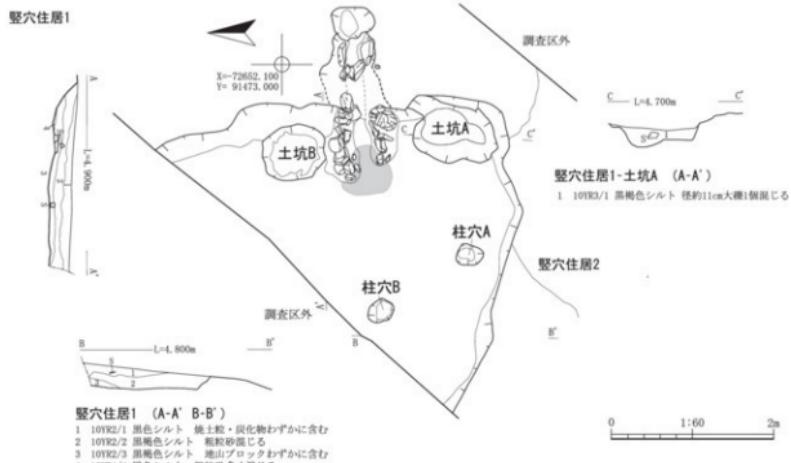
4 調査の概要

（1）検出遺構

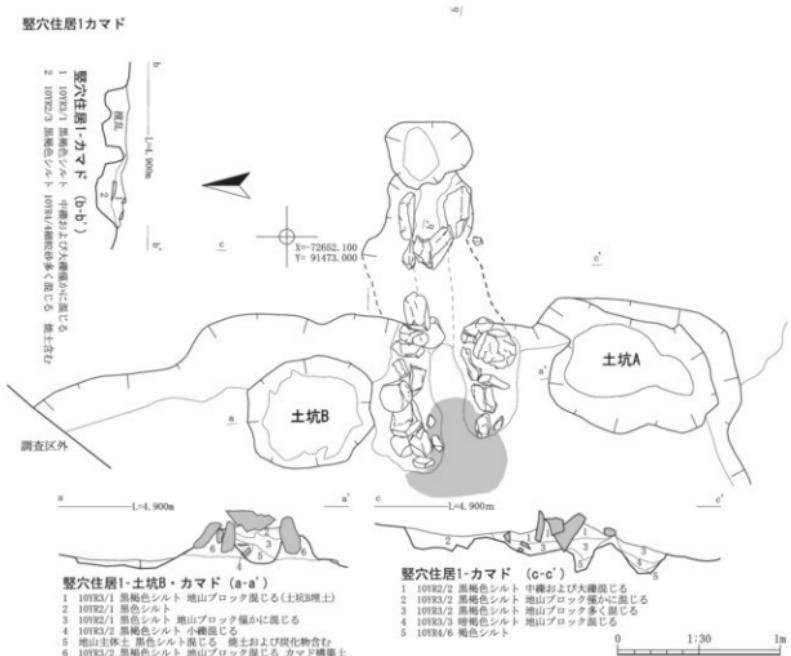
今回の調査では、縄文時代と古代の遺構を検出した。縄文時代の遺構として、竪穴住居跡1棟、貯蔵穴2基、土器埋納遺構1基、古代の遺構として、平安時代の竪穴住居跡1棟を調査した。その他土坑、焼土遺構、柱穴状土坑が存在するが時期の特定は困難である。

竪穴住居1（第3・4図、写真図版2・3）

西側調査区南西端の谷部に位置する。谷部2にあり、III層黒色土上面で検出した。検出時は埋土最上層とIII層との区分が曖昧であったが、この段階で石組を有するカマド煙道の側石が認められたため、結果的に遺構埋土とIII層の別が可能となった。平面形態は方形を呈すると考えられるが、5m幅の調査区内では完結しておらず、北西側調査区外へと続いている。規模は、調査区内で検出できた北辺4.80m、南辺3.64m、東辺3.97mをそれぞれ測る。深さは最大で27.3cm、床面の標高は4.31mである。埋土は、上層で黒色シルトを主体としており、砂粒は細かく少ないが、下層は遺構壁等の崩落の影響か黄色傾向にある褐色シルトが堆積する。埋土中より出土する土器は多くないが、土師器片等が認められる。側壁は、斜面上方側で概ね急角度で立ち上がるが、斜面下方側は比較的緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦であり、砂礫混じりの地山を露出させている。貼床は認められないと、掘り方底面をそのまま床面として利用していたか、あるいは貼床を施したとしても必要最低限で留めている可能性が高い。床面の継まりは地山の継まりをほぼ踏襲している。床面施設として、周溝は認められないが、柱穴2個およびカマド両脇に付随する土坑2基がそれぞれ認められる。東側に位置する柱穴Aは、



第3図 堅穴住居1



第4図 堅穴住居1 カマド

径0.30mの平面円形で深さ12.0cmを測る。埋土中には土師器片や焼土ブロック、炭化物微粒子が混在する。一方、西側に位置する柱穴Bは、径0.3mの平面円形で深さ15cmを測る。カマド東脇に存在する土坑Aは、長軸0.99m、短軸0.65mの平面楕円形を呈し、黒褐色シルトの埋土であった。焼土、炭化物等の小粒子はみられるが、その混在割合は数%と顕著ではない。底面は丸みを有し、凹凸も認められる。この土坑はカマド袖裾部から北東コーナーまでの空間を占めている。カマド西脇に存在する土坑Bは、長軸0.75m、短軸0.66mの平面楕円形を呈する。土坑Aと異なるのは、深さが3cmと浅く、埋土には地山ブロックが顕著に認められ、住居北西コーナーまで及んでいない点である。両土坑には、機能差があった可能性が考えられる。カマドは、斜面上方側に取り付き、袖部に石組の構築材が残存している。袖部の石組は構築土で被覆されていたようで、部分的にカマド全体を覆う埋土と区分できる人為的な構築土が残存する。燃焼部は袖部に挟まれた面に長軸0.56m、短軸0.44mの楕円～方形の範囲、約4cmの厚みで赤化している。煙道も石組が施され、部分的に側面の石が残存する。原位置を留める蓋石は認められなかったが、これに用いられたと考えられる石材も煙道の真上で出土している。煙出部に石は用いられておらず、本来ピット状の掘り込みが煙道に接続する形態であったと考えられる。また、煙道底面は、検出面からみて比較的浅いため、竪穴住居床面やカマド燃焼部よりも高い位置にある。以上のことから煙道は割り抜き式のものではなく、掘り込みに石組が伴う形態であったと考えられる。遺物は、埋土中および床面等から土師器が出土した。特に、カマド周辺では土師器甕類が主体である。このうち7点の土師器を掲載した。時期は土器の特徴から考えて9世紀前葉～中葉である。

竪穴住居2（第5図、写真図版3）

西侧調査区南西端の谷部に位置する。竪穴住居1と重複しており、一部はこれに切られている。遺構の大半が調査区外へ続いているため平面形態および規模は不明である。埋土は暗褐～黒色シルトを主体とし、部分的に地山起源の砂粒を少量含む。床面は地山が削り出された平坦面となっており、柱穴を5個検出した。床面には部分的に焼土および炭化物が認められるが、形成は脆弱で明確な被熱面ではない。埋土はいずれも淡い色調の褐色から黒褐色で柱痕跡はみられない。遺物は埋土より縄文土器（中期中葉～後葉）が出土した。時期は遺構の特徴および遺物から縄文時代である。

土坑1～9（第6図、写真図版4・5）

土坑1は平面円形、断面ラスコ形を呈する貯藏穴である。埋土は上半には黒色～黒褐色シルトが堆積しているが、下半は地山起源の褐色シルトや砂礫層と上半類似の堆積層が互層となる。埋土上位から中位にかけて縄文土器がまとめて出土した。土器は縄文時代前期末～中期初頭のである。

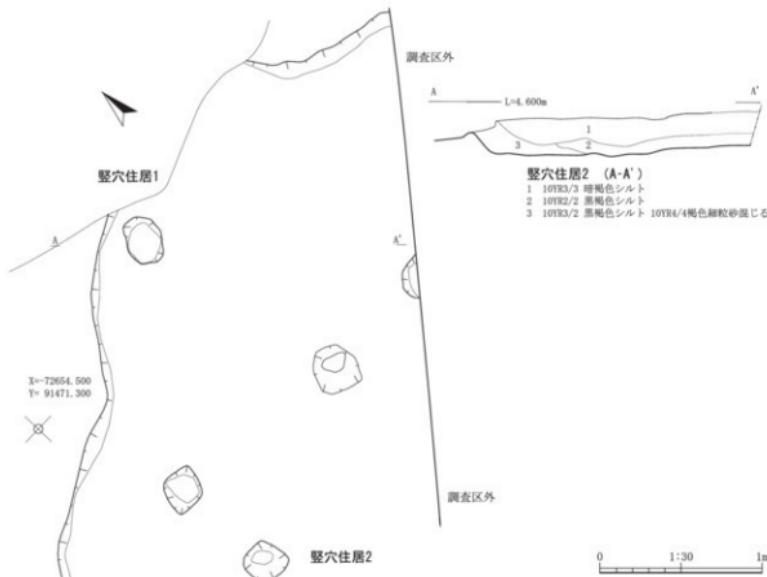
土坑2は調査区北西隅で検出した円～楕円形の土坑である。埋土に人頭大の礫がいくつか混入する。埋土より数点の縄文土器が出土した。遺構埋土や出土遺物から縄文時代の土坑である。

土坑3は調査区西端に位置し、調査区外へと続いている。そのため正確な全体形状および規模は不明であるが、調査区内での状況から平面隅丸長方形である可能性が高い。出土遺物はない。

土坑4は断面ラスコ形を呈する貯藏穴である。埋土は上半には黒色～黒褐色シルトが堆積しているが、下半は地山起源の褐色シルトや砂礫層と上半類似の堆積層が互層となる。埋土中位および下位で縄文土器片が少量出土した。縄文土器は前期末～中期初頭である。なお、南側は調査区外へと続いているため全体形状および規模は不明である。

土坑5は調査区北西、IV層上面で検出した小規模な土坑である。埋土には小礫が多く含まれる。出土遺物はなく、時期不明であるが、その他の土坑埋土とは異質である。

土坑6は検出面で焼土が認められた。



第5図 堅穴住居2

土坑7は土坑8と重複する平面円形の小規模土坑である。埋土は黒褐色シルトである。埋土から土師器甕片が出土し、堅穴住居1埋土出土のものと遺構間接合する。よって、堅穴住居1と同時期の遺構である。

土坑8は土坑7と重複する平面円形の小規模土坑である。埋土は黒褐色シルトに小礫が混じる。

土坑9は調査区西端に位置する小規模土坑である。埋土の特徴から縄文時代の遺構である。

焼土1・2 (第2図、写真図版5)

それぞれ近在し、土器埋納遺構とも近い位置関係にある。いずれもIV層上面で被熱面を検出した。被熱深度は3~5cmの厚みである。遺物は出土しなかったが、検出面を考慮した場合、縄文時代の遺構である可能性が高いと考えられる。

土器埋納遺構 (第6図、写真図版5)

III層上面では土器は認められなかったが、IV層上面で全周する土器器壁を検出した。掘り方は、埋納土器直径とほぼ同じであり、埋納土器に即した必要最低限の掘り込みがなされていると考えられる。埋納土器内部は黒色土により充填されており、それ以外の内容物は検出されなかった。ただし、黒色土には締まりが無いため有機質の内容物が入れられていた可能性は否めない。埋納土器16は縄文土器深鉢下半部であり、残存部上端は摩滅しているため、口縁部まで残存する状態で埋納されていないか、残存した状態であっても比較的早い段階で上部が失われたものとみられる。土器外面は地文のみであるが、そのわずかな特徴から縄文時代中期の深鉢である可能性が考えられる。

柱穴 1～3（第2図）

いずれも調査区北西、IV層上面で検出した。土坑1の周囲を囲むようにそれぞれ位置しており、土坑1に伴う可能性も考えられる。埋土は褐色シルトで締まっている。いずれも平面円～楕円形であり、規模は柱穴1が長軸0.30m、短軸0.29m・深さ44.3cm、柱穴2が長軸0.35m、短軸0.27m、深さ35.1cm、柱穴3が長軸0.45m、短軸0.23m・深さ36.1cmである。これらから遺物は出土しなかつたが、埋土の特徴は縄文時代の遺構であることを示唆している。

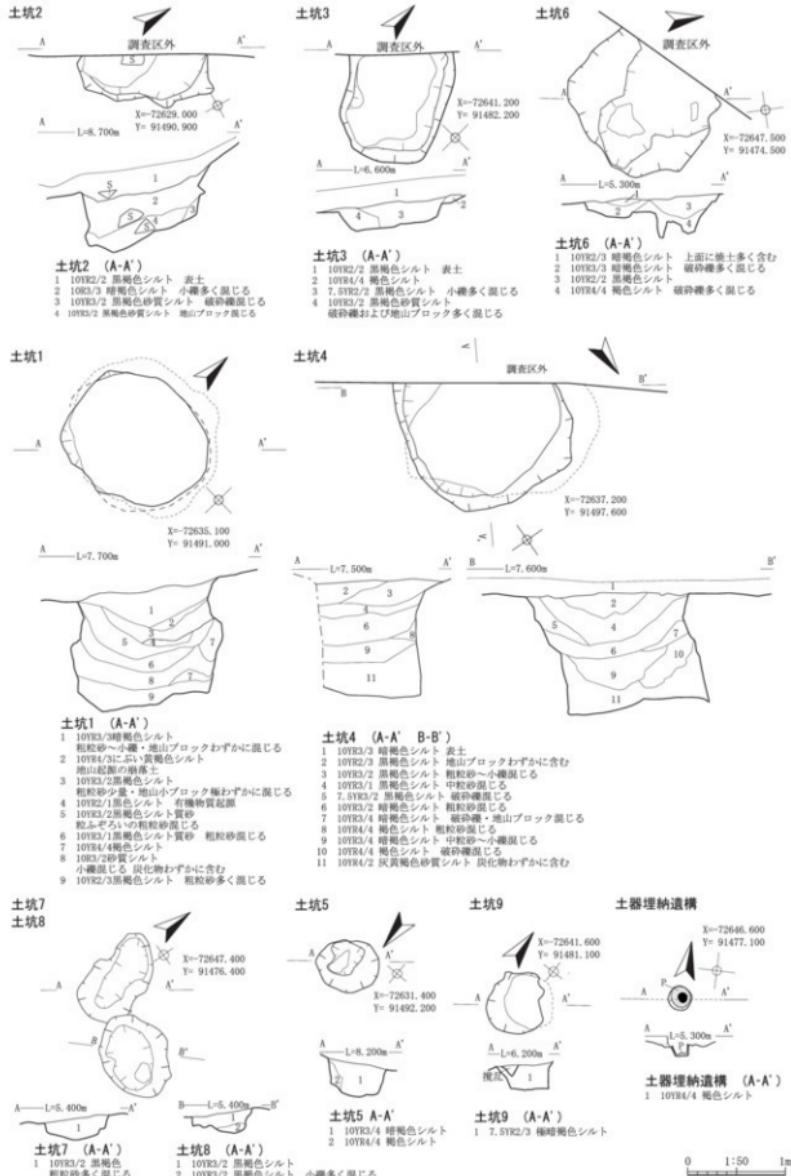
（2）出土遺物

遺物は、土器大コンテナ1.5箱、石器2点である。土器は、縄文土器（縄文時代前期前葉～後期）、土師器（平安時代）である。このうち土器33点、石器2点を選抜し、掲載した。

土器（第7・8図、写真図版6～8）

1～7は竪穴住居1から出土した土師器である。1のみが壊であり、その他はすべて甕である。1はロクロによる最終調整が行われ内面のみ黒色処理されている。体部下半に回転ヘラケズリがわずかに認められる。2・3は比較的小形の甕である。2は体部上端に焼成後の穿孔がなされており、孔近くに破面がみられることから補修孔の可能性が考えられる。3はロクロによる調整痕が認められ、底面には回転糸切り痕を残す。半還元状態で焼き締まっており、色調も灰色掛かっている。4～6は小～中形の甕であり、いずれもロクロによる調整はなされていない。6の口縁部には片口状に歪んだ箇所がみられるが、全周するヨコナデがその直前で引き抜かれているため意図的なものかもしれない。7は中形の甕である。体部外面には縦方向のヘラケズリが施されているが、体部上半にはロクロによる横方向の調整が認められる。口縁端部は、先端部が擴まみ出されたように突出する。以上、竪穴住居1から出土した1～7の土師器を概観すると、壊はロクロによる調整がなされ、なおかつ外面体部下半には回転ヘラケズリ調整がある。この特徴を勘案すると、この土器は平安時代のものである。さらに、県内の出土事例から回転ヘラケズリ調整が10世紀にはほぼみられなくなり、9世紀前半頃により多い傾向であることから、この土師器壊が9世紀前半代で収まるものと推測される。また、土師器甕類も口頭部に括れがあり、口縁部も外へ開く形態であるため、やはり9世紀代と考えられる。

8～32は縄文土器である。8～10の3片は竪穴住居2より出土した。いずれも中期の深鉢である。8は横方向の隆帯と波状沈線が施され、体部には緩やかな括れがみられる。9も口縁部と体部に横方向の隆帯が施されている。10は細紐状粘土を貼り付けた簡素な隆線によって加飾されている。これら3点の特徴は大木8a式段階と考えられる。11～14は土坑1より出土した。11は波状口縁であり、口縁部文様帶には細い沈線で文様が描かれている。器形および文様から大木6式段階のものであると考えられる。12は口頭部が屈曲し、水平口縁に2個1対の突出部を有する深鉢である。口縁部文様帶には横方向7条の沈線が認められる。これらの特徴から大木7b式段階のものであると考えられる。15は土坑4出土深鉢片であり、波状口縁の口縁部である。16は土器埋納遺構において埋められていた深鉢である。地文のみで詳細な時期を特定し得ないが、器形等の特徴から縄文時代中期の土器であると推測される。17～25・28～31も中期の土器であると考えられ、大木7～9式の特徴を有する。ただし、30は底部のみの破片であるため異時期の土器である可能性もある。27は平安時代の土師器甕底部片であり、回転糸切りの痕跡が認められる。26は縄文時代前期初頭の深鉢片である。同一個体の破片が複数みられたが、接合しなかった。胎土には纖維が顕著に含まれる。32・33は縄文時代後期の注口土器の注口部である。器表面には丁寧なミガキが施されており、黒く焼成されている。注口基部下位には突出部が認められる。33は沈線によって施文された縄文時代後期にみられる小形の壺か注口土器の体部片であると考えられる。



第6図 土坑1~9、土器埋納遺構

石器（第8図、写真図版8）

34・35はいずれも頁岩製の剥片石器である。35は遺物包含層より出土した縦形の石匙である。34は刃部調整された不定形の搔器である。時期はいずれも縄文時代と考えられる。

5 まとめ

今回調査した小滝沢遺跡では、縄文時代中期と推定される堅穴住居跡1棟と平安時代の堅穴住居跡1棟を検出した。両者とも遺跡の中でも比較的低い埋没谷に存在する。特に、平安時代の堅穴住居は、貞觀地震で起こったとされる津波被害の有無が注目される。しかし、発掘調査ではその痕跡が認められないことから、少なくとも貞觀年間にはすでに埋設していた堅穴住居であった可能性が高い。反対に貞觀年間以後に堅穴住居が成立している可能性もあるが、その場合、津波堆積層あるいはこれに起因する土層が確認されなければならないと考える。しかし、その痕跡は確認できないため、やはり貞觀年間以前に成立・機能・廃絶・埋没まで進んでいたと考えるのが妥当であろう。現段階で堅穴住居1は、岩手県内で最低地に立地する堅穴住居であると考えられる。今後、地域における集落占地に注視する必要があり、特に海に面した沿岸地域ではこのような低地帯に立地する古代集落発見の可能性を考慮しなければならない。

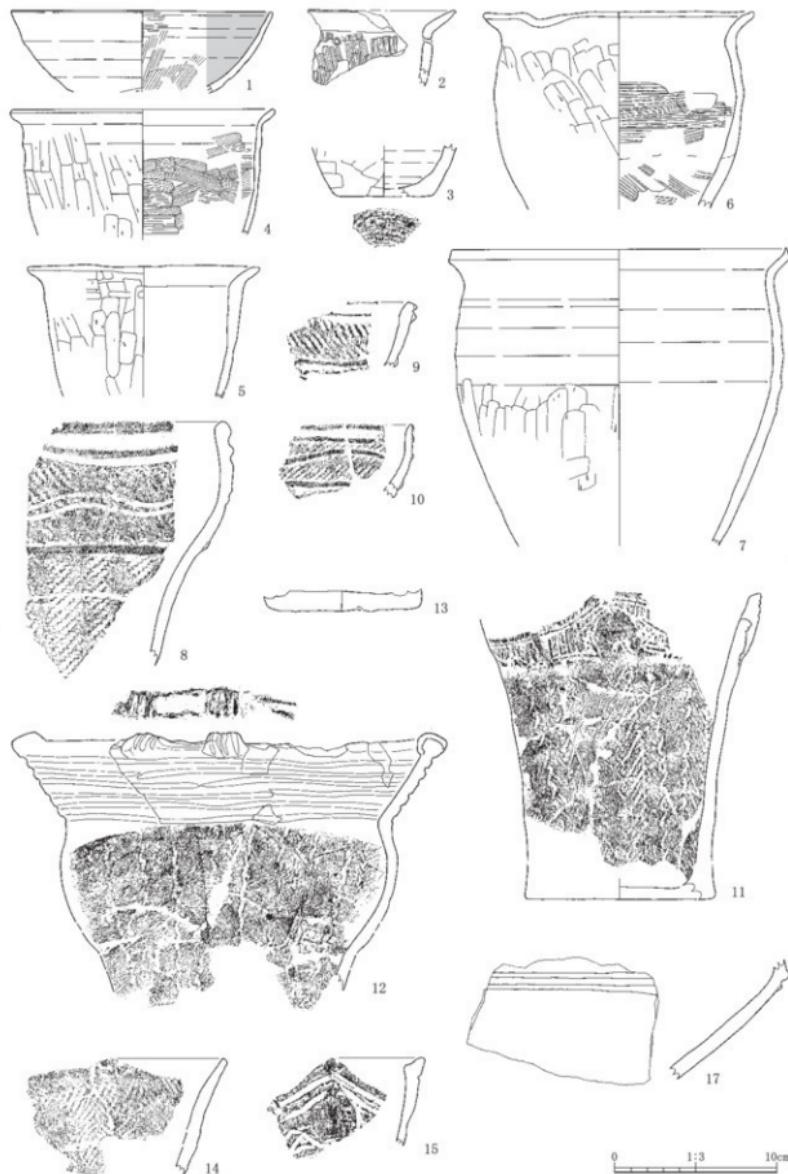
堅穴住居以外の特筆すべき遺構は、プラスコ形の貯蔵穴を2基と土器埋納遺構1基が挙げられる。2基の貯蔵穴は縄文時代中期初頭には、ある程度埋没が進行していたと推測される。したがって、遺構が貯蔵穴として機能していたのは縄文時代前～中期頃であると見込まれ、この時期に居住城が広がりを見せていたとみるべきであろう。また、土器埋納遺構も性格は不明であるが、縄文時代中期に属するとみられ、特に堅穴住居2とほぼ同時期である可能性が考えられる。

今回の調査では、縄文時代前期初頭から人々の活動があり、縄文時代中期に居住域として利用された場所と考えられる。その後、縄文時代後期においてもある程度の活動があり、時間を空け平安時代に居住域として再び利用されたようである。

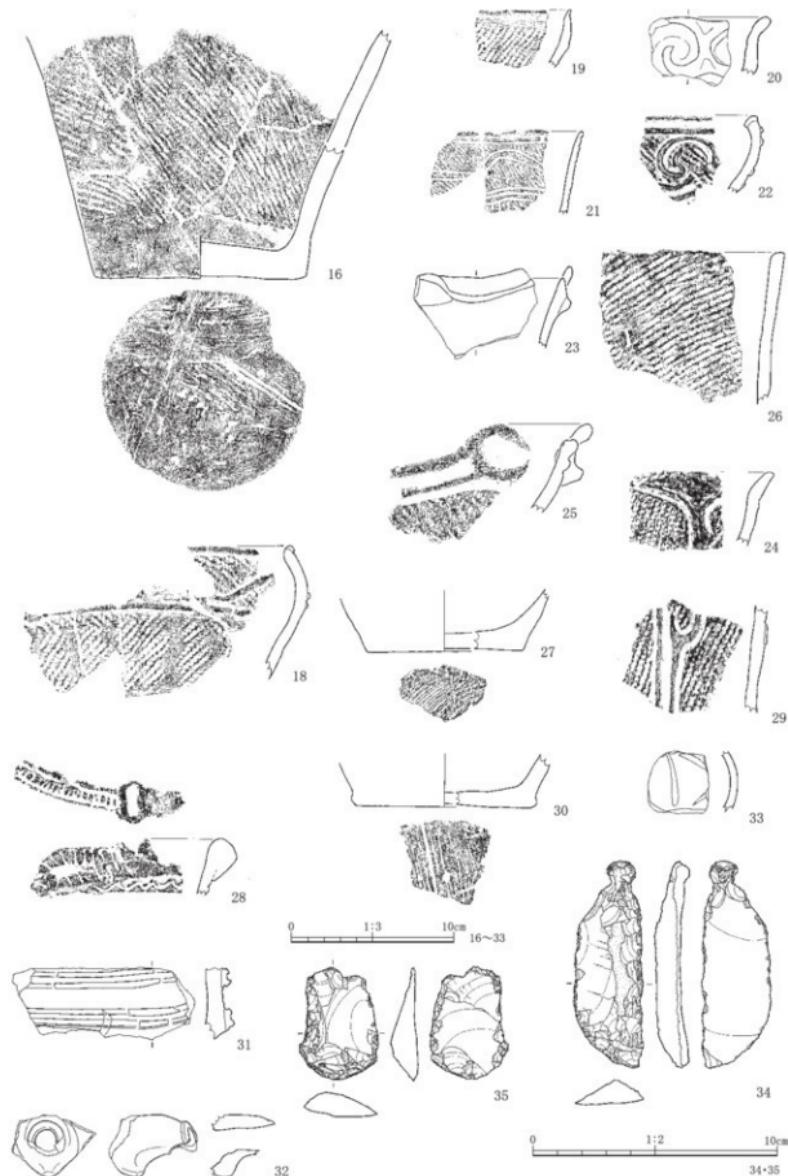
なお、小滝沢遺跡平成25年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

＜参考文献＞

- 手塚新太ほか 2002 『釜石市遺跡群詳細分布調査概報Ⅰ』釜石市埋蔵文化財調査報告書第21集 釜石市教育委員会
 森一欽ほか 2013 『釜石市遺跡詳細分布報告書3—釜石の古代・中世遺跡—』釜石市埋蔵文化財調査報告書第2集
 釜石市教育委員会



第7図 出土遺物1



第8図 出土遺物2

表1 掘載遺物一覧

掘載 No.	種別	器種	出土状況		寸法(cm)			備考・特記事項
			位置・遺構・層位	口径	器高	底径		
1	土師器	壺	堅穴住居1柱穴1埋土	(16.0)	[5.0]	-	体部下半回船ヘラケズリ、内面黒色処理	
2	土師器	甕	堅穴住居1北半埋土下層	-	[4.6]	-	焼成後の穿孔あり	
3	土師器	甕	堅穴住居1北半埋土下層	-	[3.1]	(5.8)	底部回転系切り	
4	土師器	甕	堅穴住居1北半埋土下層、同土坑1埋土	(16.2)	[8.8]	-	体部外面ヘラケズリ	
5	土師器	甕	堅穴住居1北半埋土下層	(14.3)	[8.1]	-	体部外面ヘラケズリ	
6	土師器	甕	堅穴住居1北半床面直上、同北半埋土上～中層、同カマド覆土	(16.7)	[12.1]	-	片口状口縁、体部外面ヘラケズリ	
7	土師器	甕	堅穴住居1カマド燃焼部直上、同北半埋土下層	(20.6)	[18.4]	-	体部外面ヘラケズリ	
8	縄文土器	深鉢	堅穴住居2埋土	-	[15.0]	-	隆帯・沈線・縄文(RL 横、 LR 横)	
9	縄文土器	深鉢	堅穴住居2埋土上層	-	[3.8]	-	隆帯・沈線・縄文(RL 横)	
10	縄文土器	深鉢	堅穴住居2埋土	-	[4.4]	-	貼り付け隆線・縄文(LR 横)	
11	縄文土器	深鉢	土坑1埋土中位	(18.9)	18.9	(11.7)	口縁縄文様帯に沈線	
12	縄文土器	深鉢	土坑1埋土上位	(26.6)	[15.9]	-	多条の平行沈線	
13	縄文土器	深鉢	土坑1埋土中位	-	[1.3]	8.9		
14	縄文土器	深鉢	土坑1埋土上位	-	[7.1]	-	波状口縁、縄文(LR 横)	
15	縄文土器	深鉢	土坑4埋土上位	-	[5.4]	-	波状口縁、沈線	
16	縄文土器	深鉢	土器埋納構造	(22.3)	[14.7]	13.0	地文のみ(RL 横)	
17	縄文土器	深鉢	谷部1・遺物包含層	-	[7.4]	-	隆帯・沈線	
18	縄文土器	深鉢	谷部1・遺物包含層	-	[8.1]	-	貼り付け隆線・縄文(RL + LR 横)	
19	縄文土器	深鉢	谷部1・遺物包含層	-	[3.5]	-	地文のみ(LR 横)	
20	縄文土器	深鉢	谷部1・遺物包含層上面	-	[4.2]	-	隆帯	
21	縄文土器	深鉢	谷部1・遺物包含層	-	[5.1]	-	2条1対の沈線・縄文(RL 横)	
22	縄文土器	深鉢	谷部1・遺物包含層	-	[4.7]	-	貼り付け隆線・縄文(RL 横)	
23	縄文土器	深鉢	谷部1・遺物包含層	-	[5.5]	-	隆帯	
24	縄文土器	深鉢	谷部1・検出面	-	[9.3]	-	沈線・縄文(LR 横)	
25	縄文土器	深鉢	谷部1・検出面	-	[5.4]	-	隆帯・沈線・縄文(RL 横)	
26	縄文土器	深鉢	谷部2・遺物包含層直上	-	[4.5]	-	地文のみ(LR 横)、胎土に織維混入	
27	土師器	甕	谷部2・遺物包含層	-	[3.8]	(9.4)	底部回転系切り	
28	縄文土器	深鉢	谷部2・遺物包含層	-	[3.4]	-	沈線	
29	縄文土器	深鉢	谷部2・検出面	-	[6.6]	-	隆帯・沈線・縄文(LR)	
30	縄文土器	深鉢	谷部2・検出面	-	[3.3]	(10.6)	地文のみ	
31	縄文土器	深鉢	谷部2・遺物包含層	-	[4.4]	-	隆帯・沈線	
32	縄文土器	注口	谷部2・検出面	-	[3.4]	-	注口部片、外面ミガキ	
33	縄文土器	注口	谷部2・検出面	-	[3.8]	-	沈線による文様	

表2 掘載石器一覧

掘載 No.	器種	出土状況		寸法(cm)			備考・特記事項
		位置・遺構・層位	長さ	幅	厚さ		
34	石匙	谷部1・遺物包含層	8.5	2.9	1.5	頁岩	
35	搔器	谷部2・擾乱	4.6	3.25	1.1	頁岩	

※()内の数値は推定値、[]内の数値は残存値を示している。



西侧調査区D地区部全景（北から）



西侧調査区谷部1（南西から）



西侧調査区谷部1（北西から）



東側調査区A地区トレンチ（南から）

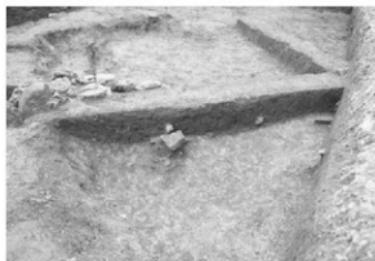


東側調査区B地区トレンチ（南東から）

写真図版1 調査区全景・トレンチ



竪穴住居 1 全景（南から）



竪穴住居 1 断面（東から）



竪穴住居 1 断面（南から）



竪穴住居 1 カマド断面（南から）



竪穴住居 1 カマド全景（南から）

写真図版2 竪穴住居 1（平安時代）



竪穴住居1床面（南東から）



竪穴住居1カマド～煙道検出（南から）



竪穴住居1煙道縦断面（北西から）



竪穴住居1煙道横断面（南から）



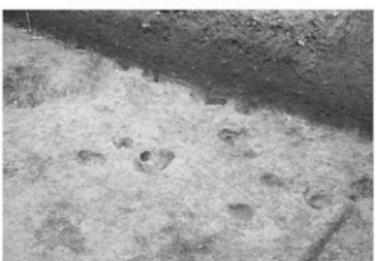
竪穴住居1土坑A断面（南から）



竪穴住居1カマド燃焼部検出（南から）



竪穴住居2断面（南から）



竪穴住居2全景（南西から）

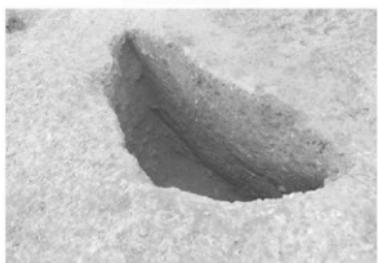
写真図版3 竪穴住居1(平安時代)、竪穴住居2(縄文時代)



土坑1完掘（東から）



土坑1検出（西から）



土坑1断面（北東から）



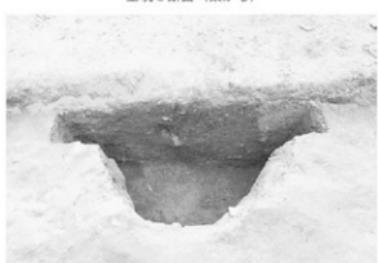
土坑2断面（東から）



土坑3断面（東から）



土坑4断面（東から）



土坑4断面（北から）



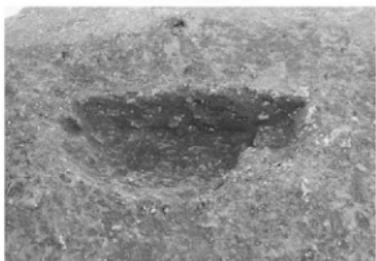
土坑5断面（南から）



土坑6断面（東から）



土坑7断面（東から）



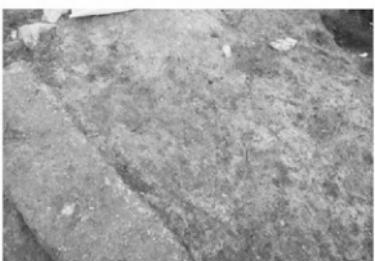
土坑8断面（東から）



土坑9断面（東から）



焼土1（南から）



焼土2（南から）

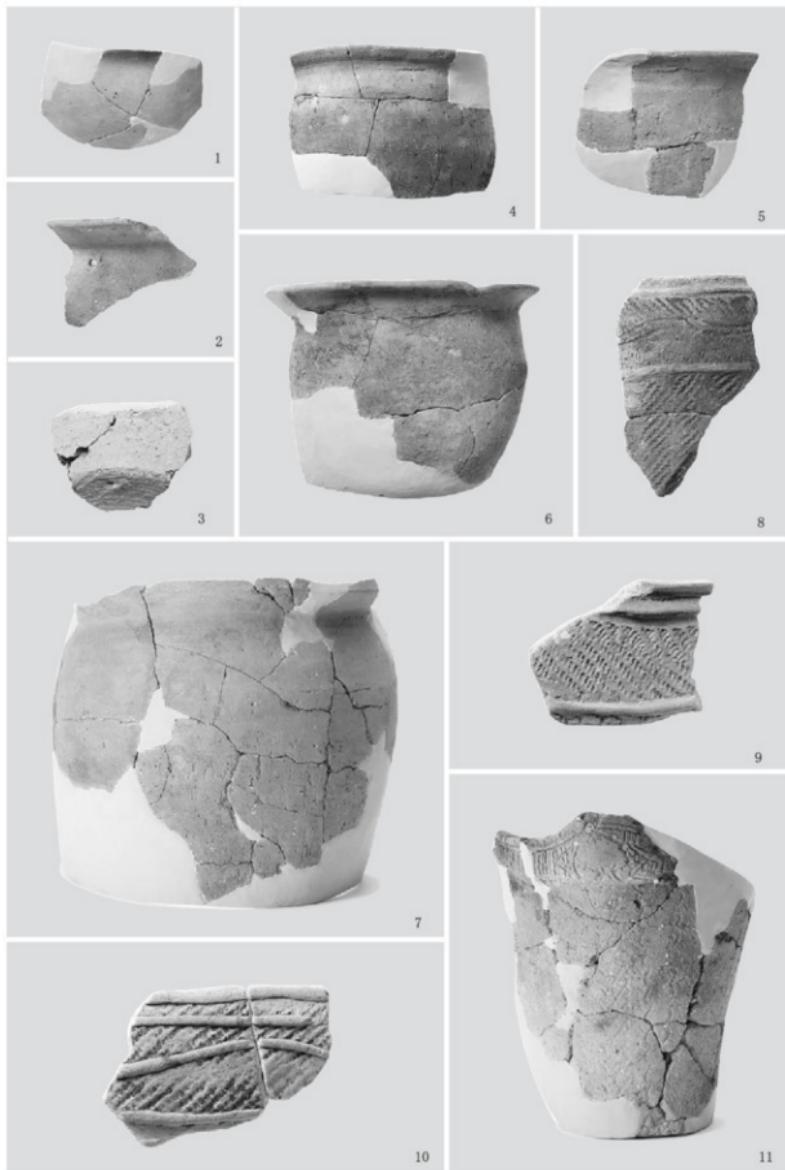


土器埋納遺構全景（東から）

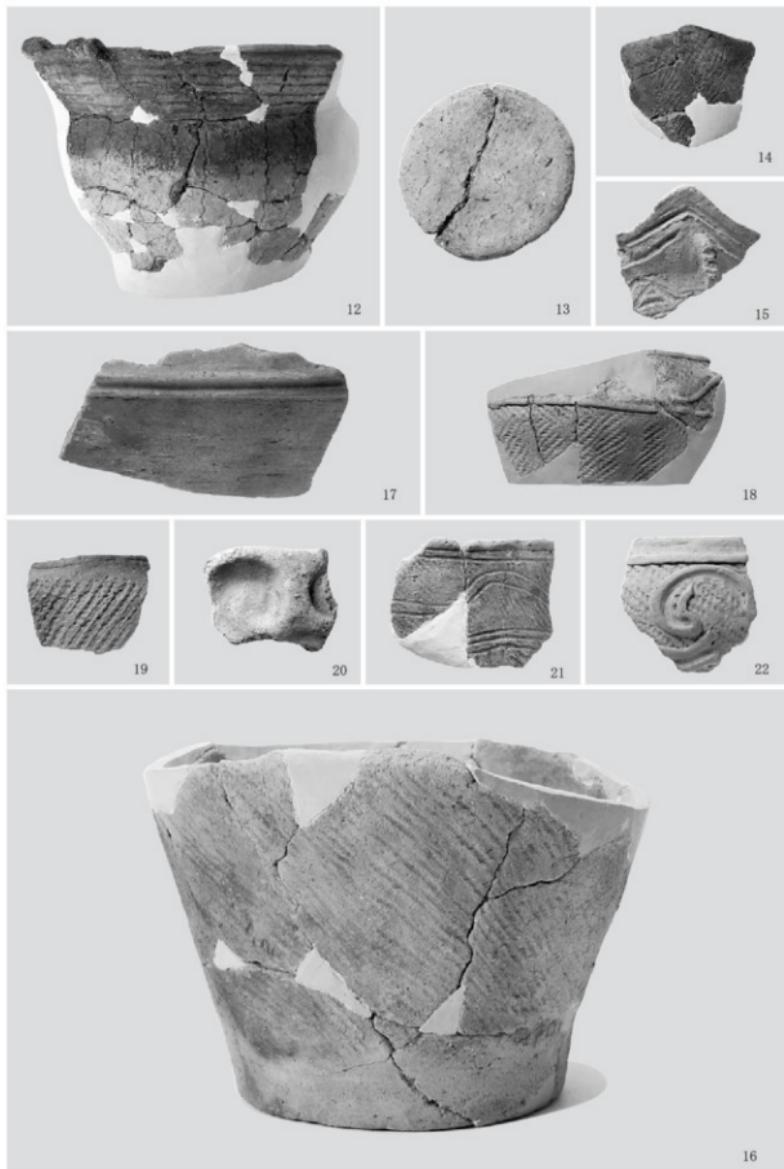


土器埋納遺構断面（東から）

写真図版5 土坑6～9、焼土1・2、土器埋納遺構



写真図版 6 出土遺物 (1~11)



写真図版7 出土遺物 (12~22)



写真図版 8 出土遺物 (23~35)

II 発掘調査概報

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(7) 千苅遺跡

所 在 地 北上市二子町千苅224ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 北上川中流部緊急治水対策事業（二子地区）
 発掘調査期間 平成25年5月2日～12月20日
 調査終了面積 11,265m²
 調査担当者 村上絵美・高木晃・藤本玲子・伊東格・
 中嶋優太
 主要な時代 弥生・奈良～平安



遺跡の立地

JR東北本線北上駅から北東約3km、北上川西岸沿いに位置する。遺跡の範囲は北上川に沿って南北に細長く、平成23年度より南から北へ向かって順に調査を進めている。今回が最終年度で、3ヶ年の合計面積は約27,000m²となる。調査前の現況は平坦な畠地であったが、旧地形は北上川の氾濫や流路の変更の影響をうけ、自然堤防と後背湿地が入り組み、起伏を持っている。

調査の概要

今年度検出した遺構は、古代（主に奈良時代後半～平安時代前半）の堅穴住居跡57棟、焼成土坑58基、竪間状遺構17箇所、溝跡1条、弥生時代初頭～前期の土坑墓7基、焼土遺構4基、その他これらの時期、もしくはそれ以降の土坑39基、溝跡24条等である。これまでの調査で確認した遺構数も合わせると古代の堅穴住居跡は89棟、焼成土坑は120基を超える。古代の遺構は、昨年度と同様南北に細長い自然堤防上に立地している。堅穴住居跡が堤防頂部に並び、その周縁に焼成土坑が分布する。規模が大きく、床面施設の多い住居跡が一定間隔を保って立地していることも、前年度と同様の特徴である。一方で昨年度と異なる点は、遺構同士の重複があること、奈良時代の住居跡が存在することが挙げられる。弥生時代の遺構は、調査区南側の遺物包含層内で検出された。土坑墓は径1m程度の梢円形で、土坑底面から下部にかけて赤色顔料を検出した。7基中2基には頭骨・歯列・四肢骨の一部も残存する。

遺物は、土器が大コンテナで141箱、このうち包含層出土の弥生土器が5割を超える。その他、石器・土製品・石製品・金属製品・獸骨片等も出土している。



堅穴住居跡群



包含層の遺物出土状況

(8) 沢田III遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町山田第3地割33-1ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年4月9日～12月6日
 調査終了面積 6,000m²
 調査担当者 阿部勝則・佐藤淳一・廣瀬時習・鈴木博之
 主要な時代 繩文・古代



1:50,000 大槻

遺跡の立地

遺跡は、町立山田北小学校の北東側約300mに位置している。調査区は、山田湾に向かって南向きに開けている場所で、現在の山田湾の汀線より800mほど内陸に入った地点である。調査区の標高は12～30mで、地形により尾根・谷・低地に分かれる。現況は山林・原野である。今年度は、調査対象面積9,600m²のうち、尾根・谷を主とする6,000m²の調査を終了した。低地を主とする3,600m²については、次年度の継続調査となる予定である。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の堅穴住居跡11棟、プラスコ状土坑64基、土坑25基、遺物包含層1箇所、古代の堅穴住居跡12棟、鉄生産に関連する炉跡18基、炭窯跡13基などである。出土遺物は、縄文土器・土師器大コンテナ150箱、土製品大コンテナ7箱、石器・石製品大コンテナ5箱、鉄滓類大コンテナ25箱、動物遺存体大コンテナ13箱、植物遺存体大コンテナ10箱などである。

調査区の尾根より低地にかけての南斜面で縄文時代中期の堅穴住居跡とプラスコ状土坑などが確認された。遺構の重複が激しく、出土遺物量も多い。堅穴住居跡の埋土からアサリ主体の動物遺存体が出土しており、プラスコ状土坑の埋土からはトチノキを主とする堅果類がまとまって出土した。縄文時代の食料事情を知ることのできる良好な資料である。谷では縄文時代前期の遺物包含層と堅穴住居跡などが確認された。古代の堅穴住居跡は、調査区全体に散在しており、奈良時代は北カマド、平安時代は西カマドで、時期によりカマドの設けられる方向が異なる傾向がある。調査区北東端に位置する南向きの谷状の傾斜地では、古代の鉄生産関連遺構群が確認された。炉跡や炭窯跡からなる鉄生産関連遺構群は、南向きの谷状の傾斜地を繰り返し掘り込んで構築されており、製炭から炉の構築、鉄生産までの一連の作業が狭い範囲で濃密に行われていた場所であったことが確認された。



縄文時代のプラスコ状土坑群



古代の鉄生産関連遺構群

(9) 間木戸Ⅱ遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町山田第3地割56-1ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年4月9日～7月31日
 調査終了面積 1,510m²
 調査担当者 佐藤あゆみ・北村忠昭・佐藤剛
 主要な時代 繩文・古代

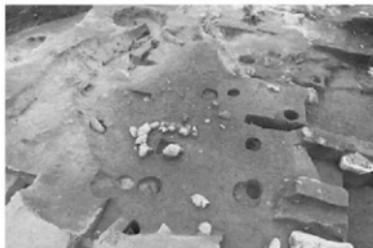


遺跡の立地

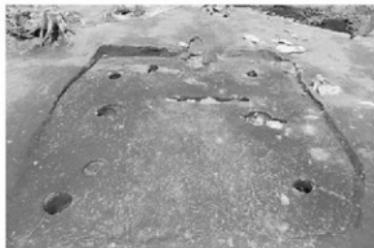
遺跡は、山田町役場から北へ約1.5km、間木戸川の開析により形成された谷部にある。間木戸V遺跡北側の痩せ尾根からつながる緩斜面に位置し、北側上流より南西へ流下する沢縁を境に、北が間木戸V遺跡、南が間木戸II遺跡に分けられる。間木戸II遺跡は、その沢と西を流れる間木戸川により扇状地状に形成された緩斜面に立地する。標高は、14～18mである。調査前は山林であり、遺跡西側は道路によって削平されていた。

調査の概要

検出遺構は、堅穴住居跡34棟（繩文29、古代5）、焼土遺構・炉跡10基（繩文・古代）、土坑13基（繩文）、柱穴状土坑30個（繩文・古代）、性格不明遺構1基（繩文）、埋設土器2基（繩文）、遺物包含層1000m²（繩文）、出土遺物は、土器（繩文・古代）大コンテナ54箱、石器（繩文・古代）大コンテナ4箱、石・土製品などである。調査区中央から南では、重複する繩文時代の堅穴住居跡を複数検出した。それらの多くは、繩文時代中期の堅穴住居跡であり、床面に設けられた炉は、地床炉のほかに石囲炉や複式炉、土器埋設炉など様々な形態であった。繩文時代の居住域は標高の低くなる南側にまだ続くと思われる。遺物は、堅穴住居跡の床面から出土するというよりは、堆積土に多く含まれていた。また、繩文時代前期～中期の土器を包含する黒色土（遺物包含層）が調査区全体を厚く覆い、特に調査区南西側では、大量の遺物が出土した。この遺物包含層を掘り込んで作られていたのが、古代の堅穴住居跡で、全て北側の壁にカマドが設けられ、床面からは、鉄鏃・紡錘車のほか、貝殻が出土したものもある。古代の居住域は標高が高くなる北東側斜面地へ統一していると思われる。古代の遺構については、隣接する間木戸V遺跡の製鉄関連遺構と関わる可能性がある。



重複する堅穴住居跡（繩文時代）



堅穴住居跡（古代）

(10) 間木戸V遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町山田第3地割68-2ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成25年4月9日～6月28日
調査終了面積 1,200m²
調査担当者 北村忠昭・佐藤剛・佐藤あゆみ
主要な時代 繩文・古代



遺跡の立地

遺跡は、山田町役場から北へ約1.5km、間木戸川の開析により形成された谷部にある。間木戸V遺跡北側の痩せ尾根からつながる緩斜面に位置し、北側上流より南西へ流下する沢縁を境に、北が間木戸V遺跡、南が間木戸II遺跡に分けられる。今回調査を行った間木戸V遺跡の標高は20～35mで、調査前は山林であり、調査区の一部が作業道構築により削平されていた。

調査の概要

検出遺構は、繩文時代の竪穴住居跡2棟・埋設土器1基、古代の竪穴住居跡1棟・工房跡2棟・製鉄炉5基・焼土遺構4基・土坑4基・炭窯跡2基・柱穴状土坑8個・性格不明遺構1基・廃滓場1箇所、時代不明の土坑1基である。出土遺物は、土器類（繩文土器・弥生土器・土師器）中コンテナ3.5箱、石器中コンテナ1箱、羽口中コンテナ1箱、鉄滓中コンテナ33.5箱、炉壁中コンテナ2箱などである。遺構・遺物は南～南東向きの狭い緩斜面で確認された。その中でも特筆すべきものは、製鉄関連の遺構である。主体となる工房は、ほとんど同じ位置に構築されているが、新しい工房が古い工房の斜面上方に掘り込みつつ、古い工房を利用しながら構築していることが判明した。工房からは、年代を特定しうる遺物がほとんど出土していないが、今回の調査で出土した遺物から判断すると8世紀代に帰属する可能性が高い。また、同時期の竪穴住居跡も確認された。竪穴住居跡の内部では製鉄に関連する付属施設は伴っておらず、竪穴の機能分離が明確化している点も特徴としてあげられる。隣接する間木戸II遺跡でも同時期の竪穴住居跡が確認されており、本遺跡と密接な関連を持つものと想定される。



繩文時代中期の竪穴住居跡



古代の工房跡

いしどうげ
(11) 石崎II遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町石崎第2地割6-30ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年7月1日～12月20日
 調査終了面積 4,700m²
 調査担当者 北村忠昭・佐藤剛・佐藤あゆみ
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線豊間根駅の北北東約1kmに位置し、荒川左岸の丘陵裾に立地する。標高は約35～50m前後であり、調査前は畠地及び山林であった。北西側には中世城館である内館遺跡が隣接している。なお、調査対象面積は9,698m²で、今年度調査未了となった4,998m²は来年度に継続する予定である。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の堅穴住居跡20棟（早期～中期）・フラスコ状土坑21基（中期）・陥し穴状遺構123基・土坑13基・性格不明遺構2基・柱穴状土坑14個、時代不明の掘立柱建物跡4棟・製鉄炉1基・盛土整地1箇所である。出土遺物は、縄文土器大コンテナ10箱、剥片石器大コンテナ1.5箱、礫石器大コンテナ20箱、土鈴1点、不明土製品1点、石製品1点、土師器数点、陶磁器小コンテナ1箱、羽口大コンテナ1箱、鉄滓大コンテナ57.5箱等である。

今年度調査終了となった範囲は、調査区の北側と南側の両端にあたる。北側では、主に縄文時代中期の堅穴住居跡とフラスコ状土坑がまとまって確認された。来年度の調査区にも広がっており、かなり規模の大きな集落になることが想定される。南側は、縄文時代早期から中期の堅穴住居跡と前期以降の多様な陥し穴状遺構がまとまって確認された。その中でも特筆すべきものは、山田町内で最も古い堅穴住居跡の一つとなる物見台式期の堅穴住居跡があげられる。

上記以外に、時代の特定できなかった製鉄炉が確認された。来年度の調査対象範囲内でも炉の存在が想定されており、来年度の調査で時代の特定が期待される。



南側調査区全景



縄文時代早期中葉の堅穴住居跡

つ がるいしおおもり
(12) 津軽石大森遺跡

所 在 地 宮古市津軽石第4地割73-4ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成25年4月10日～8月27日
調査終了面積 3,455m²
調査担当者 米田 寛・佐藤淳一・中村隼人・立花雄太郎
主要な時代 繩文・古墳～平安・中近世



遺跡の立地

宮古市立津軽石小学校の北側の丘陵地に位置する。調査区の現況は畑地であった。今回の調査区は、遺跡範囲の中央から東側にかけて設定された。本遺跡は標高15～25mを測り、津軽石川西岸の津軽石集落を見下ろす位置にある。

調査の概要

検出遺構は竪穴住居跡37棟、陥し穴状遺構6基、土坑3基、柱穴状土坑14個である。竪穴住居跡は2棟が縄文時代、35棟が古代である。

出土遺物は縄文土器が大コンテナ7箱、土師器・須恵器が大コンテナ12箱、陶磁器が16点、石鎌、石匙、磨石、砥石、敲石等の石器が中コンテナ3箱、土製紡錘車が20点、短刀、刀子、鉄鎌、鎌などの鉄製品が14点、鉄滓が5点、琥珀片3.8gである。



調査区全景



縄文時代前期の竪穴住居跡



奈良時代の大型竪穴住居跡



奈良時代のカマドとカマド脇の土器

(13) 小成 II 遺跡

所 在 地 下閉伊郡岩泉町小本字小成 4-36ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年7月1日～10月11日
 調査終了面積 1,900m²
 調査担当者 藤本玲子・村上拓・高橋麻依子・森 裕樹
 主要な時代 縄文



1:50,000 田老

遺跡の立地

小成 II 遺跡は三陸鉄道北リアス線小本駅から南約3.0kmの国道45号沿いに位置する。丘陵部を縫って東流する小成川は遺跡付近で支沢と合流し、北東に向きを変え約2.5km先で河口に達する。遺跡が立地するのは支沢合流点付近の左岸に形成された河岸段丘状の緩斜面である。標高は40m前後。調査区北縁部は丘陵縁部の急崖に接しており、崖錐堆積層の間に十和田中撒テフラの二次堆積層が厚く分布する。一方、中央～南部は自然堤防状の河床礫層の間に小成川に沿った旧河道が認められ、一帯は黒色土の堆積が顕著であった。縄文時代中期遺構は、北縁部では中撒テフラ層、中央以南では礫層及び旧河道を覆う暗褐色土層上面を検出面とする。なお調査区は全域が開田による削平を受けていた。

調査の概要

調査区全域にわたり縄文時代中期後葉の竪穴住居跡38棟が分布する。このほか検出遺構は土坑2基、時期不明の溝跡1条がある。棟数のわりに重複は少なく、集落として利用された時期幅はそれほど大きくないものと思われる。竪穴住居跡は概ね円形を呈し、規模は長径8.4～2.8m程、河川礫を利用した複式炉や石囲炉が備わる。主柱穴配置を明確に捉えたものは少ない。複式炉は石囲による燃焼部と前庭部からなる単純な形態のものが大半で、土器埋設部は伴わない。出土遺物は、縄文土器が中コンテナ19箱、中期後半の大木8b～9式段階が主体で、他に縄文早期・前期・後期・晚期の土器がごく少量出土している。石器は中コンテナ14箱程の出土量があるが、石鏃等の定型的な剥片石器の量は少なく、河川礫を素材とした敲磨器類が過半数を占める。また磨製石斧が18点含まれる。この他、黒曜石剥片2点、未加工の琥珀原石片9点等も出土している。



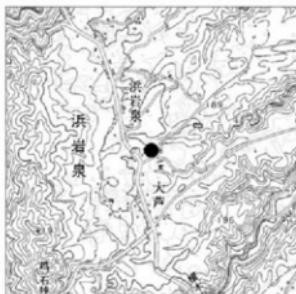
遺跡全景



S 114 竪穴住居跡全景

しまのこし
(14) 島越 XIV 遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村島越302-2ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成25年8月19日～11月22日
調査終了面積 1,400m²
調査担当者 小林弘卓・森 裕樹
主要な時代 繩文



1:50,000 岩泉

遺跡の立地

遺跡は、田野畠村役場から南南西へ約4.5kmの地点に位置し、西側の山地から繋がる標高190m台の丘陵地上に立地している。今回の調査区は、東へ延びる狭い尾根とその両側の斜面を含む地点で、調査前の現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡5棟、竪穴住居状遺構1棟、プラスコ状土坑7基、焼土遺構2基である。また、調査区の北側斜面で小範囲ながら遺物包含層が確認された。竪穴住居跡はいずれも円形を基調とするもので、床面には石畳炉を有し、そのうち2棟は複式炉であった。縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。プラスコ状土坑はいずれも開口部径約2m、深さ約1.5～1.8mを測るものである。近い範囲に集中することから、同時期に計画的に配置された可能性が窺える。

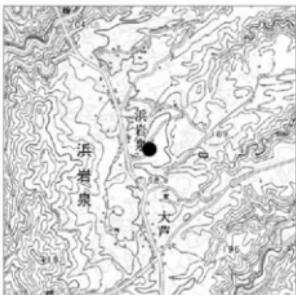
出土遺物は、縄文土器中コンテナ8箱、石器類中コンテナ6箱である。上記の時期に含まれるもののがほとんどである。



調査区全景（上空から）

しまのこし
(15) 島越 II 遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村島越399-2ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年7月1日～8月9日
 調査終了面積 3,100m²
 調査担当者 小林弘卓・森 裕樹
 主要な時代 縄文



1:50,000 岩泉

遺跡の立地

遺跡は、田野畠村役場から南南西へ約4kmに位置し、西側の山地から繋がる標高210m前後の丘陵地上に立地している。遺跡の現況は牧草地で、地形は大きく改変されている。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑2基、陥し穴状遺構17基すべて縄文時代に属するものと考えられる。遺構の大半は陥し穴である。形状としては、溝状で両端が円形に膨らむものが多い。このほか、底面に逆茂木痕（杭痕）が確認された円形のものがいくつか見られる。また、調査区の南端で石匂炉を伴う竪穴住居跡が1棟確認された。

遺物は遺構内からの出土は無く、遺構外から縄文土器が数片出土したのみである。



調査区全景（北から）

とよまねしんでん
(16) 豊間根新田 I 遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町豊間根 7-113地割 5ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成25年7月1日～12月12日
調査終了面積 15,400m²
調査担当者 古館貞身・濱田 宏・近藤行仁・佐々木隆英
主要な時代 繩文



1:50,000 宮古

遺跡の立地

JR山田線豊間根駅の南方約1kmにある町立豊間根小学校の南に隣接し、豊間根川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡は南側に位置する山裾から北側に位置する豊間根川にかけての緩斜面が主に利用されており、標高は42～49mを測る。

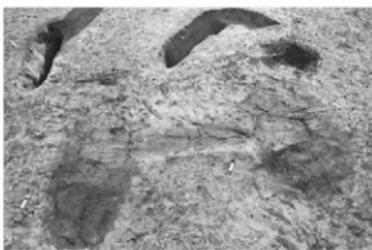
調査の概要

本遺跡は、7月1日から12月12日まで調査が行われ、最大登録時46名の作業員、延べ9名の調査員が関わって行われた。

今回の調査では、主に陥し穴状遺構が検出されたが、その時期については当初、遺物等の出土が無く不明であった。しかし、調査終盤に一部土坑埋土中から石鏃が出土し、また別の土坑埋土からは十和田中折テフラを検出した。以上のことから時期を縄文時代に属するものと考えている。

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構が361基、時期不明の土坑9基、焼土遺構2基である。陥し穴状遺構についてはその平面形から3種に大別されそれらの重複状況から、円形→楕円形→溝状という新旧関係が観察できる。遺構配置については、斜面上位から下位にかけて広く分布するが、若干の粗密があり、斜面上位に比し下位に多く観察される。しかし円形については逆で、斜面上位に多く見られ、下位にはまばらである。今回の調査で、この場所が長い間、狩り場として利用されていたことがわかった。

出土遺物は、無茎石鏃1点、石鏃？1点、鉄滓3点、陶磁器片3点のみである。



遺構検出状況（楕円形と溝状の切り合い）



遺構の切り合い

(17) 伏津館跡

所 在 地 九戸郡野田村大字野田第21地割79-1ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年9月2日～11月28日
 調査終了面積 7,300m²
 調査担当者 三好孝一・北田勲
 主要な時代 中世



遺跡の立地

伏津館（ふしつだて・ふづつだて）跡は、野田村北部に位置しており、野田村役場の西約800mの独立丘陵に立地している。現況は山林で、標高は27～53mである。遺跡は古くから城跡として知られており、安倍氏家臣伏津新九郎忠信の居館の伝承があるが、詳細は全く不明である。

調査の概要

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構や中世の堀跡・土塁・曲輪・切岸・建物跡等、時期不明の炭窯跡である。特に城館の主郭及び副郭からは、伏津館造営時の遺構・遺物が検出された。

出土遺物は、15世紀に比定される陶磁器が主であり、青磁や白磁などの輸入陶磁や瀬戸など国産陶磁が大コンテナ1.5箱出土した。その他に、永楽通寶や洪武通寶などの銭貨、茶臼、硯なども確認されている。主要な遺構精査は次年度となるが、出土遺物から有力者の居館であった可能性が高く、成果が期待される。



はまいわいざみ
(18) 浜岩泉III遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村大芦14ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成25年8月19日～12月20日
調査終了面積 2,070m²
調査担当者 小林弘卓・星 雅之・立花雄太郎・森 裕樹
主要な時代 繩文・弥生・古代



1:50,000 岩泉

遺跡の立地

遺跡は、田野畠村役場から南へ約5.0km、三陸鉄道北リアス線田野畠駅から南西へ約3.5kmに位置する。調査地内の標高は180～190m、調査前の現況は森林及び牧草地である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡22棟（縄文14棟、弥生6棟、古代2棟）、土坑22基（内フラスコ状6基）、焼土遺構1基、埋設土器1基である。

遺物は、土器大コンテナ5箱、石器類大コンテナ3箱、土製品（有孔垂飾品・羽口）、鐵製品（小刀・鋸鉋車）、鐵滓、鍛造剝片などである。

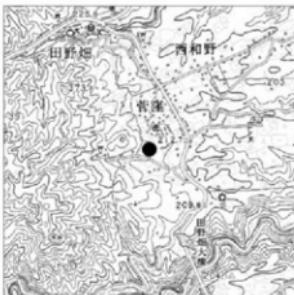
調査成果として、①縄文中期後～末葉（複式炉を持つ）、②弥生後期（赤穴式期）、③平安期（床面上に鉄生産関連炉を有する）の3時期の竪穴住居跡を検出した。



調査区全景（上空から）

十日町
(19) 菅窪遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村菅窪141-1
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年10月15日～11月15日
 調査終了面積 1,600m²
 調査担当者 星 雅之・立花雄太郎
 主要な時代 繩文



1:50,000 岩泉

遺跡の立地

遺跡は、田野畠村役場から南へ約1.0km、三陸鉄道北リアス線田野畠駅から南西へ約3.5kmに位置する。調査地は丘陵地の南向き緩斜面にあり、標高は約250m、調査前の現況は果樹園である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡4棟、土坑3基、陥ち穴状遺構1基、焼土遺構2基で、帰属時期は全て縄文時代である。竪穴住居跡4棟は、南向きの緩斜面において等高線に沿うように配置されている。平面形は円形若しくは梢円形で、石壠炉若しくは地床炉を持つ。時期は縄文後期初頭と推定される。また、土坑1基から、縄文前期前葉と推定される底部尖底の完形土器が出土した。

遺物は、土器大コンテナ4箱、石器類大コンテナ1.5箱である。土器は、縄文時代前期前葉～晩期後葉まで認められる。



菅窪遺跡全景（上が北）

(20) 外屋敷 XIX 遺跡

所 在 地 久慈市侍浜町桑畠第3地割5-14ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 久慈北道路
発掘調査期間 平成25年9月17日～12月6日
調査終了面積 5,640m²
調査担当者 小野寺純也・米田 寛・中川重紀
主要な時代 縄文



1:50,000 久慈

遺跡の立地

遺跡は、JR侍浜駅から東に約6.3kmに位置し、太平洋を東に望む標高150～160m前後の海成段丘上に立地する。調査前の状況は雑木林であり、南斜面地が農地造成の影響を受けている。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代早期中葉の竪穴住居跡3棟、竪穴住居状遺構3棟、焼土遺構3基、縄文時代の陥し穴状遺構3基、縄文時代早期～後期の遺物包含層940m²、時期不明の土坑1基である。竪穴住居跡は、長径約7m前後のものが殆どであり、深度も約100cmと遺構の残存状況が非常に良好である。床面施設は、柱穴や焼土を検出した。また、住居の埋土中には、南部浮石が15～20cm堆積しており、いずれの住居跡からも確認されている。これらの竪穴住居跡は、南側調査区中央付近に広がる、硬化した黒色森林土壤層下の褐色土層から検出した。この黒色土層は、白色の細粒バミスと縄文時代早期の遺物を多く包含している。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ5箱、石器類大コンテナ6箱である。出土土器は縄文時代早期のものが主体であり、石器については小剥片が多く出土している。



竪穴住居群



縄文時代早期の竪穴住居跡



竪穴住居内に堆積する南部浮石

はらいかわ
(21) 払川 II 遺跡

所 在 地 宮古市津軽石第4地割123-3ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年9月17日～12月6日
 調査終了面積 1,600m²
 調査担当者 村木 敏・野中裕貴
 主要な時代 古代・中世・近世



1:50,000 宮古

遺跡の立地

遺跡は、JR山田線津軽石駅よりの南西約2kmに位置しており、標高約30～40mの丘陵先端部に立地している。調査前の現況は山林である。

調査の概要

検出構造は、平安時代の竪穴住居跡1棟、中世の経塚1基、近世墓3基である。塚は段丘の突端部に構築されており、基底のみを確認している。

出土遺物は、土師器、須恵器、永楽通寶、縄文土器、鉄滓などが小コンテナ1箱である。



経塚俯瞰

はらいかわ
(22) 扰川III遺跡

所 在 地 宮古市津軽石第14地割143ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成25年9月17日～12月6日
調査終了面積 4,800m²
調査担当者 村木 敏・野中裕貴
主要な時代 繩文・古代・中世



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線津軽石駅の南西約2kmに位置しており、標高25m前後の河岸段丘上に立地している。調査前の現況は畑地である。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構61基、平安時代の竪穴住居跡1棟、鍛冶工房跡1棟、中世の掘立柱建物跡3～4棟、鍛冶工房跡1棟、鍛冶炉2基、周溝1基、柱穴状土坑532個である。

出土遺物は、須恵器・土師器などが小コンテナ1箱、羽口・鉄滓が中コンテナ13箱である。また、縄文土器や石器なども少量ながら確認している。



遺跡俯瞰

(23) 間木戸Ⅰ遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町山田第3地割57ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成25年11月5日～11月28日
 調査終了面積 0 m² (表土除去1,600 m²)
 調査担当者 村上 拓
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、山田町役場の北方約1.5kmに位置する。北西側から延びる丘陵の縁部に立地し、南東側は北から南西に流下する沢により区切られている。沢の対岸には今年度調査が行われた間木戸Ⅱ・間木戸Ⅴ遺跡が所在し、また南西側で沢田Ⅲ遺跡と接している。

調査の概要

今年度は、要本調査範囲の北半部約1,600 m²の表土除去を行った。本格的な遺構検出は行っていないが、現時点では把握された遺構分布概況は以下の通りである。

調査区北半部は、東側に向かって張り出す丘陵先端部とその北側斜面下に広がる平坦面からなる。丘陵部では、頂部～南東側斜面部において住居跡・炉跡・フ拉斯コ状土坑等、縄文時代遺構のやや密な分布が認められた。また製鉄関連遺構と見られる鉄滓や木炭の出土地点も確認された。北部平坦面は、前述の沢に向かって延びる幾筋かの埋没した小谷の末端が並列した状態となっており、これを埋めている黒色土は縄文時代中期土器片を少量包含している。

本遺跡の調査は次年度以降継続して実施される予定である。



遺跡全景

主ついそ
(24) 松磯遺跡

所 在 地 大槌町吉里吉里第13地割字松磯 3 ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
事 業 名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成25年8月19日～10月15日
調査終了面積 3,900m²
調査担当者 巴 亜子・西澤正晴・塩谷龍平
主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線浪板海岸駅より北東へ約1kmの地点に位置し、船越湾に注ぐ浪板川に面した緩斜面上にあり、尾根上・斜面部・斜面下平坦面がある。標高は49～66mで、現状は山林であった。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期のフ拉斯コ状土坑18基、土坑7基、焼土遺構1基、遺物包含層1箇所である。フ拉斯コ状土坑は尾根上の南東部にまとまって確認され、残存状況が良いものが多い。なかには確認面から1.8mほどの深さになるものもある。堆積状況を確認すると、いずれのフ拉斯コ状土坑も最終的には自然に埋没していることが明らかになった。土坑のほとんどがフ拉斯コ状土坑と同じように尾根上の南東部にまとまって検出でき、フ拉斯コ状土坑を主体とした土坑群を形成していることが分かった。斜面部は利用されておらず、斜面下に土坑1基が検出されただけである。遺物包含層が斜面下平坦面で確認でき、縄文時代中期の土器や石器類が出土した。尾根上から流れ込んだものと推測される。

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ4箱、石器類小コンテナ3箱である。

今回の調査では尾根上ではフ拉斯コ状土坑などの土坑群が確認でき、尾根を利用して貯蔵を行っていたことが明らかになった。斜面下平坦面から遺物包含層が確認され、尾根上からの流れ込みであると推測されるが、斜面部及び尾根上からは住居跡等の居住域は確認できなかったが、周辺には存在すると考えられ、来年度以降に周辺を調査する際には居住域の検出が期待される。



遺跡遠景



フ拉斯コ状土坑断面

きやらのごしおと
(25) 伽羅之御所跡第22次調査

所 在 地 西磐井郡平泉町平泉字伽羅楽6-3ほか
委 託 者 県南広域振興局土木部
事 業 名 県道中尊寺通り改良事業
発掘調査期間 平成25年4月10日～6月5日
調査終了面積 280m²
調査担当者 杉沢昭太郎・白戸このみ・佐藤奈津季
主要な時代 12世紀後半



1:50,000 水沢・一関

遺跡の立地

伽羅之御所跡はJR東日本東北本線平泉駅の北約400mに位置している。遺跡の西側は特別史跡無量光院跡、北側は柳之御所遺跡、南側は泉屋遺跡等と接する。地形は概ね平坦で、現況は宅地であった。

調査の概要

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』の中に無量光院東門の一郭に「伽羅御所」を構えるとあり、平泉藤原氏三代秀衡の常居所で四代泰衡も引き継いだとされる。但し具体的な構造や範囲については記載がない。

検出遺構は、堀跡1条、掘立柱建物跡1棟、土坑4基、柵列5条、溝跡3条、柱穴状土坑約242個、時期不明の遺構として溝跡2条を検出した。出土遺物は、かわらけが大コンテナ3箱、陶磁器が小コンテナ0.5箱出土した。堀跡は北北東-南南西方向へ延びており、「伽羅御所」を囲む堀であったといえよう。12世紀後半のかわらけが出土している。掘立柱建物跡や柱穴状土坑、柵列のいくつかはこの堀の外部にある。これらは「伽羅御所」と同時存在のもの、より古い段階のものも含んでいる可能性が高い。



堀跡の右側（東側）が伽羅御所内部と推測される

はなだて
(26) 花立 I 遺跡第30次調査

所 在 地 西磐井郡平泉町平泉字花立124番地ほか
委 託 者 県南広域振興局土木部
事 業 名 県道中尊寺通り改良事業
発掘調査期間 平成25年4月10日～12月12日
調査終了面積 2,175m²
調査担当者 杉沢昭太郎・白戸このみ・佐藤奈津季
主要な時代 12世紀後半



1:50,000 水沢・一関

調査の概要

12世紀に関連する遺構では溝跡3条、性格不明遺構2基、柱穴状土坑5個、旧河道が3箇所見つかった。他時期の遺構として性格不明遺構1基がある。遺物は12世紀のかわらけや陶磁器が小コンテナ0.5箱、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の土器が小コンテナ0.5箱、樹木類（主に縄文時代晩期末～弥生時代初頭）が大コンテナ6箱出土した。調査区北部で見つかった旧河道は柳之御所跡と無量光院跡の間にある猫間が淵と呼ばれる旧河道の上流部であることが分かった。調査区南端の旧河道からも12世紀の遺物が出土した。調査区の中央部は遺構が薄く県道工事の際に削平された可能性が高いと考えている。



調査区北部で見つかった旧河道

はなだて
(27) 花立 II 遺跡第24次調査

所 在 地 西磐井郡平泉町平泉字柳御所53番地1ほか
 委 託 者 県南広域振興局土木部
 事 業 名 県道中尊寺通り改良事業
 発掘調査期間 平成25年4月10日～12月12日
 調査終了面積 795m²
 調査担当者 杉沢昭太郎・白戸このみ・佐藤奈津季
 主要な時代 12世紀後半



1:50,000 水沢・一関

遺跡の立地

今回の調査区は、花立II遺跡の北端部にあたり、花立I遺跡・柳之御所遺跡や無量光院跡に隣接する地点である。現況は県道と宅地で、旧地形は緩斜面及び平坦地である。

調査の概要

12世紀の遺構としては井戸跡2基、土坑6基、堀跡1条、溝跡19条、柱穴状土坑110個、整地層1枚、性格不明遺構3基、旧河道5箇所があり、他に溝跡1条を検出した。出土遺物は、12世紀のかわらけと陶磁器が中コンテナ6箱と下駄が1点である。調査区の南端で検出した堀跡は無量光院跡の西辺にある堀跡の一部であると推測される。低地だった場所を一旦埋め戻し、整地してから堀を造っており、12世紀後半のかわらけと下駄が出土している。調査区中央付近は12世紀後半を中心とした居住城であったことも分かった。



本遺跡で見つかった堀跡は無量光院跡西辺堀跡の可能性がある

うるしまち
(28) 漆町遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区南都田字漆町91番地ほか
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業都鳥3期地区
 発掘調査期間 平成25年4月4日～7月12日
 調査終了面積 3,123m²（内確認調査911m²）
 調査担当者 西澤正晴・高木晃・巴亜子・塙谷龍平
 主要な時代 銚文・奈良・平安（12世紀含む）



1:50,000 木沢

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線水沢駅の西約5.5kmの地点に位置し、国道397号が遺跡範囲内を横断する場所である。遺跡の位置する胆沢扇状地は段丘が発達しており、南から北に向けて高位段丘から低位段丘へと標高が下がっている。遺跡はこのうち低位段丘（水沢段丘）に立地し、胆沢川の南方約2kmであり、東1kmには国指定史跡である角塙古墳が所在する。

調査の概要

調査区は、ほ場整備に付随する道路や水路予定地であるため、遺跡内の縦横に設定されている。調査は昨年度からの継続である。調査した主な遺構は、堅穴住居跡（小堅穴、堅穴状遺構を含む）26棟、掘立柱建物跡20棟、大溝跡2地点、材木塀跡2地点、溝跡22条、土坑60基、陥し穴状遺構2基、柱穴状土坑589個などである。昨年度の調査とあわせると、堅穴住居跡は55棟、掘立柱建物跡42棟となる。堅穴住居跡の時期は8世紀代（奈良時代）のものがほとんどで、わずか数棟のみが平安時代に所属する。大溝跡は西・北・東側で確認できた。これにより、東西350m、南北150m以上の空間を大溝で囲まれていることが判明した。大溝の詳細な時期については現在整理中であるが、おおむね平安時代に所属する。材木塀も、大溝の内側約20～30mの位置に大溝と並行して巡っている。これが大溝と同時期かは不明する箇所があり、内部を囲むという意識が強く働いていたことがわかる。また北側には材木塀が2条並行しており、二時期ある可能性がある。この北側の材木塀に昨年調査した門（四脚門か）が取り付けられている。大溝内部の様相については、細長い調査区のため判明する事実は少ないが、これまでのところ堅穴建物跡は少なく、掘立柱建物跡が中心となりそうであるが詳細は検討中である。昨年まとまって出土した12世紀関連の遺構・遺物について、今年度はそれぞれ量的に不少い。



大溝跡



堅穴住居跡

(29) 小野遺跡

所 在 地 一関市花泉町字町裏159-2 ほか
 委 託 者 県南広域振興局農政部一関農村整備センター
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業日形地区
 発掘調査期間 平成25年4月8日～5月15日
 調査終了面積 423m²
 調査担当者 潤 浩二郎・村田 淳・中島康佑
 主要な時代 繩文・古代・近世



1:50,000 一関・千厩・志津川・若柳

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線花泉駅の東方向約6kmに位置し、北上川と大江川との合流点付近に形成された微高地に立地する。現況は水田・農道で平成23年度に当センターで調査を行った箇所に隣接する。標高は14m前後である。

調査の概要

検出遺構は、古代の畝間状遺構1箇所、焼成土坑1基で、畝間状遺構の畝間埋土には十和田aテフラと考えられる火山灰が混入している。他に土坑7基、柱穴状土坑33個が見つかっているが、詳細時期は不明である。

出土遺物は、土師器・須恵器が大コンテナ1箱、他に南側調査区を中心に近世陶磁器が少量出土している。また調査区西側の丘陵縁部斜面には古代面の下に暗褐色シルト層が堆積しており、繩文土器が出土した。

今回の調査区は古代を中心とし、畝間状遺構など生産に関わる遺構が確認されたが、集落の周縁部にあたり、居住域は隣接する前回の調査区のあった北西部を中心があると考えられる。



調査区全景（上が西）

まちうら
(30) 町裏 I 遺跡

所 在 地 一関市花泉町日形字町裏71-1ほか
 委 託 者 県南広域振興局農政部一関農村整備センター
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業日形地区
 発掘調査期間 平成25年4月8日～6月18日
 調査終了面積 2,506m²（内確認調査1,260m²）
 調査担当者 潤 浩二郎・村田 淳・伊藤みどり・中島康佑
 主要な時代 平安・近世



1:50,000 一関・千厩・志津川・若柳

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線花泉駅の東方向約6.5kmに位置し、北上川右岸に形成された微高地に立地する。現況は水田・畑地で標高は14m前後である。

調査の概要

検出遺構は、畝間状遺構8箇所、土坑1基、溝跡16条（大半が畝間状の小溝）、柱穴状土坑1個である。最下層で検出した畝間状遺構の埋土には十和田aテフラと考えられる火山灰が混入し、周辺からは少量の土師器破片が出土している。遺構の大半は今回調査した場所では旧地形で最も標高のある調査区北東部で検出された。古代面の上には洪水堆積層が50～100cmの厚さで堆積しており、層中から近世～近代の陶磁器が出土している。今回の調査区は古代～近世まで生産域にあり、居住域は今回調査区には含まれないことが明らかになった。



調査区全景（上が東）



畝間状遺構



畝間の堆積状況



溝跡検出状況

まちうら
(31) 町裏 II 遺跡

所 在 地 一関市花泉町字町裏221ほか
 委 託 者 県南広域振興局農政部一関農村整備センター
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業日形地区
 発掘調査期間 平成25年4月8日～6月18日
 調査終了面積 2,609m²（確認調査）
 調査担当者 潤 浩二郎・村田 淳・中島康佑
 主要な時代 平安・近世



1:50,000 一関・千厩・志津川・若柳

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線花泉駅の東方向約6.3kmに位置し、北上川右岸に形成された微高地上に立地する。現況は水田・畑地で標高は13m前後である。

調査の概要

検出遺構は、敵間状遺構7箇所、溝跡2条で遺構確認面は3面存在し、最下層で検出した敵間状遺構には十和田aテフラと考えられる火山灰が敵間埋土に含まれており、10世紀前半以降、断続的に畠耕作地として利用していた場所であることが明らかになった。敵間状遺構から採取した土壤の分析結果から、イネ類・ムギ類を主としたイネ科の作物が栽培された可能性があるとの結果を得た。

遺物は、最下層の敵間状遺構周辺から土師器破片が小コンテナで0.5箱ほど出土している。それより上層では近世陶磁器が表土下の洪水堆積層で見つかっているが遺構に伴うものではない。



遺跡近景（南から）



埋土に火山灰のある敵間状遺構



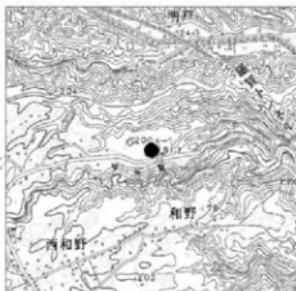
敵間断面



溝跡の検出状況

(32) 野場 I 遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村羅賀193-1 ほか
 委 託 者 田野畠村復興対策課
 事 業 名 災害公営住宅整備及び漁業集落防災機能強化
 発掘調査期間 平成25年4月4日～7月10日
 調査終了面積 6,351m²
 調査担当者 村上 拓・濱田 宏・小林弘卓・高橋麻依子・森 裕樹
 主要な時代 繩文・平安



1:50,000 岩泉

遺跡の立地

遺跡は、田野畠村役場の北東約1.5km、平井賀川左岸の海岸段丘上に立地する。調査区付近の微地形については昨年度概報を参照されたい。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡69棟（前期主体、その他中期～晩期）[90]・土坑29基[73]・陥し穴状遺構22基[30]、平安時代前期の竪穴住居跡（鍛冶工房址）4棟等（[]内は昨年度との合計数）である。出土遺物は、縄文土器大コンテナ40箱（前期主体、その他中期～晩期）、石器・石製品（石槍・石鎌・石匙・石斧・獨鈎石・石劍石刀類・玦状耳飾・蔽磨器類ほか）大コンテナ15箱、土師器塊片・石錐・鉄製紡錘車・刀子・釘・羽口各数点、鍛冶滓1袋等である。

今次調査は事業範囲の拡大に伴い昨年度未了となっていた西部・北部・東部を対象としている。

東部では、縄文時代前期を主体とする方形～長方形基調の住居跡が斜面上に多数密集重複して検出された。この分布は同様の地形面が広がる調査区外にも連続する可能性が高い。東部の斜面下部では、このほかにも縄文時代後～晩期・弥生時代後期・平安時代前期の住居跡（鍛冶炉付属）等が確認されている。一方、西部では溝状の陥し穴状遺構群、北部では縄文時代後～晩期の住居跡等が検出された。昨年度調査区に展開する遺構群に連続するものである。

2ヵ年に渡る調査により、縄文時代前期には住居群が東部斜面に、同後期には住居跡が中央部東端～東部斜面下部、貯蔵穴群が中央部東端に、同晩期には住居群が中央部～北部斜面下部に、平安時代前期には鍛冶炉を伴う住居（鍛冶工房址）が東部斜面下部に、それぞれ分布することが確認された。



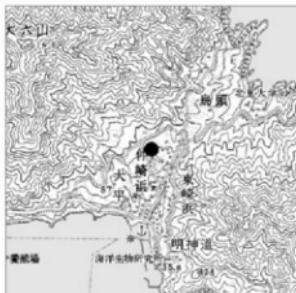
調査区東部全景



縄文時代前期の竪穴住居跡

(33) 中野遺跡

所 在 地 大船渡市三陸町越喜来字仲崎浜123番2ほか
 委 託 者 大船渡市災害復興局集団移転課
 事 業 名 防災集団移転促進事業（崎浜地区）
 発掘調査期間 平成25年4月4日～9月13日
 調査終了面積 9,000m²
 調査担当者 須原 拓・久保賢治・小野寺純也・野中裕貴
 主要な時代 繩文



1:50,000 緯里

遺跡の立地

遺跡は、越喜来湾から約500m北側に位置する。大六山（標高514m）から越喜来湾へと続く南向き斜面の下方部、やや急勾配地に立地する。調査範囲は南北に長く、約80mを測る。標高は最も高い北側が約80m、最も低い南側は約60mである。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期後葉～末葉（大木9～10式期）の竪穴住居跡62棟、土坑36基、埋設土器2基、柱穴状土坑110個である。

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ54.5箱（主に中期、他に早期末葉、前期前葉が含まれる）、石器が大コンテナ24箱で、他にわずかだが近世の錢貨（寛永通寶）、陶磁器、砥石がみつかった。

竪穴住居跡群は調査区全体に分布しており、特に調査区中央に集中している。10棟以上の竪穴住居跡が重複している場所もあった。また縄文集落形成以前、以後の両時期において、大六山から続く斜面上方からの落石、土砂崩れにたびたび見舞われていたと推測され、落石と思われる巨礫によって壁や炉を破壊された竪穴住居跡も少くなかった。竪穴住居跡には「複式炉」や「石團炉」が設置され、炉には埋設土器を伴うものが多い。また住居床面から石器片の集中が数箇所で見受けられた。

今回の調査で、中野遺跡が縄文時代中期後葉～末葉の大規模集落であることが明らかになった。遺構に共存する遺物のなかには、石製の垂飾品やアスファルト塊など貴重なものも含まれており、周辺地域のなかでも中心的な集落であった可能性が高い。また遺構は確認できていないが、縄文時代早期・前期の土器片が出土しており、集落形成以前にも縄文人が生活を営んでいたものと推定される。



調査区全景（北東から）



重複する竪穴住居跡（西から）

みねぎし
(34) 峰岸遺跡

所 在 地 大船渡市末崎町峯岸121番地ほか
 委 託 者 大船渡市災害復興局
 事 業 名 防災集団移転促進事業（峯岸地区）
 発掘調査期間 平成25年4月8日～10月30日
 調査終了面積 4,512m²
 調査担当者 福島正和・星 雅之・茅坪祐樹・佐々木隆英
 主要な時代 繩文



1:50,000 盛

遺跡の立地

遺跡は、JR大船渡線（現在BRTによる運行区間）細浦駅の北約1kmの大船渡湾を臨む高台に位置する。遺跡の立地する高台は舌状の段丘となっており、調査区は段丘の縁辺部の緩斜面地上である。この緩斜面地形は概ね南西から北東方向へ下る傾斜である。調査区の標高は35mであり、調査前は西半が山林、東半が畑地であった。なお、調査区南側は急峻な崖となっているが、近現代の土取り工事によって本来の地形面が失われていることが明らかになっている。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代前期～中期初頭にかけての堅穴住居跡21棟、貯蔵穴10基、土坑36基、焼土遺構1基、中世と考えられる堀跡1条である。その他、柱穴状土坑169個を検出したが、現段階では時期不明である。縄文時代の遺構は、主に段丘縁辺に沿うように分布しており、これら遺構群より地形的にやや低い部分には遺物包含層が2箇所広がる。これら2箇所の遺物包含層は、縄文時代前期後葉の遺物が集中する東側と、縄文時代前期末～中期初頭の土器が集中する西側に分かれ。前者は調査区内でもっとも低い地点、後者はそれよりやや高い地点にそれぞれ展開する。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ30箱、石器中コンテナ10箱、土偶1点、玦状耳飾6点、中世陶器1点である。縄文土器は大木2b～7式までの型式幅が認められる。

検出遺構および出土遺物から峯岸遺跡は、縄文時代前期中葉～中期初頭にかけての集落であることが判明した。比較的大規模な集落であったと考えられるが、調査区はそのごく一部に過ぎないものと推測される。大船渡湾を見下ろす高台にあるこの集落は、山海の食料を得、消費しながら一定期間継続的に営まれたものと考えられる。



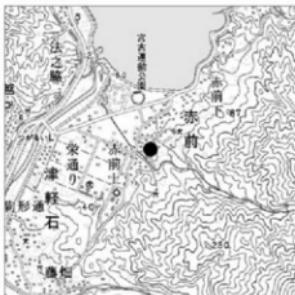
遺跡遠景（南西から）



調査区全景（写真上が北）

(35) 赤前III遺跡

所 在 地 宮古市赤前第7地割6番地1ほか
 委 託 者 宮古市都市整備部都市計画課
 事 業 名 防災集団移転促進事業（赤前・津軽石地区）
 発掘調査期間 平成25年8月19日～12月20日
 調査終了面積 5,900m²
 調査担当者 村田 淳・米田 寛・中村隼人・中島康佑
 主要な時代 縄文・古代・中～近世



1:50,000 宮古

遺跡の立地

遺跡は、JR山田線津軽石駅から東方約1.3kmに位置し、重茂半島の縁辺部の丘陵西側斜面部に立地する。標高は10～24mであり、調査前の状況は畑地・林野であった。調査区内は巨礫の集中する範囲が広範囲に及ぶが、いずれの時代の遺構もこの範囲を避けるようにして造られている。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代前期末～中期の竪穴住居跡5棟（うち大形住居1棟含む）・土坑類78基（うちフラスコ状土坑11基、陥落穴状遺構5基含む）・遺物包含層約50m²、古代（主に平安時代）の竪穴住居跡30棟・工房跡3棟・円形周溝1基・土坑10基・焼土遺構3基・鉄生産関連炉2基、近世の土坑墓5基、時期不明の掘立柱建物跡2棟・土坑10基・溝跡2条・柱穴状土坑164個である。

出土遺物は、縄文土器・土師器・須恵器大コンテナ32箱・陶磁器2袋分・製塙土器中コンテナ1箱・鉄滓類大コンテナ8箱・剥片石器（鏃・匙・錐等）約160点・礫石器（磨製石斧・台石等）中コンテナ4箱・石製品（块状耳飾・管玉）各1点・鉄製品（刀子・鏃・紡錘車等）約50点等である。

調査の結果、縄文時代前期末～中期及び平安時代の集落遺跡と判明した。縄文時代の遺構として注目されるのは長楕円形プランの大形住居（長軸13m）であり、このタイプの大形住居は宮古市域では数少ない事例である。なお、縄文時代の竪穴住居跡や土坑類は調査区中央を流れる沢跡より南側に密集していることから、縄文時代集落の中心は調査範囲から南側にあると考えられる。

古代の遺構は竪穴住居跡と工房跡が主体で、住居内に炉を持つものも多いことから鉄生産を行っていた集落であると考えられる。鉄生産関連炉としては鉄滓の分類から鍛冶炉と精錬炉と考えられるものがあり、工房の中には両者を行っていたと考えられるものも確認される。



縄文時代の大形住居



古代の鉄生産関連炉

(36) 田の浜館跡

所 在 地 下閉伊郡山田町船越12地割ほか
委 託 者 山田町建設課
事 業 名 防災集団移転促進事業（田の浜地区）
町道船越田の浜線建設事業
発掘調査期間 平成25年4月8日～8月23日
調査終了面積 52,700m²
調査担当者 北田 真・濱田 宏・三好孝一・乙戸 崇
主要な時代 繩文・平安・中世・近世



遺跡の立地

田の浜館（別称早川館）は、船越半島の南西側に位置し、牛転峠を源流にして船越湾に流下する牛転び沢の南東側に並行して伸びる丘陵尾根上に立地している。今回の調査区北東側に大堀切と伝えられる谷地形が存在しており、遺跡は大堀切から南西の南北600m、東西300mの範囲である。現況は山林で、昭和前期には農地として開拓されており、その後に植林が進められた。

調査の概要

今回の調査から、縄文時代、平安時代、中世、近世の4時期の遺構を確認した。検出遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡1棟・土坑1基、平安時代の製鉄炉3基・排滓場2箇所・炭窯跡5基・土坑1基、中世～近現代の平場48箇所（近代～近現代の農地造成多数）、近世・近世以降の鍛冶炉1基や炭窯跡1基、墓坑2基や近現代の溝跡2条・柱穴状土坑128個、時期不明の溝跡1条・土坑6基である。

中世城館に関する遺構は、後世の農地造成により大半が確認できなかったが、中央谷部を中心とした平安時代の鉄生産遺構がまとまって見つかった。



遺跡全景（南西上空から）

(37) 焼山遺跡
やけやま

所 在 地 下閉伊郡山田町船越 6 地割ほか
 委 託 者 山田町建設課
 事 業 名 防災集団移転促進事業（船越地区）
 発掘調査期間 平成25年9月17日～11月28日
 調査終了面積 3,900m²
 調査担当者 久保賢治・須原拓
 主要な時代 平安



1:50,000 大槻

遺跡の立地

遺跡は、船越半島の山々と船越湾、太平洋を臨むことができる山地の中腹に位置する。JR山田線船越駅と山田道路との間に挟まれ、南東に開けた谷の北側斜面地に立地しており、標高は約40mである。緩斜面から急斜面に移行する地形の変換点に遺構が集中している。調査以前は戦後の早い時期に植林された杉林であった。

調査の概要

調査区南側には西から東へはしる沢跡があり、その北側に平安時代の鉄生産関連の遺構群が分布している。検出遺構は、製鉄炉9基、鍛冶工房跡2棟とそれに伴う鍛冶炉2基、工房の可能性がある整穴住居跡1棟、炭窯5棟である。遺構埋土中及び、周辺遺構外からは鉄滓、羽口、鉄製品、砂鉄、鍛造剥片等が出土している。この地で燃料を生産し、砂鉄を原料とする製鉄・鍛冶を営んでいたことが窺える貴重な遺跡である。



焼山遺跡と周辺環境



製鉄炉と原位置をとどめている羽口



カマドと支脚に使用された羽口



床下土坑から出土した鍛造剥片

はなだてあと
(38) 花館跡

所 在 地 陸前高田市高田町字太田34番地ほか
委 託 者 陸前高田市教育委員会生涯学習課
事 業 名 土地造成事業
発掘調査期間 平成25年4月9日～7月11日
調査終了面積 6,050m²
調査担当者 村木 敬・近藤行仁
主要な時代 中世



1:50,000 盛

遺跡の立地

遺跡は、陸前高田市役所仮庁舎の南東約1.5kmに位置し、小泉川西岸の標高約30～40mの河岸段丘に立地している。調査前の現況は山林である。今年度は、段丘頭頂部の主郭や副郭を調査している。

調査の概要

検出遺構は、中世城館に伴う曲輪2箇所、切岸4箇所、虎口1箇所、土塁5箇所、堀跡2条、柵列2条、掘立柱建物跡2棟、鍛冶炉5基、土坑7基、竪穴状遺構1棟、焼土遺構4基、溝跡5条、柱穴状土坑78個、貝層1箇所である。曲輪は自然地形を大きく利用しており、大規模な普請は認められない。弥生時代に伴う竪穴住居状遺構2基である。

出土遺物は、中世国産陶器80点、中国産陶磁器4点、近世陶磁器35点、鉄滓1点、鉄製品9点、石臼6点、埴塙2点、砥石1点、弥生土器小コンテナ1箱、貝類小コンテナ25箱である。

本城館は15・16世紀代に伴うものと考えられ、この期間の中で遺構の重複関係及び年代測定結果から2時期に分かれることが想定される。



遺跡遠景

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうごねんどはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成25年度発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第630集							
編著者名	藤本玲子							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2014年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○°○○'○○"	東経 ○○°○○'○○"	調査期間	調査面積	調査原因	
ふどうのさきいさか 不動ノ瀧遺跡	釜石市甲子 釜石市甲子 町第8地割 178-76ほか	03211	MG70-2207	39度 15分 05秒	141度 47分 17秒	2013.04.10 ～ 2013.05.14	874m ²	東北横断自動車 道釜石秋田線建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
不動ノ瀧遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代	土坑	7基	縄文土器・弥生土器			
要約	縄文時代の土坑が7基検出され、形状から貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物は主に縄文時代晚期～弥生時代前期のものが出土した。調査区周辺に集落の存在が予想される。							

ふりがな	へいせいにじゅうごねんどはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成25年度発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第630集							
編著者名	近藤行仁							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2014年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○°○○'○○"	東経 ○○°○○'○○"	調査期間	調査面積	調査原因	
かみおかべたてあと 上長部館跡	陸前高田市 気仙町字牧 田130ほか	032107	NF77-1033	38度 98分 87秒	141度 61分 23秒	2013.08.01 ～ 2013.10.04	6,950m ²	三陸沿岸道路 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上長部館跡	城館跡 遺物散布地	縄文時代 中世	土坑 柱穴状土坑	7基 6個	縄文土器・石器・土 製品(土偶片等)			
要約	遺跡は長部川の右岸に立地する。A区・C区では縄文時代前期～弥生時代前期にかけての遺物が発見された。B区では縄文時代早期と思われる遺物が発見され、遺跡の年代幅が広がった。縄文時代中期の遺物を作った土坑が発見され、牧田貝塚との関連性がうかがえる。P4は ¹⁴ C年代測定により471calBP-311calBPという年代範囲が示されており、16世紀頃と考えられ、城館を構成する遺構の一部と思われる。							

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうごねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成25年度発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第630集						
編著者名	佐藤淳一						
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001						
発行年月日	西暦 2014年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
金浜V遺跡	市町村 遺 踪 番 号	。	。	。			
ほか	03202 LG53-0313	39度 35分 26秒	141度 56分 25秒	2013.07.15 ~ 2013.08.21	1,600m ²	三陸沿岸道路建設事業	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項		
金浜V遺跡	生産遺跡 集落	縄文時代 中世	堅穴住居跡 製鉄炉跡 焼土遺構	1棟 1基 3基	中世の製鉄炉跡を検出した。 排滓場は未確認である。		
要 約	確認された製鉄炉跡は、地下構造部分のみ遺存する状況であった。遺構から出土した炭化材の分析結果から中世の製鉄炉跡である可能性が高い。排滓場は未確認である。 堅穴住居跡周辺から縄文時代中期中葉、大木8a式を主体とする土器が出土した。陶磁器類及び鉄製品は近世以前の遺物である可能性が高い。						

ふりがな	へいせいにじゅうごねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成25年度発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第630集						
編著者名	巴 亜子						
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001						
発行年月日	西暦 2014年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
乙部遺跡	市町村 遺 踪 番 号	。	。	。			
ほか	03202 KG84-0069	39度 46分 32秒	141度 57分 47秒	2013.10.15 ~ 2013.11.29	2,500m ²	三陸沿岸道路建設事業	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項		
乙部遺跡	散布地	縄文時代	土坑 遺物集中区	2基 2箇所	縄文土器・剥片石器・ 礫石器		
要 約	今回の調査では居住域などは確認できなかったが、尾根上に土坑2基、尾根下には遺物集中区が2箇所を確認した。出土遺物は縄文時代前期のものが多く、居住域が周辺にあったものと考えられる。						

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうごねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成25年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第630集							
編著者名	米田 寛・小野寺純也・中川重紀							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2014年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 綰	調査期間	調査面積	調査原因	
北野 X III 遺跡	市町村 久慈市侍浜 町北野第10 地割9-1ほか	03207	G 00-1122	40度 15分 27秒	141度 47分 03秒	2013.11.01 ~ 2013.11.28	3,700m ²	久慈北道路 建設事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項			
北野 X III 遺跡	狩 場	縄文時代	焼土遺構 炭化物集中地点1基	1基 縄文土器・剥片・ 石器				
要 約	今回の調査では、焼土遺構1基、炭化物集中地点1基を検出している。遺物についても、掲載した遺物を含め3点のみの出土であった。調査区全域が農地造成による削平の影響を大きく受けしており、遺跡自体の詳細については不明である。							

ふりがな	へいせいにじゅうごねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成25年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第630集							
編著者名	福島正和・芋坪祐樹							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	西暦 2014年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 綰	調査期間	調査面積	調査原因	
小滝沢遺跡	釜石市片岸 町第8地割 113-1ほか	03211	MG 42-0398	39度 20分 26秒	141度 53分 39秒	2013.11.01 ~ 2013.11.28	1,060m ²	釜石市土地区画 整理事業 (片岸地区)
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項			
小滝沢遺跡	集 落	縄文時代 平安時代 時期不明	堅穴住跡 貯藏穴 土器埋納遺構 堅穴住跡 土坑 柱穴状土坑 焼土遺構	1棟 2基 1基 1棟 7基 4個 2基	縄文土器・石器・土 器製品（土偶片） 土師器	東日本大震災の津波浸水域で 床面標高4.5mを測る平安時 代の堅穴住居を検出した。		
要 約	小滝沢遺跡は急峻な丘陵の裾部分から丘陵からそれぞれ派生する小規模の谷にかけて立地しており、裾部では縄文時代の貯藏穴（フラスコ土坑）、やや低まった谷部では縄文時代中期と平安時代の堅穴住居を検出した。これらは標高4～5mの低地に位置しており、特に平安時代の堅穴住居は管見に触れる範囲で岩手県最低地を示している。貞観地震（869年）によって起きたとされる大津波との関係が注目されるが、遺構からは津波によって被災した状況はみられなかった。							

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集

平成25年度発掘調査報告書

印 刷 平成26年3月19日
発 行 平成26年3月24日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

発 行 (公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235
FAX (019) 625-3595

印 刷 (有)小松茂印刷所
〒020-0025 岩手県盛岡市大沢川原二丁目5-37
電話 (019) 623-6073
